川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九四一号

日川協加盟

平成十七年度六賞発表

No. 941

十月号

第11回 川柳塔まつり

《同　人　総　会》

と　き　　10月10日（月・祝日）　午前10時～11時半
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　３Ｆ　　生　駒
　　（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441）
議　事　　平成16年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
　　平成17年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と　き　　同　日　　午前11時開場・午後１時開会
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　４Ｆ　　金　剛　中・西
表彰式　　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
　　各地柳壇賞の表彰式を午後１時から行います。
おはなし　「世界遺産・紀伊山地の霊場と参詣道について」　三　宅　保　州
兼　題　　「若　　い」　（奈　良）　大　内　朝　子　選
　　「栄　え　る」　（大　阪）　前　　たもつ　選
　　「の　ぞ　み」　（東　京）　播　本　充　子　選
　　「例　え　ば」　（鳥　取）　新　家　完　司　選
　　「つ　く　る」　（岡　山）　濱　野　奇　童　選
　　「つ　ば　さ」（締切りました。）　河　内　天　笑　選
　　◎各題２句・欠席投句拝辞
　　出句締切　正午・午後４時半終了予定
会　費　　2,000円（記念品呈）・当日いただきます。

《懇　親　宴》

と　き　　同　日　　午後５時～７時半
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　３Ｆ　　葛　城
会　費　　7,000円
宿　泊　　ホテル・アウィーナ大阪　　8,000円（朝食付）

事前投句および懇親宴・宿泊の申し込みは締切りましたが、同人総会（同人のみ）・記念句会の当日参加も歓迎しますので、ふるってご出席下さいますようお願い致します。

主催　川　柳　塔　社

川柳あの手この手

河内天笑

去る九月十一日、「第19回堺市民芸術祭川柳大会」に於て、表記の題で約50分の講演をした。自分で選んだ愛すべき趣味〈川柳〉とどう付き合って行けばよいかを、分かり易く、全体を三つに分けて説明した。

その一、川柳に対する基本的な心がまえ

1、句会に係るさまざまな用事について積極的にお手伝いをする。つまり、元気な友達と一緒に好きな川柳の用事に係わっていられる喜びと誇りを感じつつ仲間意識を高める。

2、川柳を楽しみながらも、これを人間形成の修行の場と心得、怒らない心、赦す心を養って行く。

3、事情の許す限り多くの句会に参加して、人との出会いの機会を増やす。

4、すぐれた作品をたくさん知る。

5、自分の持っている柳誌や句報を精読して、とび切り好きな作品をピックアップして深く味わう。

6、よい作品からリズムや発想法、句の組み立て方などを貪欲に吸収する。

7、何事に対しても批判の心を持って、「自分ならこうする」という答をいつも持つ習慣を身につける（席題に強くなる）。

その二、作句上の注意点（基礎）

1、初歩的なミスをなくす（余計な送り仮名や誤字）。

2、推敲をして定形を守る。

3、句材を選択する（訓示的標語的な材料を省く。報告、説明句も作らない）。

5、自分や家族の自慢をしない。句の中で個人的な中傷をしない。差別語を使わないように気をつける。

6、難解句を押し付けない。

7、人に伝わる内容かどうかをいつも心に置く。

その三、作句上の注意点（応用）

1、作品のよしあしはほとんど句材で決まるが、内容の乏しい句材でも表現力でカバー出来る。デフォルメや意外性でユニークな作品に仕上げる。

2、どんぴしゃのことば探しに修練せよ。

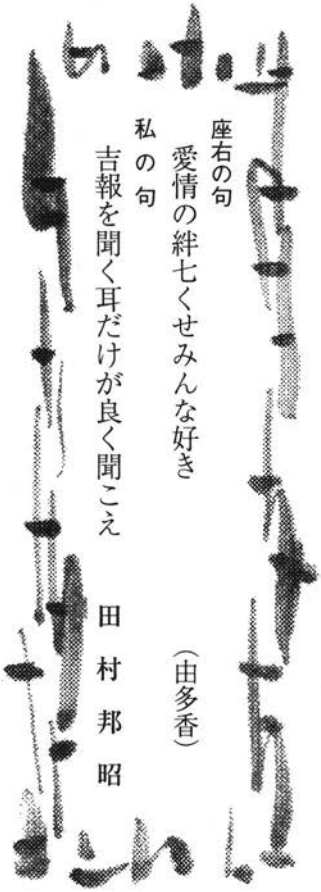
3、ことばの順序に気を配る（よくある失敗に、言いたいことばを、つい「上五」に据えてしまってその説明句に終わってしまう）

4、その言葉の持つ「意味の重さ」に頼ってはならない。

5、読者を楽しませ得る作品か、ペーソスに裏打ちされたユーモア作品なら最高。

以上たくさん欲張ってみたが、とことん苦しむことがとことん川柳を楽しむことだと分かって頂ければ有り難い。

「簡単にいい句が作れるのであれば、とっくに川柳やめてますよ」と中尾藻介さんがよく言って居られた事をいま改めて思い返している。



座右の句
愛情の絆七くせみんな好き　（由多香）

私の句
吉報を聞く耳だけが良く聞こえ　田村邦昭

川柳塔　十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「赤目・布曳滝」

■巻頭言　川柳あの手この手……河内天笑…（1）
日本語をダメにする省略語……波多野五楽庵…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌⑽……木津川計…（53）
自選集……（54）
水煙抄……板尾岳人選…（58）
愛染帖……新家完司選…（79）
平成十七年度　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞
茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞……（82）
誹風柳多留一一篇研究　2……（92）

日本語をダメにする省略語

波多野　五楽庵

大阪で開催されたある川柳大会に

デパ地下の試食目当に出る散歩

という句が発表された事がある。選んだ人も一流の作家。作句したのも立派な女性川柳家で、内容が立派だから入選したのであり、句の内容をとやかく言うつもりはない。が、「デパ地下」が気になる。

正直言ってデパートのない市町村が大半で、ましてやコンビニが多くなった現在では青森県でデパートと名の付く所が十もない。正確には行った事のない人がいるかもしれないデパートの地下売場の事で、そのままでは川柳・俳句の定型である十七文字から溢れるから、押し込むために省略したのである。この変な省略が、伝統である日本の短文詩を壊しかねない勢いで、使用されようとしている。

しかも、普段の生活会話にもない言葉が、省略の名を借りてまかり通る時代になってしまった。

多分、これは流行語の好きな日本人の性格そのもので、新聞や週刊誌によく見られるようになった。特に若い人達に使われるようになった省略語はメールを通してたちまちに広まってゆ

檸檬抄「順　序」……仁部四郎・藤田泰子共選…(94)
「　虫　」……牧野芳光選…(96)
一路集「まつり」……中崎深雪選…(96)
「祈　る」……中　宗明選…(97)
初歩教室「蜜　柑」……三宅保州…(98)
秀句鑑賞「同人吟……小西雄々…(100)
　　「水煙抄……白根ふみ…(102)
藤村メ女さんを偲ぶ……奥田みつ子…(103)
各地柳壇（佳句地十選／小西小雪）……(105)
柳界展望……(119)
十月各地句会案内……(120)
■編集後記（ひとこと／小久保和子）……楓楽・義子…(122)

座右の句
愛たしか湯呑みが二つ置いてある　（町　紅）

私の句
浮き沈み越えた卒寿の笑い皺　三島淞丘

く。この戦中の暗号のような省略語が、万葉集や方丈記などの優雅な日本語を死語にしてしまいかねない危機にある。

そのごく一部を紹介するが、分らなくてあたりまえ、読者の皆さんの晩酌のつまみに、奥さん、或いは旦那様と二人でクイズゴッコをしてみてはいかがですか。

百均　（百円均一の店）
シブカワ（渋くて可愛い）
スポカジ（スポーツカジュアル）
フリマ　（フリーマーケット）
Nステ　（ニュースステーション）
ドライチ（ドラフト一位）
産直　（産地直送）
リハ通い（リハビリに通院する）
デコレ　（デコレーションする）
合コン　（男女合同コンペ）
面パト　（皆さんの最も恐い覆面パトカー）
ドタキャン（土壇場でキャンセル）
探せばいくらでもあります。ファミレス・チョイ役・デジカメ（これなどは正当な地位にあります）チンをした・冬ソナ・着メロ・ダメモト・ガングロ・ラブコン・自己中、これらの発生源はマスコミ・警察などかもしれませんが、短文芸である短歌・俳句には出て来ません。川柳の地位が云々される今こそ、きれいな川柳を考えて下さい。

川柳塔

河内天笑選

横浜市　菊地政勝

倖せの動悸を妻と分かち合う
呆けきざす妻にやさしくなってゆく
大安にこだわる妻に歩を合わす
今のうち折ってください薫る百合
孫のうそ慈悲の気持ちで聴いてやる
横並び意識で食べるうなぎの日

海南市　三宅保州

亡くなられてはじめてお歳知りました
ご先祖に会っても顔がわからない
不便でも不幸ではない車椅子
多機能と言われて買うのやめました
デジタル化時計回りも死語になる
あなたのことになると深入りしたくなる

三田市　北野哲男

笑顔よしエンマ嫌がるタイプだな
指切りの人と敬老会で会い
お金では勝てぬ口なら任しとき
丸めたらおにぎりほどの水着なり
フェロモンの働きもある汗をかく
年金を四十年は貰う気で

大洲市　中居善信

スローテンポの人に用件言い忘れ
斎場の隅でひそひそとは無粋
キスくらいしたいと思う下心
仁王様は鬼だとばかり思ってた
下ごころ何時もにこにこしてござる
死に場所を探すメルトモとは哀し

宇部市　平田実男

燃料は赤字国債日本丸
仲人へ離婚の時も世話になる
僕だけの君と思っていた誤算
洗髪も洗脳もする美容院
歳の順だから座れた床柱
リフォームをしてます入歯アデランス

鳥取県　新家完司

夏休みなのに子供の声がせぬ
あそびましょ貧乏神が戸を叩く
血液はどろどろなもの脅かすな
メイド・イン・チャイナのチャックすぐめげる
網戸から吐息が洩れる熱帯夜
たこやきの形の星で地球という

西宮市　西口いわゑ

風のように花のようにも生きたいな
いつまでも夢をください天の川
ベランダの花わたくしのイエスマン
生きている水の流れに添うように
手作りの菓子ではずんでいる仲間
トップとは頭を下げるのも仕事

茨木市　藤井正雄

逆転勝訴長い道程今晴れる
いつもの屋台いつもの顔のコップ酒
出し切った力敗者も凛と立つ
師の訃報　記憶逆さに回り出す
石鹸の泡から父と子の会話
リストラの風が序列を吹き飛ばす

奈良県　渡辺富子

三〇〇分待つ覚悟して愛知博
もったいないを忘れ地球を喰い荒す
ビル乱立街もこころも渇き出す
耳元の甘い囁きから狂う
泣ききって女にっこり魔女になる
銀河まで手押し車で辿る母

藤井寺市　太田扶美代

この駅にふたたび戻る影法師
鈍行のここから一人旅になる
診察券と相談をしたスケジュール
わたくしの根っこにあった人見知り
初恋に繋がるふる里の便り
見比べる悲しい癖がなおらない

堺市　宮本かりん

もうひと押ししてみなさいと壁がいう
わたしの頭消しゴムよりもよく消える
過去はもう洗い流してきた笑顔
ゆらゆらと二人で揺れている余生
冷静に見てくれている他人さま
その上に夜はメールでまだ喋り

和歌山市　古久保和子

冬眠をしてますクーラーの中で
ビヤガーデン河童の皿に水をやる
引き算をやめると見えてきた明日
ニガウリの手触りからも効きそうな
花屋から出てくる人はみな紳士
竹トンボ飛ばした空を探さねば

和歌山市　喜田准一

忘れたい過去へ切り取り線がない
電話では逢いたいような言い回し
この辺でいいではないか済んだこと
脚力が弱ってからの向かい風
今日もまた同じところで行き詰まる

和歌山市　上地登美代

図星だなぁ眼が立ち泳ぎしはじめた
嬉しいとみんなと握手したくなる
美人になるリフォームならばしてみたい
菜園を丸ごと食べて夏を越す
温泉の湯に流される肩の凝り

和歌山市　木本朱夏

真夏日をゴーヤも食べて竹踏んで
虫ピンに突き刺す恋の戦利品
少年のポケットにある秘密基地
八月の絵本いのちの話など
激辛のカレー命に喝を入れ

和歌山市　田中みね

一年ぶり皆の元気に会う夜市
夜市から無事に帰って鮭茶漬け
年中無休臓器へ感謝申し上げ
残したら碌な事ない遺産分け
美人だけに惜しいと思う無愛想

和歌山市　桜井千秀

クーラーの音わずらわし熱帯夜
寝つかれず独り飲んでるソーダ水
ああ八月あなたこなたが恋しかり
屁理屈で繕う知恵はまだ確か
同じこと繰り返してる母と居る

和歌山市　福井桂香

あり余る時間があって何も出来ない
方程式通りにいかぬリハビリも
秋風が少うし恋しい炎天下
ハガキ一ぱい来るうれしさ
デザートは薬色々二三粒

和歌山市　榎原公子

夏を手玉にオクラの花の初々し
温暖化ゴーヤすくすくぶら下がる
チャンス到来主役に躍り出たゴーヤ
思うこと多しぶつぶつ葡萄熟れ
おおらかと言ってくれるな　どじなだけ

和歌山市　福本英子

妥協してくれそうなのは亡夫だけ
独居老人リストに載せてほっとかれ
車椅子のお世話になった日の痛み
陀羅尼助軽い風邪なら効くらしい
風鈴もメダカも昼寝したまんま

和歌山市　松尾和香

残高と生命線を重ね合う
星に住む夫を仰いだ始発駅
燃え尽きる一夏の恋蝉しぐれ
健康な嫁の気配り青い空
産湯からつかって効かぬ美人の湯

和歌山市　玉置当代

一日の予定が残る炎天下
ストレスは無いのか蟻も炎天下
勿体ないがこびりついてる整理下手
ＤＮＡ嫌な癖までまる写し
どくだみの白に疑う余地はない

和歌山市　楠見章子

ストレスへ安い皿から割っていく
ひまわりが哀しい過去を秘めて咲く
笛吹けば走り出すのもＤＮＡ
カルシウム不足で鈍るジャンプ力
白い砂浜みんな美人に見えてくる

和歌山市　堀畑靖子

パラサイトなのに威張っている娘
ニートから脱けた額に光る汗
森光子さんを目指してストレッチ
電子辞書わたしの強い味方です
言い訳をする目があらぬ方を見る

和歌山市　武本碧

懸命な汗に頑固もほだされる
ひと言が針の筵になる怖さ
バーチャルな声に溺れるゲームっ子
東奔西走　蟻はいのちを蓄える
弱音吐き同情引いて立ち直る

和歌山市　松原寿子

保管しておく文束にある絆
てのひらで涙の毬をいとおしむ
一途さは今も変らず慕い切る
空洞へためいきばかり落ちてくる
切り札はいつでも出せる守備範囲

和歌山市　山口三千子

玄関の網戸花木が目かくしに
彩褪せた花に我が身がだぶりだす
何もかもごっちゃ男の台所
聞き流すことも一つの処世術
一歩退く癖付きいつも運逃す

和歌山市　宮本三喜夫

水不足　生理落花で蜜柑生き
休みの日緑深まる山歩き
通販で買物出来る楽しさよ
産みたての海亀卵保護される
生きるため競走激しさ見せられる

物忘れ話の種になる老後
若い気で居ても写真は嘘言わぬ
税金の無駄を許さぬ見張り番
住み慣れた田舎　都と思ってる
身に付いた作り笑いも処世術

海南市　谷口義男

あの方の回転軸に心が無い
お金より友を大事にするお歳
留守電へ不良のママと入れてある
花で負け実で勝っている枇杷バラ科
天下り路傍の石が泣いている

海南市　堂上泰女

緩和ケア往きの切符の者ばかり
和歌の浦を右手に臨む紀三井寺
夕涼み銀波が映える片男波
県内と言えど三〇〇キロ離れ
わいわいと騒ぐだけでは芸じゃない

和歌山県　中後清史

ディスカバリー宇宙に遊び星月夜
涼風にさやさや踊る稲の花
起床して足腰肩の機嫌診る
先ず妻が介護保険の世話になり
送り火の消えた川面を埋める闇

鳥取市　林露杖

ケータイを購ってもらって家族の輪
でこぼこの道を愉しむ足の裏
順路など無視して走る日暮れ坂
道順を下り落したもの捜す
踵射られて階段が上れない

鳥取市　徳田ひろこ

応援にバケツ太鼓の楽隊よ
竹炭と備長炭の合唱だ
よく咲いてくれた花たち有り難う
愛はみな使い果たしてから逝こう
土曜夜市いもの子洗うように混む

鳥取市　杉本孝男

娘に貰うネクタイがはで妻が妬き
ネクタイの数だけ思いが綴られる
自慢するものがないから聞いている
妻の留守無愛想な猫離れない
悪い奴ほど正体を明かさない

鳥取市　田村邦昭

終戦の日は紙爆弾で知っていた
戦争をしない軍隊千鳥足
サマーワは戦場でなく水汲み場
シュプレヒコール意味は何だか聞いてない
古い墓洗い祖先の声を聞く

鳥取市　上田俊路

鳥取市　中村金祥

リストラへ片道切符渡される
わらべ唄テロの耳にも届けたい
ハイテクへ人間性がうすれゆく
幽霊も夏バテしてる熱帯夜
季節まで俺に似たのかぼけてきた

鳥取市　西村黙光

鼻髭を伸ばし陶冶の詩へ炎える
妻の酌時にゃ楽しい詩も作る
飲兵衛へ電話してみる燗冷まし
童謡がタイムトンネルくぐらせる
口喧嘩好きな男の燗冷まし

鳥取市　吉田弘子

火に油　覚悟の上の口答え
下書きは一晩寝れば別の句に
眠りから覚めた古着の布草履
新家庭古いはなしに蓋をする
当りまえを褒めてやる気を倍加させ

鳥取市　加藤茶人

殺されて博愛主義の愚か知る
ありがたみ増す説教の足しびれ
その仮面取れよ酒では気は晴れぬ
災いは口からあらぬ事喋る
パチンコのチラシが派手に日々平和

鳥取市　録沢風花

らくらくと昔は翔んだ水溜まり
来客があるから出来た大掃除
一日の予定半ばでダウンする
親友の電話に元気とり戻す
金婚の夫婦ようやく海は凪ぎ

鳥取市　永原昌鼓

文明に不意打ち当てる電池切れ
さあさあと老いの思案は捗らぬ
夏バテの防止昼寝と旨い酒
魂胆は見え見え両手揉んでいる
夏バテは知らずよく食べよく笑う

鳥取市　西川和子

着物か服か魂ゆれる空模様
寺参り魂洗っている講話
魂を抜かれてからのお付き合い
魂が徘徊してるから空ろ
魂を五　七　五で遊ばせる

鳥取市　福西茶子

乗り越えた山高いほど懐かしい
身辺は綺麗いつでもさあどうぞ
もう少し女でいたい帯結ぶ
反抗期親も通ってきた道だ
欲ひとつ唱えて寺の鐘を撞く

郵政法　闇に崩れて振り出しに
内閣は左右に揺れて治まらぬ
追伸のむき出し文に迷い出る
お互いに試す心を諧めている
慈しみの目を万物に向けたいな

鳥取市　山本益子

弥陀の手となって娘が母を看る
つれづれに人を恋しく思う老い
神様にお礼を言うて横になる
踏み台になって一世を終わりそう
今いちど逢いたいひとは遠く住み

鳥取市　近藤佳子

朝の音いつもの順に聞こえだす
寝不足へ太陽ギラギラ照りつける
喋り過ぎなんか寂しくなってきた
古里に亡母のぬくもりまだ残り
ちっぽけな事忘れよと窓の月

鳥取市　植田一京

人様の長所ぬすんで糧にする
母さんが恋しくなった五月病
母さんはいつでも温い傘になる
母さんの手は荒れてるが温かい
母さんには広くて温い胸がある

鳥取市　近藤春恵

これからはわが道を行く傘寿坂
隠し場所あちこち変えて見つからぬ
楽譜などどこ吹く風か怒鳴る歌
リフォームばやりお寺に寄進頼まれる
生者必滅ゴミを残して誰も逝く

鳥取市　美田旋風

気にせずにやりたいことをやってみる
はっきりと言えば相手も傷つかぬ
できるだけ合わない人と会わんとこ
書くならば余分なことはそぎ落とす
話すなら四方山話するがいい

鳥取市　春木圭一郎

夜の海見てろばあちゃんスーイスイ
歳見せぬ運転ですが後三年
指示通り押して機械に礼言われ
着信アリ　ハテOKはどこを押す
ソレ解散刺客放って火蓋きる

鳥取市　埒寛子

宇宙みて早く帰れと祈る星
蝉の声大合唱で野口さん
孫をみていると遺伝子生きている
藁草履軍歌と共に消えました
楽しい過去箱にしまって祀っている

鳥取市　宮脇道子

鳥取市　武田帆雀

健忘症メモしてメモの置き所
疵口をきれいに拭いて王手飛車
有象無象みな呑み込んで胃の掃除
見極めてから角を出し槍を出し
新人のセールスさんに世は辛い

鳥取市　土橋睦子

几帳面すぎて兄貴が嫌われる
好奇心あるのに手足ついてこぬ
粗大ゴミ過去の自慢が見え隠れ
明日使う鎌を研いでる姑元気
魚偏十五知ってりゃ御の字だ

鳥取市　土橋はるお

おいしい瓜食べて忘れる歯の痛味
正論も反対論もむずかしい
ゴミ漁るカラス勿体なさそうに
掬われるために化粧をした金魚
見つめられるとだんだん粗が増えてくる

鳥取市　平尾菜美

影武者に押され飲んでるビタミン剤
ほだ火から余力ちょろちょろもらってる
切り株の素通りどうかお許しを
残り火を抱いて狂想曲を編む
明日が好きだからひたすら目を瞑る

鳥取市　鈴木一弘

廃母校タイムカプセル埋めてある
ぬくい飯食える幸福胃に満ちる
変化球来るから姿勢くずれます
風向きが変らぬうちに窓を閉め
風鈴の中で金魚は夕涼み

鳥取市　岸本宏章

寒がりで暑がり夏を我慢する
自己主張したらどうです稲の花
親しさの中の礼儀が難しい
ゴキブリを叩くときだけ妻が呼ぶ
謙遜が過ぎると自慢にも聞こえ

鳥取市　岸本孝子

姑が逝き夫やさしくなってきた
自慢することがないから隅にいる
夫婦茶碗欠ける日などは信じない
温暖化詫びてエアコン　オンにする
年一度食べるうな重上にする

鳥取市　下田茂登子

老母の願い聞いて下さい仏さま
一コマのドラマにこころ癒される
ストレスはビールを呑んでみたものの
夫の目気にしながらに生きる老い
常識を唱え常識知らぬ人

鳥取市　有沢せつ子

外出へ持物リストチェック要り
追い越して見たいな亡母に似た日傘
バス待ちを通る車がみんな見る
ビヤガーデン女性客いて華があり
バイキング若いグループみな陽気

鳥取市　倉益一瑶

涼しい瞳少女は羽化のど真ん中
汗知らぬ少年あくび繰り返す
外面で人の重さは計れない
ネクタイを取ると涼しくなる話題
紙つぶて涼しい顔で受け流す

鳥取市　夏目一粋

身のほどを知ってさらさら流される
貧乏を糧とする術知っている
この欲が赤信号を無視しだす
禁酒していたら出世はしていない
旱天に合わせて雨よありがとう

鳥取市　福田登美

墓参り優しい風の吹き溜り
風に散る波乱を知らぬ水中花
正直に生きて苦労がつきまとう
気どらずに自分の道を生きていく
愛の灯を照らし続ける新仏

鳥取市　山宮愛恵

世の中のみんながみんな忙しい
しきたりが薄れだんだん気が痩せる
元気かねメダカへ朝のご挨拶
ゆったりとたっぷりこなすスケジュール
なるようになるんだ力むことはない

倉吉市　牧野芳光

天の心は数多の雲を遊ばせる
自己愛の芯がだんだん太くなる
先がないのか気短になっていく
金要らぬ国に行きたし金はなし
ブランコに忘れたものが置いてある

倉吉市　最上和枝

電子辞書無いが手垢の辞書がある
公表をしたばっかりに買う土産
心臓にビタミンあげる花を買う
哀歓の七十路を知っている指輪
焼香のしんがり足もしびれてる

倉吉市　松本よしえ

温泉で揃いの浴衣フルムーン
嫁に出す孫の浴衣も縫い上げる
ホルモンが枯れていらいら不眠症
ホルモン焼き食べて元気を倍にする
心臓がストすることもある余生

倉吉市　山中康子

撒水に勢いづけて憂さ晴らし
点滴に延命ほっとしています
反対派宙ぶらりんの票よめず
三姉妹若い順から売れて嫁く
順序どうあれ三食昼寝つき

倉吉市　山本玲子

心臓にやきついている原爆忌
野良猫が一瞥をして通り過ぎ
鰻丼を前に目尻がたれていく
一気飲み祭りを煽る男達
棘棘しい薊も蝶へ気を許す

倉吉市　野口節子

借金を催促したら凄まれた
巨万の財こつこつ溜めてポックリ死
ひしひしと老いの近付く音がする
毒を持つ花が一入美しい
大らかな花の笑顔に癒される

倉吉市　米田幸子

猫の額ほどの庭にも万花咲く
母ちゃんの胸に溢れる蜜の味
用済みになった親父の席が無い
じいちゃんは音に聞こえた頑固者
無い袖も振らねばならぬ義理がある

倉吉市　猪川由美子

郵政ユーセー新種の蝉が暑く鳴き
老若がヤバいキモいで揉めている
クーラーに扇子や団扇追いやられ
孫出来て眠れる母性目覚め出す
鏡見る時が減りゆき女老い

米子市　政岡日枝子

海を耕やすそんな島から出られない
体臭に似た風が吹く路地の裏
幻を追うより今日の炊飯器
おろし大根夏はからくて暑いもの
肩組めば誰も優しい息してる

米子市　白根ふみ

八月忌　実兄も叔父叔母被爆者で
八月六日御影掲げる大田川
半陰を日傘満足げに歩く
藍染めの浴衣におんなからませる
打ち水に鉢の匂いがまい上がる

米子市　林瑞枝

うす絹の天女ほほ笑むあかね雲
常識を破り結んだ赤い糸
お母さんのお腹で花の芽が育つ
アロハオエ歌った友も遠く住む
歳の差を越え接点の嫁姑

米子市　光井玲子

こだわりがすっかり解けて空仰ぐ
洗っても落ちぬ心にきずがある
説教もどこ吹く風と反抗期
慌て者家の中でもけつまずく
末っ子で母の愛情一人じめ

米子市　澤田千春

役に立つ梯子を両のポケットに
小さな森わたし一人の小宇宙
木もれ陽にやさしい人の声がする
助走路のリズムが合わぬ深呼吸
きびしくてそしてやさしい夕茜

米子市　中井ゆき

冷蔵庫買い替えた分生きのびる
ミニトマトなったうれたと言ういやし
造花までくたびれた顔炎暑です
ぐるり庭ありがたいけど荷が重い
熱中症まずもの言わぬ花に水

米子市　青戸田鶴

夾竹桃六十年を語りつぐ
ヒロシマの絵を見てきたよ悲しいな
登りより下りの方がつらいです
老人をだます電話が鳴りひびく
一列に並んで狂う曼珠沙華

米子市　野坂なみ

よろこびが生きるパワーを肥らせる
盆すぎて海月のけはい波の面
子離れの仕切り鳥たちから学ぶ
的睨む心が今はうすらいだ
コピー食品　一度試して見てごらん

米子市　木村春枝

雑草はどっしり生きて草いきれ
不器用もすいすい世間泳ぐ夢
いたずらな釘だわたしを引っかける
自家用車　内緒話が待っていた
今日もまた狭い器の中泳ぐ

鳥取県　深田倶久

蚊も虻も払って盆の墓洗う
迎え火の向こうにうつつゆらゆらと
お隣も浴衣でのぞく遠花火
酒酌めば喜寿の同窓幼顔
ぶっこわす役者になって郵政法

鳥取県　山下節子

正確な寝息に安堵して介護
青い目の嫁が封建制変える
夜なべする母の指貫光ってた
寺の屋根そっくり返り天仰ぐ
ぽつぽつがほどよいのです古稀の坂

鳥取県　蔵本悦子

ぎらぎらの男が夏をよく食べる
本当の愛逆転はないはずだ
民営化赤いポストが落ち付かぬ
肝だめしオバケも予定組んでいる
キムジョンイル頼むよ核を捨てたまえ

鳥取県　石谷美恵子

浴衣から二十歳の夏が匂いたつ
来て欲しい手紙は地図が入れてある
ブランドで包む魂飢えている
指輪キラキラことさら見せる手の動き
反物から雑巾までの布の旅

鳥取県　国森武子

蝉の声忘れるなよと鳴いている
ゆっくりと蝉の声聞き昼寝して
短かい命あわれんでいる蝉の声
盆は来た　も少し馬力かけようか
娘が来たらがんばったよと言えるよう

鳥取県　澤裕子

雑草と今日もいくさをしてひとり
母の目を仰ぎ赤ちゃん母乳飲む
ホルモンの不足か根気続かない
疲れなど知らぬ子供の鬼ごっこ
いい汗をかいて夏バテ寄せつけぬ

鳥取県　谷口次男

過疎の村人も緑も減ったなあ
仲間には良いのもあるとカビが言う
汚されてマグマ爆発海の底
ヘナチョコだ平和ボケした日本国
漱石と子規が並んでネット裏

鳥取県　竹信照彦

クーラーを拒否して汗を拭いている
真夏日の子守日蔭をさすらって
雨が欲し早明浦ダムも鳥取も
盆が来る故人を偲ぶのも三日
暑いから熱いお風呂で汗流す

鳥取県　盛田夢路

長かった心の闇に朝日さす
悪臭の政界ドラマうんざりだ
落雷でエレベーターの中にいる
ま夏陽と秋風同居うら盆会
灼熱に敢然と立つひまわりよ

鳥取県　佐伯やえ

よだれかけ秋のにしましょ地蔵様
泣いたペン今美しい虹を画く
無にかえる心に月が満ちてくる
わら屋根に親子の対話もどる秋
写経して心の隅に灯をともす

鳥取県　鳥羽直市

もうすまい自慢したあと悔い残る
前向きに生きてもしもを遠ざける
幸せだ生かされながら夢を積む
前向きに生きれば趣味も楽しめる
前向きに生きる我慢は苦にならぬ

鳥取県　鳥羽玲子

秀才も老いて算数まごまごと
みずからを見せないように生きている
趣味の道煩らわしさものりこえる
音の質聞きわけて耳よく捌く
しっぷ薬信じ過ぎての仇となり

松江市　津川紫晃

もう少し歩こう夕焼けうまいから
ひらがなの余韻へ風が来て座る
プライドも捨てれば軽くなる歩幅
景気よい音で他人の家が建つ
みそ汁の湯気今日一日の勇気湧く

松江市　佐野木みえ

名水を口に含めば生きる活
冷蔵庫替えて私と生きくらべ
一言が過ぎてあの山荒れてきた
宍道湖の夕日しっかり旅の宿
人並の幸せでいいプチトマト

松江市　川本畔

雨が降る布団を被ることにする
忘れたい忘れたくない影と居る
仲直りしようと風が低く吹く
電気消し私も消えることにする
スランプがカナカナ蝉を聞いている

松江市　三島淞丘

高らかに笑って福と二人旅
二階から明るい笑い降りてくる
思い出し笑いしている招き猫
泣きなさい笑いなさいと盆の蝉
カップ持つ写真いびつに笑ってる

松江市　安食友子

数かずの笑いのねたも希少価値
空元気そこらここらで補給する
助け合う流れの水もシンプルだ
永遠のポエム夢見るごっちゃ混ぜ
誰からの束縛もないまたごろり

松江市　銭山昌枝

ラッキーカラー今日は何も彼も黄色
森林浴声までみどり色になる
満期にはなったが利息蚊の涙
無農薬虫が試食をしてくれる
花火師の魂が散る闇の中

松江市　小川注湖

ストレスを鞄に入れて帰路に着く
ライバルを越す道探し運も付く
あれこれと選ぶ土産に浮かぶ顔
あの星は夢いっぱいに光ってる
ポケットのお守り撫でて家を出る

松江市　松本知恵子

いち日を松葉牡丹が誇り咲く
太陽で仕上げよろしく梅を干す
山積みへやたら郵政言いたがる
付き合いのマイクの十八番聞いている
予約席虚しく風が待つばかり

出雲市　園山多賀子

梅雨明けて噂の女走り出す
価値観に戸惑いがあり卒寿とか
分限は弁えているミニトマト
蛇行する川よお前も淋しいか
惚け防止自問自答を繰り返す

出雲市　伊藤玲子

やわらかな話が好きな長い髪
温もりが武骨な手から流れくる
恋文のようなネクタイさし上げる
橋渡る待ってたように蛍舞う
わたしの手こぼれた種が咲かす花

出雲市　石倉芙佐子

もう少し研いで見ましょう頭脳線
長いこと私曲線書いてます
日の丸に一直線に進んでた
平行線のままで終った昔々
知らぬ間にボーダーライン引いてある

出雲市　持田多輝子

母の日に母と背中を流しあう
金魚鉢水とり替えてよみがえる
プライドと見栄が斜めに交差する
つじつまの合わぬ歯車きしみ出す
合併でシャッター下ろす店が増え

出雲市　岸桂子

脇役でいつも余裕をもっている
二人居て黙秘空気が動かない
涙腺の弱さはきっと母に似る
人並に人に迷惑かけている
ふらっと来て波紋残して去った人

出雲市　多々納テル子

図書館で暑さ凌ぎをする新聞
熱帯夜また救急車通過する
期限にはまだ余裕ある七十坂
お陰さまわたし出掛けて夫元気
無理するな声かけ合って今日も暮れ

出雲市　小白金　房子

絵羽浴衣心ふれ合う踊りの輪
紫蘇ジュース　ワイングラスの味で呑む
流木が芸術となり光り出す
昆布売り世間ばなしも置いて行く
同窓会老いた心の皺をのす

出雲市　森　茂美

あれからも楽でなかった六十年
一杯が度を越すこともある元気
一坪の畑に夏を呼ぶトマト
目を瞑り今日の出来ごと忘れさす
子を背なに崖とびおりた島と聞く

出雲市　佐藤　治代

手抜きして空しくなった老いの膳
賑やかな事へだんだん背を向ける
てのひらで温めている花の種
此処かしこ箍が緩んできた命
嘘ひとつ心の奥で揺れている

出雲市　久谷　まこと

迎え火に虚しい愚痴を聞かせてる
生かされている事忘れ愚痴ばかり
雑踏におぼれて見たい独り者
親離れ一人前の理屈言う
うっかりも毎度の事の呆けはじめ

出雲市　城　多喜

わたくしが優しくなれるティータイム
溜息が喉元すっと抜けてゆく
目の中の空は今でも青いまま
赤を着る反抗心があるように
一瞬の迷いが道を逸れてゆく

出雲市　小豆澤　歌子

朝顔の数も淀んでくる酷暑
黄昏れて答合わせがまだ出来ぬ
いくつもの迷いを解いた交差点
虚しさを笑って零す百日紅
仕合わせが傾かぬよう棒を足す

出雲市　多久和　敬子

パソコンで予約しました旅の宿
倦怠期　心が揺れるクラス会
七十歳まだ現役を続けてる
出雲弁　孫に伝えて丸い背
野菜園　草と野菜が競い合う

出雲市　富田　蘭水

只今という躾ほど孫にする
愛の辞書私の命燃えている
太陽にすべてを吐いて決断す
勿体ない言葉が抜けきらずに老い
今生かす事の大事さ刻みつけ

出雲市　吉岡きみえ

かざらない言葉に情け溢れてる
人情をつめていただくナス キュウリ
風鈴とたわむれに来た白い風
ささやかな給料もらう年金日
正直に生き平常心保ってる

出雲市　小玉満江

いやだとは言えず苦しむお人好し
仲良しへ呆けた振りしておどろかす
今日もまた水難事故に海も泣く
ドンドコドンおろち踊りの汗が跳ぶ
お値段も安くおしゃれなチャイナ製

出雲市　青山久子

飛んでいるだけで敵にされる蝿
すぐきれるわたしに贈るカルシウム
赤い靴履いても転ぶ足の裏
死亡欄みんな他人であるけれど
ちょっとしたことが幸せ朝の窓

雲南市　毛利幸

ロボットに知能指数で負けている
六十路坂未だ明日が掴めない
語るほど自分の無知を露呈する
愛嬌は女の宝紅を引く
熱愛も肌が合わぬと右左

島根県　伊藤寿美

かじか啼く寺白骨の御文章
三回忌悔いを捲ってばかり居る
賑やかに集えば仏も灯に戻る
身に合うた暮らし残してくれた亡夫
出雲路で大観に会う富士に会う（足立美術館）

岡山市　井上柳五郎

返信のない友案ず土用波
石橋を叩きチャンスを遠くする
いい笑顔あれがしあわせ呼んだのか
兵営記念アルバム故人ばかりふえ
眼の手術あらはずかしや紙オムツ

倉敷市　小野克枝

母に書く幸せと書くミニレター
継ぐ子なき鋏の今日も切れすぎる
千羽目の鶴を折る日は晴れるだろう
裏切りの言葉を飾る微笑かも
抜け道をさぐる男の妻楊子

倉敷市　井上富子

苦言という愛をじっくり噛みしめる
盃がくだを巻いてる荒れている
時代という波に工夫を乗せて漕ぐ
世相を縦に情けを横に紡ぐペン
真正面から厳しい野次が飛んでくる

倉敷市　撰　喜子

美しい花の寿命を守る刺
備えあっても憂いの残る低金利
備忘録いらない妻の健忘症
空腹に避けて通れぬ焼芋屋
三遷の教え空しいビルばかり

美作市　山本玉恵

美しい夢が見たくて身づくろい
ちぐはぐな愛を紡いでたそがれて
歯車がかみ合う今日はうれしいぞ
一瞬の風に破れし夢一つ
魂の深い所に積んだ恩

美作市　大石　あすなろ

まだ燃える火種つつきに来て困る
耳うちをされて流れを取り戻す
いい風が吹くまで力溜めている
マニフェスト迷走ばかりくり返す
消化不良ばかりで困る予定表

美作市　小林妻子

励ましのポケベルへ今呑んでいる
迷わずに土と話して来たいのち
孫達も勉強らしい長電話
用なしの仮面を捨てた終電車
まだ脈があるのか鉛筆が折れる

美作市　福原悦子

深呼吸して正義感を受け皿に
後編の夫婦は無理をかけ合うて
家計図を汚さぬように草刈機
駆けつけた父の横顔本ものだ
少年も鞘を出て行く鼓笛隊

真庭市　福嶋智恵子

喪が明けて鎮魂の酒墓碑に注ぐ
孫達の迎え火焚いて父迎え
盆の客甲虫つれ空の旅
甲虫の相撲孫にも贔屓居り
ボロジーパン孫感覚は俯に落ちず

真庭市　国米きくゑ

夕立が縁となって今の幸
無になってこれから先を考える
他人の痛みわかる優しい娘に育つ
立秋の日も三十度上回り
青春の血が炎えている甲子園

竹原市　岩本笑子

セミ　トンボ命乞いなどさらに無し
涼風の先に我が家の猫がいる
大　中　小ビールもよーく冷えてます
真っ直ぐに生きても苦労まだ続き
雨ほしい蛙で空を見ています

竹原市　小島蘭幸

転勤しましたふるさと発で出すハガキ
赤バイクで走れるふるさとの風よ
空になる無になるふるさとの風だ
欲張りになろう風呂敷いただいた
車で来ました飲みたくないのです

竹原市　正畑半覚

ヒロシマの夏熱くなれ熱くなれ
青々と翼ひろげて夏紅葉
休んでる蟻に出会ったことがない
灯籠の苔はおやじの汗だろう
油断してコンピューターに使われる

竹原市　時広一路

独り言しか喋れない家一軒
高音の無い五線譜を持つわたし
寝るための夜だ頭は空にしよ
ダイエット八キロ膝に感謝され
日に六杯私のための水を飲む

竹原市　森井菁居

店じまいセールが殺し文句めき
現役の頃の未練を追いつづけ
まあだまだ生きるつもりの背伸びする
あら探し止めとこ格が下がるから
人間はお馬鹿さんねと星が言う

竹原市　石原淑子

丸い背を伸ばそう秋の風の中
せっせっせ孫の掌合わす太い指
もったいない口癖いつか孫に解け
生きていく核に家族と柳友と
新札は大事に底に置いたはず

美祢市　安平次弘道

病院の廊下本音もれて来た
火をたけば確執だけがもえ残り
選択肢の一つにコーヒーがぬるい
仏にも鬼にもなって行く自信
欲のない顔で迷路を抜けてきた

唐津市　井上勝視

惚れてます欠点見せぬ苦労する
お互いの欠点庇い傘寿越え
欠点だらけ規格外れでいい夫婦
誰よりも我が欠点を知る不安
頑固さは欠点であり長所でも

唐津市　市丸晴翠

子の帰省親の財布も舞い上がる
指輪ないばあちゃんの手の温かさ
布おむつで育ち老いては紙おむつ
朝顔のように昼には萎む祖父
百までは生きると義歯を勧められ

民情に疎いバッジの天下り
リストラで地盤沈下のおやじの座
突風に洗濯ばさみうろたえる
有名になるとすぐでるアラ捜し
語彙捜し街の本屋を梯子する

唐津市　久保正剣

過去帳も見たことがない不信心
告げ口もみんな時効の古希の会
タイミング計ってぽつりガン告知
泳ぐ日は別の水着を持っている
ばんざいの形で軍手干してある

唐津市　樋口輝夫

ライバルを褒める度量を見せておく
生きてるな一部屋灯る独居老
決まりだな帰る仲人軽い足
禁酒した分が貯まらぬ金の性
神仏に願い分けする欲の数

唐津市　宗水笑

発覚のたびに粛正くちにされ
感動は潮吹く勇姿紀伊の旅
忠言の部下を少々もてあまし
ライオンのようにわたしももつが好き
ご主人に媚びぬ我家のペルシャ猫

唐津市　山口高明

玄奘の辛苦を辿る火焔山
ローランの美女と再会ニーハーオ
カシュガルで馴染みの黄砂ニーハーオ
シシカバブくわえる若い気の入れ歯
みずうみが出たり消えたり砂漠道

唐津市　坂本蜂朗

ストレスを詰めた鞄を妻ほぐす
草分けの苦労話で祖父機嫌
つまずいた石が若い気たしなめる
戦争を知っているから平和論
シャボン玉それぞれ虹を抱いて飛ぶ

熊本県　高野宵草

手話の舞　同級生が若く見ゆ
ご心配もしも若しもの度が過ぎる
限界を意識してから家族主義
古代船見送り無事を祈ってる
兄弟喧嘩両方聞いて口出さず

熊本県　岩切康子

心の塵には届かない拭き掃除
すこしずつ情けがたまる胸の中
階段を下りきってから躓いた
外せばすぐ円になる輪ゴムの自負
是非を問う切り取り線にある不安

熊本市　永田俊子

松山市　丹下　美津子

思い出は愚羅仏庵をひと周り（薫風先生と）
途切れとぎれの玉音聴いた脂汗
日韓交流歌声からのいい仲間
屋台の灯　保守革新といて楽し
花のよう笑って娘嘘をつく

松山市　古手川　光

水瓶の目減りへ今日も空仰ぐ
蝉しぐれ一時過疎が熱くなる
お隣の国より近いヨーロッパ
葬儀社の仕事に合わぬえびす顔
一片の雲満月を引き立てる

松山市　高橋　宏臣

星一つ今日を占う朝の窓
うなずいて分からぬピカソ眺めてる
眺めてるだけにしようと言葉のむ
人臭さむき出しにして蝉時雨
とどめさす意見ゆっくり手が挙がる

西予市　黒田　茂代

テレビ半分まなこ半眼目借時
平凡という気楽さの熟睡度
触感が微妙に違う夫婦の絵
珊瑚礁の海　小魚のユートピア
たおやかに生きてちぢみの似合う肩

東かがわ市　清川　玲子

肌の合う町内会に日々楽し
連れ添うた四十年の泣き笑い
添削の一字に句意が生きてくる
あの人は苦手だけれど憎めない
サイパンの地底に残るうめき声

東かがわ市　神保　坊太郎

相合の片袖ぬらしうれしがり
大阪の橋の無い橋かぞえてる
母の苦言漢方のよに効いて来る
祈ってもいのり足りない八月忌
頭が低いので雷に無視される

東かがわ市　成重　放任

砂をかむような思いはもうご免
別々の部屋で同じテレビ見る
いざこざに靖国の砂利音もさみし
サウナ風呂長居を笑う砂時計
病室で猛暑の味を知らぬまま

東かがわ市　川崎　ひかり

母になり母の情愛身に沁みる
歯車の軋みに溜る今日のウツ
合掌の指から落ちていた迷い
生命生む力は女だけのもの
淋しくてバラに寄り添うかすみ草

東かがわ市　原　賢

砂浜で恋の水着が弾んでる
なるようになるよと夜に爪を切る
きのうまでライバルだった友の葬
ポケットに恋眠らせたままに老い
力まずに登ろうゴール見える丘

東かがわ市　池内かおり

ねえあなたガツンと言って忘れましょ
苦労人らしい物腰やわらかい
責任者頭下げたらはいシャンシャン
うかうかと自慢話を聞く羽目に
紅筆でほやけた顔に活入れる

東かがわ市　伊勢八重子

風鈴の音色が誘う夏座敷
蓮の花ポンと開いて夏を告げ
恙無し燃える夕陽に掌を合わす
賑やかに騒いで孤独紛らわす
年輪の夫婦阿吽の息となり

高知市　小川てるみ

不器用でいいの真っすぐ生きている
胸のすく啖呵を切ったのは女
寝転べば空は私の画布になる
生きている証毎日ゴミが出る
生き恥と悔んだ老母の紙オムツ

高知県　赤川菊野

千枚田そこが私の故郷です
その先は言うなと仏間の灯がゆれる
土壇場でどんでん返しないように
子が生まれ子に幸せとやさしさを
炎天へ悲鳴上げてる自家菜園

高知県　小澤幸泉

献体のただそれだけに生きつづけ
夏祭り空しさだけを積み残し
カクテルへ女の嘘がきれいすぎ
窓際に耐えたオヤジの丸い顔
公園の隅で泣いてる偉人の碑

弘前市　髙瀬霜石

髪の毛と反比例する皮下脂肪
前例がいまだにでかい顔をする
寄付をしてちょっぴり広い鼻の穴
酒　煙草友だちなのか敵なのか
犯人は僕かあさんの皺の数

弘前市　相馬銀波

星空に月命日の句を偲ぶ
ハンカチの色に女を匂わせる
原爆は二つ八月泪する
万博は暑くて遠い北の蟻
四捨五入　昔も今も傷を生み

弘前市　今　愁女

六十年　想い出します防空壕
青森の夜の空襲眺めてた
セーラーに絣のズボン穿いていた
帯の芯で作ったリュック背負ってた
平凡に生きてしあわせ忘れてた

弘前市　宮崎　ヒサ子

雑草は思い気ままに伸びている
昨日今日暑さと草に負けている
夏休み元気な子等の声きかぬ
向日葵の元気を貰い損ねてる
ねぶた出る固い話はみな後で

弘前市　福士　慕情

童謡のカラス　ゴミなど漁らない
遠くからノラは時々振り返る
本丸の風は戦の臭いする
森の木が伐られて街が伸びていく
野の花の首輪が似合う石仏

弘前市　高橋　岳水

黄昏の坂で内助をかみしめる
強制はしないしつこい寄付の額
変り身が下手な男の転び癖
何よりの馳走炎暑の熱いお茶
ネプタ絵に灯が入り夏が動き出す

弘前市　須郷　井蛙

分別を見抜いてカラスの予定表
晴天が続き日曜僕にない
ラブレター一句を添えてコロリさせ
湿布薬今日も負けずに農作業
あっさりと押したハンコが首を締め

弘前市　岡本　花匠

こぼれ種　真骨頂の花咲かせ
支え合ういのちしみじみ掌の温み
実る秋体重計も苦しがる
秋多情　人間不信しのび寄る
真実の声に目覚めて山動く

十和田市　阿部　進

紺色の水着がはしゃぐ海開き
渡る世は善悪酒のせいにする
気ばらずに素敵な日々をめざしてる
肩のこり孫が叩けばなおります
水平線ゆれる漁火燃えている

黒石市　相馬　一花

人並に喧嘩もするし恋もする
じっくりと観察すれば女偏
口当りよい女性には気をつける
目くるめく美人の酔に逆らえず
素朴さを売り物にする奥津軽

青森県　小寺花峯

お茶だけを飲んでも私生きてます
画廊で見る柿はみんな売れ残り
薬袋が明日の命を振り分ける
大病のメリット軽くなるカルテ
一幕の人生これで二重丸

砂川市　大橋政良

始末書をひらくと黒い霧が散る
心変りせぬよう画鋲刺しておく
即興のシナリオ一人芝居する
勝ち進む強さ応援してしまう
ん　という味もそっけもない返事

さいたま市　星野育子

空の青　空腹だった頃がある
真っ直ぐに生きた男のいい笑顔
じゃあまたネ上げた手がまだ話してる
風を読み空気を読んで出遅れる
そうなんだ学ぶ楽しさ無限なり

日高市　根岸方子

ペンネーム　ズバリ心を晒け出す
第三者　一歩引けばと軽く言う
内情は聞かないことにしておこう
靴換えて千歩延びてる万歩計
きっかけを求め新聞変えてみる

佐倉市　岡井やすお

衆議院のかたきは参議院で討ち
改革をやるにも自ずから順序
談合へ縦に一本強い糸
脱地球されど命の保証なし
神無月結婚式はやってるよ

東京都　清原悦子

澄み切った空に誘われ旅支度
ふんわりと結ぶ中身に愛がある
無理すれば歳が素直に表れる
予定など組まれていない台所
この星の隅で地道に生きてます

東京都　小川賀世子

宝くじ抱いて真夏の白昼夢
列へ割り込むも叱るのもおばさん
震度五　防災の水買い忘れ
海山の呼ぶ声遥かなり六十路
信念を貫けば変人となり

東京都　岸野あやめ

掌に余生の運があるそうな
パリ　ミラノ日本の人はカモかもね
誰だろういたずら書きにある画才
ばあちゃんは古い砥石を手離さぬ
新開店花屋で少し試し買い

八王子市　播本充子

子育てが終ると介護適齢期
ストレスも過労も肌に出る加齢
取りあえず成田で遊ぶ夏休み
勇ましい浴衣に出合う夏祭り
強烈な痒みに耐える治り際

武蔵野市　亀井円女

今年の阪神きっと神さんついてはる
お陰さま食べて眠れて字も書ける
亡夫の声また言うてはる　おーいお茶
年寄の冷水などと言わせない
ああ言えばこう言う孫の一途な目

横浜市　小野句多留

地球博けなす私は変り者
後継者育てぬ女系の負の部分
決断を下してからの不眠症
スネ肉を半日煮込むカレーの日
新盆に亡妻仏間に愚痴る酒

静岡市　安本晃授

時たまはジョークで飾る赤い嘘
産声にもうサッカーの夢を盛る
舌の根が渇くと嘘が浮かびだす
無駄足は許さず飢餓の蟻の列
老人の踊りは効果あるらしい

静岡県　薗田獏沓

墨審の大きな尻がファウル告げ
元気な子抱くと遊んだ陽の匂い
眼のゴミに近づき過ぎた妻の顔
無添加と聞いて油断をしてしまう
良い話たくさん聞いて困ってる

富山市　島ひかる

戦争のはなしを孫にせびられる
あの人に出来て出来ないはずがない
手の届く位置でラッキーまた逃がす
心とはうらはら頭下げるだけ
ミサイルも核も禁止と言うて持つ

大津市　中宗明

叙勲受章まさか我が身が夢心地
杖頼るまさか我が身がなろうとは
片道の恋の切符が無駄になり
ケータイで親子の無沙汰帳消しに
陛下からご下問されてこちこちに

可児市　板山まみ子

包丁を研いではみたが冷奴
キッチンはオープンですよあなたにも
おしゃべりがいつやまるやら女旅
食べてるか　しゃべっているか女旅
混浴へパワーアップの脱衣室

高原の風ストレスを吹き飛ばし
ほらごらん乗鞍岳が晴れてきた
男湯と女湯中で手を繋ぎ
混浴へ男ひとりのしおらしさ
痛風になって気付いた酒の量

愛知県　早川盛夫

饒舌な樹々に埋まる無人駅
動かなくなった時計に詰まる過去
一歩出ずれば監視カメラの中にいる
夕風へキリになるまで本を読む
立ち読みをどうぞ広い広い書店

京都市　都倉求芽

瓦礫からずっとでこぼこ道だった
お別れのシーンに雨が降っている
長くても三日止まない雨はない
ブラウスの第一ボタン止めて秋
秋の古都一日乗車券を買う

京都市　高島啓子

抑止力　太陽それとも北風か
目を瞑る楽しい夢が無い不安
変人がここぞと見せた志
思い切って僕の花火を打ち上げる
情報化時代の海の泳ぎ方

亀岡市　井上森生

元気だから　かけがえのなさ気付かない
ためらいが筆の滲みを際立てる
一歩二歩　歩けたうちの大スター
やさしさをねだってばかり赤い糸
雨の日はケイタイ前にお茶にしよ

長岡京市　山田葉子

大阪のおばちゃん正価では買わぬ
熱いお茶熱いうどんという消夏
さらの傘濡らしたくないから走る
バリアフリー怪我しないとは限らない
銀行にわたしの秘密明かすまい

大阪市　西出楓楽

恩師なら斯くあるべしとペンを取り
たまに帰るふる里脳に焼きつける
孫多忙とんぼ帰りの夏休み
延びてくる生命線に怖くなる
メモしながらテレビ見ている雑学者

大阪市　前たもつ

沢山のハードル越えてまだひよこ
笑われる背中の邪念子が見てる
箪笥から亡母の助言の日記帳
これは何　火鉢知らない孫が聞く
安静という名の刑に縛られる

大阪市　川原章久

八月の涙渇いてきた日本
夢だけはまだ貼ってある子供部屋
遺影では優しいちちになっている
本物にしては能書き多すぎる
偏差値が邪魔をしている伸び盛り

大阪市　鶴田遠野

少子化へ母はひと言　子は宝
清貧を遺産みたいに継いでいる
やりさしが五つもあって仕事下手
日の出見て感動　入りを見て感謝
遮断機は信用しない右ひだり

大阪市　川端一歩

墨汁借りる返したことはありません
どの顔も笑み浮かべてる羅漢様
殺虫剤鈴虫までも居なくなり
爪先に点火しそうなアスファルト
打ち水にいっときの涼心にも

大阪市　大川桃花

勤勉な父にニートの子がひとり
長電話　肝心なこと忘れてる
光る人陰でささえる人がいる
どんくさい母に自慢の趣味がある
氷売る子供の夢は甲子園

大阪市　奥村五月

水占い心を癒す貴船川
政局の山で変人ぶっちぎれ
還暦もなお波高し終戦日
この憲法ちいさい孫の手に渡す
ゆるぎない不戦の誓い彬の忌

大阪市　近藤正

どんぐりが後釜狙う政治劇
大正もいくさも遠くなりにけり
チューチューと雀に朝寝起こされる
郵政はどうあれ百日草萌える
ごきぶりをそっと逃がして一人住む

大阪市　岡本久峰

戸籍上は大人のはずのニートども
メリケン粉信じて飲めば風邪薬
ストレスも流し続けているテレビ
私と同じ着信音が流れてる
水に流して街のドブ川

大阪市　井丸昌紀

半日を鏡も見ずに過ごす恥
紅葉の出来が気になる秋近し
まちがってくれたつり銭じっと見る
とても良い人丸すぎる石
訃報聞くどこまで知らすのか悩む

大阪市　古今堂蕉子

大阪市　中村叡子

墓掃除　年毎つらく父母が呼ぶ
こんなことでいいんですか　なにもかも
ＩＴが進みヒト科が空まわり
ディスカバリー帰還涙で拍手する
阪神が強くてビール美味しそう

大阪市　清水絹子

ひと口でやはり老舗と椀の汁
九条厳守千人針はもう御免
へそくりを貯めたあの頃華だった
五十回忌　今に忘れぬ児の瞳
初盆のお参り午後も此処彼処

大阪市　清水利武

戦争を知らぬ大人が増えてます
熱帯夜肌着を五枚変えました
だんじりが走っています秋の風
お見合へ鼻の頭に汗をかき
台風の波に鯨が殺される

大阪市　安達はじめ

夢に見た幸運いまだ夢のまま
脇役に徹して炎えるかすみ草
箒目の波が絵になる庭の石
母の味妻にも里の味がある
栄転の離別を母は喜ばず

大阪市　小谷集一

恥を知る美学忘れている政治
すぐ妥協して持ち味が呆けて来る
総替えをして次の手を考える
ややこしくなるから群れの外にいる
愛せない人は愛してもらえない

大阪市　本間満津子

石灯籠　打水涼し将棋盤
灯を消して虫の音を聴く寝待月
天花粉幼児のようにおでこ顎
路違いそこから先は下り坂
しょがないなあと口癖になりしょうがない

大阪市　玉置英子

小さい児に蝉の雌雄教わった
雌蝉はすぐに放してやってネと
右足が左の足に蹴躓き
静脈の太さ右手が勝っている
回らない寿司を珍しがっている児

大阪市　神夏磯典子

八月十五日童話のように語り継ぐ
優先席どうぞどうぞと譲られる
空地から幸せそうな猫夫婦
源平も特攻隊も見てた島
もうあかん言いつつ薬飲んでいる

大阪市　渡部　さと美

少子化の愛をペットが埋めてくれ
大合併大きな市だよ里の木よ
ふる里のこの変りよう迷いかけ
今年ようけ釣れる蛸たこタコつづき
実沢山　朝のみそ汁調子よい

大阪市　津村　志華子

歳　歳と弱音を吐いてなるものか
優しさを分かち合ってるケアハウス
シャワー全開古い頭を洗ってる
神さまは酒豪と思う樽の列
派手かしら似合うかしらと試着室

大阪市　小泉　ひさ乃

ひとり居に情けが残る路地の風
笑ってごらん心の花がぱっと咲く
ちっぽけな庭が我が家の緑地帯
傷だらけの地球修復急がねば
愚を悟り切れずに今日もパチンコ屋

大阪市　小糸　昭子

坂転ぶレモン一つを追っかける
年回忌仏と私つなぐ縁
山の水のどを潤す滝の水
金も地位も何もないが妻が良い
ひからびていない間は子に説教

大阪市　板東　倫子

こわい日本語　反対する奴ぶっこわす
御多忙中お邪魔しますと葬式屋
大雪も地震も耐えて酒づくり
魂を抜かれたように海月浮く
ガラクタをまた仕舞い込む大掃除

大阪市　津守　柳伸

汗みどろ浴衣ラッシュの天神さん
恥ずかしいくっきり古希の水着跡
スケジュールぎっしり夏のカレンダー
台風禍巨大クジラの置き土産
小刻みに今日一日を大切に

大阪市　津守　なぎさ

古希すぎた水着姿もハイポーズ
汽車弁のよさしみじみとローカル線
足元のくぼみ気づかぬ花畠
みの虫のゆれて秋風しのび寄る
露天風呂　子ガニがあそぶ紀南の湯

大阪市　松尾　柳右子

大空へ交響曲を蝉奏で
夢のせて希望いっぱい始発駅
一日の疲れ背中に終着駅
あちこちの産地自慢のメロン来る
古希迎え第三章の始発駅

大阪市　榎本舞夢

寺巡り軋む廊下もおごそかに
笑ってた人が突然お葬式
ひまわりに迷う心を笑われる
子が笑う父さん笑う和む家
明日に向け笑顔絶やさぬように生き

大阪市　西川更紗

ほろ酔いの頬を冷たい風が撫で
一流の毒舌吐いて孤独なり
違反車を発見通報したくなる
暑気中り記憶がとんで空回り
頂点に立つほど重い荷を背負う

大阪市　熊代菜月

珍芸にシャッターチャンスまたのがす
六十年遺影の父は孫のとし
脈絡もなく今思い出すあれやこれ
電話口仲々切れぬ愚痴話
お隣も向かいも来てる特売日

大阪市　岩崎公誠

爽やかにきらきら光る賞めことば
世界地図味方の数はたかが知れ
親ひとり子ひとりなのに仲違い
心棒のずれた傘から雨が洩れ
舞台裏大物小物汗の跡

大阪市　榎本日の出

機嫌よく三食昼寝して暮らし
ストレスが溜まるとわたしよく動く
生きがいをぎっしりつめたスケジュール
趣味なのに悩み苦しみ焦ってる
引き算も楽しんでいる慣れてゆく

大阪市　星野きらり

思いきり鳴いてる蝉もわたくしも
ど忘れを思い出すまで四苦八苦
一ときの至福に浸る旅パンフ
土用丑独りは鰻持て余す
お若いと言われ体のボロ隠す

大阪市　伊藤博仁

尻はんぶ見せてバスから降りるギャル
褒めてたら初なりのなすいただいた
輪の中に浴衣を誘う盆踊り
交番をよく見て渡る赤信号
飛び乗って扇子ばたばた臭いまく

大阪狭山市　矢野梓

皺寄せがいつも弱者にくる政治
スーパーがこんなに遠い炎天下
口ほどに体がついてこぬ猛暑
喧嘩する元気がなくて負けておく
にっこりと許してあげる一度だけ

池田市　栗田久子

更ける夜月はひたすら冴えていく
ふくよかな流線十月の仏
寒村の時は流れを止めたまま
塩焼きにされて満足げな秋刀魚
大げさに驚くことも世辞のうち

和泉市　中川楓

帰省子に大の字に寝る畳あり
パセリより羽化の夏蝶みどりの目
シニア割引証明出せに喜んで
その日まで恥を重ねて生きてゆこ
土地人の言の葉やさし鉾回し

和泉市　西岡洛酔

花愛でるやさしい心よ秋の空
一日を終る寿命を褒めてやり
静寂が好き孤独が好きと夢さぐる
専業の主婦　愛妻に自負があり
今になり亡父の強さが身に染みる

和泉市　横山捷也

ブランドの服の出番を待つ老母
似た人に遠い記憶をなつかしむ
冗談のわからぬ人も居る酒宴
赤チョウチン少しおだてにのってみる
回り道しては気楽に生きている

泉佐野市　山本蛙城

空き缶を積む自転車の面構え
両目もう開いた達磨の粗大ゴミ
小気味よく啖呵を切って覚めた夢
右肩を上げると降ってくる火の粉
記念切手貼って出すのも思いやり

柏原市　永浜加津子

目覚しは届かぬとこで子守歌
歯が落ちるその一瞬のサスペンス
青春の汗煌めいて甲子園
シャンプー台このまま寝たい昼下がり
新聞の一行が胸響かせる

交野市　田岡九好

手前生国金毘羅船ふねシュラシュッシュ
流されて他所のお祭りばかり見る
思い出の糸をたぐれば幼な顔
行き場所のない定年の膝を抱く
自爆テロその朝何を食べたのか

交野市　山川日出子

寺の庭江戸時代からさるすべり
野宿の子不便さ知って立ち直る
ひとときが天国のゆめレモンの湯
琴三味線音色何より絹の糸
ラベンダー北海道へ呼んでいる

交野市　森本弘風

海行かば水浸く屍と行ったきり
病院へ保険のもとを取りに行く
タイガース勝てば熟読スポーツ紙
七夕に赤トンボ飛ぶ山の上
もったいない日本語だけにある美徳

河内長野市　山岡冨美子

ギヤマンの皿に盛ってる夢芝居
羞じらいを知って少女は蝶になる
喉飴をなめて迷路の中にいる
カタカナに出合うと狂う古時計
まばたきをしてる間に逃げたツキ

河内長野市　坂上淳司

恋に揺れ安保に揺れた青春譜
戦後六十ひょいと顔出す平和呆け
値崩れの後で取れ出す自家野菜
秋茄子に期待バッサリ切り詰める
頭下げもらってもらう胡瓜茄子

河内長野市　村上直樹

日記帳ここにわたしの漂流記
正論を吐くからいつも嫌われる
島ひとつ岩ひとつにも国の意地
流れ星もう止めさせて自爆テロ
毒舌が消えたら妻も仏さま

河内長野市　水谷正子

六十年　九条守りこの平和
六十年　敗戦語る人も老い
ガラス越しキスした映画話題作
初盆に浅漬け茄子を供えけり
相言葉もったいないを大切に

河内長野市　井上喜酔

高齢化ぼちぼち生きて根くらべ
自分史をぼちぼち歩く喜寿の夢
豊作を守る案山子のアロハシャツ
裏切ると嵐が怖い永田町
怨念で動く政治は情けない

河内長野市　植村喜代

いつまでも元気でいたいね同い年
人生は思いも寄らぬ方へ行く
一日座って老いの不自由
オバチャンは元気チャリンコが走る
優しくされると新しい血が増える

岸和田市　雪本珠子

さよならを胸に忍ばせ芝居する
枯れた心恵みの雨に潤され
雑草もやはり日だまり好きらしい
待ち惚け冷めたコーヒーひとり飲む
マンションの窓にそれぞれあるドラマ

岸和田市　井伊東吉

私の季節とばかり百日紅
クーラーの吐き出す熱が疎ましい
夏向きか脛に穴明くギャルパンツ
お盆にも孫は部活で顔見せぬ
民不在政争劇を見せられる

岸和田市　原　さよ子

老眼鏡ルーペ重ねて字を拾う
軽妙な持ち味生かし司会する
一つ覚え二つ忘れて空しがり
ブランドも赤札つけて見切られる
見切品　女するどい目の動き

岸和田市　岩佐ダン吉

迂闊やった頭たたいて床につく
九条を守ると書いておく名刺
人間とは問われる八月の六日
手を握る何かが通うものがある
損得は言わず大きい方をとる

岸和田市　土橋房子

六十路来て今なら分かる母のこと
幸せになる方法は笑顔から
センサーで鳴く小鳥にも情がわき
服装がだんだん派手に古稀の女
子だくさん左団扇を期待する

岸和田市　長谷川呂万

ぜいたくに慣れて勿体無い忘れ
宗教の違い殺人テロ悲し
包丁も俎板もないレンジだけ
吸物の味料亭の格が出る
あこがれのゴビを駱駝で旅したい

岸和田市　亀井皎月

古希過ぎた頃からの耳鳴り止まず
何食うもうまいうまいはまだ死なぬ
病む友へ嘘を交えた勇気づけ
気がかりがかさなり重く胃に溜る
内科医の治せぬ病抱いて生き

堺市　和田つづや

神様は祈ると贔屓してくれる
差し向かう酒御機嫌に今日終える
煩悩のあるうれしさよ六十五
義歯だからガムは御辞退いたします
スポーツのため日の丸があるのです

堺市　矢倉五月

人前は関白容認して笑顔
風の噂に呼び起こされた苦い恋
養毛剤ぜいたく品でない我が家
元気なら意識しません胃の在り処
割れたハートの絵文字送信して終る

甲子園悔し涙を糧に生き
新装開店　皿はブランド味二流
涼しげな　お香漂う京の町
いたずらも皆来い来いと地蔵盆
最後まで名前の出ない立ち話

堺市　西村　りつえ

占ってもろうて迷い深くなり
負け犬が弱者を吐きにくる屋台
ばれそうになると多弁になる夫
おんな捨てた女性が闊歩する社内
古希にして迎える父の五十回忌

堺市　村上　玄也

ＰＬの花火に歳を忘れてる
血糖値野菜食べ切り肉残す
夏バテのはずが体重増えている
自販機のポカリスエット一気飲み
鉢植えの菊も夕立ち嬉しそう

堺市　齋藤　さくら

明るい夜に小躍りをした終戦記
マッカーサーに自由を貰い終戦記
見え見えの私利私欲出す政治　今
スペースシャトルちょっと地球をひとまわり
一日を読書わたしは昼蛍

堺市　神原　文

さすらいの旅　難波津で帆をおろす
自立してオンナ女性と呼ばれてる
失ってうれしいものがございます
氏育ち似ている嫁がきてくれた
美人ママ父似の子供つれている

堺市　志田　千代

宵祭りおまけの金魚おとなしい
おさいふを首からさげるゆかたの児
親に似た凸凹がある通信簿
のっぽの父　小柄な母のめぐみうけ
デコボコのボコへしたたる玉の汗

堺市　近藤　豊子

滝壺を溢れて流れ動から静
流されるままにいつしか古稀を過ぎ
明け切らぬしじまを起きて深呼吸
国会へ差し入れしたい笑い茸
にらみ合うよりも笑顔でゆずり合い

堺市　山本　半銭

声変り父そっくりの電話口
始発から喋り続けて目的地
来訪に採れ立て野菜どっさりと
電子機器　無難にこなし古稀の坂
畑作りカルチャー通いの米寿かな

堺市　源田　八千代

堺市　石堂潤子

嬉しくて笑う悔しくても笑う
有りがとう咲いてくれたね鉢の薔薇
ごめんねと言うて済む事済まぬ事
派手な服買うたと自分でも思う
高い金出し雑穀を食べている

堺市　柿花和夫

仲人はいないが温い披露宴
あの夏は花火に見えた焼夷弾
心売る一歩　鉛の靴はいて
争点をずらし父子が酒を酌む
ピッチャーの孤独知ってる四番打者

堺市　加島由一

あれほどの女も恋の目は狂う
空き缶を集めてパンにする詩人
同居せぬ母にいくつか訳がある
妻の隣でネクタイはずす鵜飼舟
さくらつばき　どうじゃどうじゃと散っていく

堺市　國見蘭香

外側で小さいせめぎ見ています
わたしでも覚えた恐いアスベスト
門前の蟻が修業の僧に見え
茶髪の娘今日はゆかたで踊りの輪
ひらめいた雑魚の意見が拾われる

堺市　河内月子

酔芙蓉すっかり酔うてから落ちる
お隣の百日紅今見頃なり
クールビズ何度もシャワー浴びてます
肩凝ってきたのでがむしゃらに動く
暑い一日を西瓜でしめくくる

四條畷市　吉岡修

その噂根も葉もないと言いきれず
だんだんとだんだんとほらぼろを出す
そのままが好きだから今続いてる
ぼけるなよ言い合いながら生きている
天下り椅子が大きくなって待つ

吹田市　山本希久子

キッチン発私の風送ります
煮つめればこんなに小さい悩み事
手の届く恋には食指動かない
余命表と相談をして呑む遊ぶ
生き下手の涙を星に癒される

吹田市　岩屋美明

人の好い友達だから気を遣い
雑魚の中で一匹骨のかたい奴
黙黙と食べてるときは機嫌よい
外出が好きな夫婦のカレンダー
忘れものして来たような昼の月

傾いた暖簾の奥に居る匠
秋祭り里の言葉が呼びに来る
握った手　義理の温もりだけ残り
ピカソの絵に天地無用を貼って置く
気配りを終えて幹事が酔いつぶれ

吹田市　太田　昭

夏に効く恋か若さがあればよい
ほんとうの笑顔だな帰国した自衛隊員
千円の本買い今日飲み会をパス
仏滅かそれも可とせん忍ぶ仲
臍出しルック臍は非武装善隣か

吹田市　早川棲世

にっこりとするほど心溶けてくる
追風にまた判断が狂いだす
嬉しくてたまらぬように孫笑う
久し振り古希には古希のクラス会
うかうかと引受けたのがのしかかる

吹田市　大谷篤子

牛牽いて粧し込んでは恋を待ち
猛妻をレディーに変える電話口
お小言の無い日の妻を愛してる
首の差で思いもかけぬ美味い酒
誓うても翌朝消える健康法

吹田市　野下之男

貧乏につける薬を貸してやる
神の名が違っただけで敵味方
デパートでそしらぬ顔の涼み客
窓際は負けた男の吹きだまり
お招きに思案しているのし袋

吹田市　穴吹尚士

ヒロシマへいつこられます大統領
戒名の短さ謙虚とも思う
寅さんとひばりに今も癒される
メルヘンの好きな彼氏で物足らず
ちゃっかりとホテルのシャトルバス利用

吹田市　瀬戸まさよ

脳みそと筋肉惜しげなく使う
着古した上着思想も被せている
秋の陽にモジリアニになる影法師
切な気に瞳がうるむ夢二の絵
一生の不覚何度でもくり返す

吹田市　須磨活恵

ふる里の水はとっても甘かった
両方の肩に両親いてくれる
盆踊り百まで踊りたい雀
疲れたと言わないひとについてゆく
両輪でゆけばなんとかなるでしょう

吹田市　木下敏子

高石市　浅野房子

穏やかに見えて心に夜叉を抱く
後悔の種あちこちに蒔いている
歯科内科整形外科と一巡り
老いるとは哀しいものよ死ぬよりも
一言がくさびになって錆びてきた

高槻市　左右田泰雄

パソコンもメールも縁がない傘寿
すぐ切れる十代めっきり多くなり
虫の音に合わせて歩く星月夜
タラップをアロハのシャツで降りて来る
談合という灰色の裏舞台

高槻市　瀧本きよし

カンツォーネいつしか演歌調になる
味のある話スプーンで啜り込む
パソコンの海に抱かれて日が暮れる
泥舟に乗っているとは知らなんだ
生きて来た跡を閻魔に見てもらう

高槻市　江原秀夫

子や孫へ思いをつなぐ平和の灯
柔らかい言葉じわじわ効いてくる
まっすぐに生きて余生の旨い酒
残り火を燃え上がらせる酒の友
鉛筆を削り句想を裏返す

高槻市　富田美義

無位無冠おれにも有るぞ誕生日
陽の光　手抜き掃除を暴かれる
さすが佳句腹の底から出る笑い
目にドラマ耳に愚痴聞く夜の茶の間
年輪に分相応の悔い重ね

高槻市　傍島克治

ほどほどに差がありすぎる妻とぼく
お見舞をしたりされたり老い仲間
裏ありと見抜けなかったイイ笑顔
あと一年平均寿命迫り来る
知らぬふりして孫達に花持たす

高槻市　生田義一

里帰り去年の今日も同じ道
嵐去り蝉の声さえ嬉しそう
今年こそ天下取ろうよ両岡田
国技だよやる気があるの日本勢
ワイドショー永田劇場種尽きず

高槻市　執行稲子

胸騒ぎただいまを待つひたすらに
真夜中が何故だか好きで宵っぱり
片べりの靴しんどいと独り言
戦いの国で妙なる笛の音
究極の思い出としゃれフルムーン

結ばれた二人を祝う鳩よ翔べ
花つくる優しい心蝶が吸う
早起きの脚に輝く優勝盃
幾度も呑んだ苦汁で人つくる
方言と麦わら帽子捨てて歌手

高槻市　井上照子

Z旗を掲げ郵政解散だ
反対へ刺客を放つ凄まじさ
お絞りをサービスに出す散髪屋
自転車を押して野の道杖がわり
熱帯夜　日本脱出したくなる

高槻市　乙倉武史

定年の舌から苔がはがれ落ち
百めざす父は黙って酒を飲む
童顔でよしやがてまた童なり
少しだけほんとのことを混ぜ祝辞
深く根を張れぬまんまの自己嫌悪

豊中市　水野黒兎

熱心さ加減に欲が見えかくれ
沈黙の合い間を狙う妥協案
念入りに説明される歳らしい
知らないがたまに逢うので会釈する
少子化に歯止めかけたい若ければ

豊中市　江見見清

敗戦日たたけばラジオ鳴ってくれ
クーラー故障出番のあった渋団扇
遠花火スターウォーズを読む窓に
この子もか凸凹のある通信簿
片陰をひろってお金出しに行く

豊中市　安藤寿美子

節くれの我が手戦後の悪夢見る
焼け跡を掘って自給の飢えしのぐ
箸の立つ雑炊求め西東
闇市に金出しゃ揃う何でもや
何事もなく六十年振り返り

豊中市　岸田知香子

八十路駅オーバーランをした思い
たよりない足でも二本ある幸よ
経上げるしばしあの世と糸電話
民謡よボリューム上げてあの世まで
生かされて生きる辛さや喜びや

豊中市　山門タミ

牛後でもいいから俺はマイペース
平然と弾けば分からぬミスタッチ
名審判ミスジャッジでも譲らない
悔しさを燃やし煙の一人旅
そのうちに妻の名前も出ぬ不安

豊中市　藤井則彦

豊中市　樫谷郁子

この炎暑アウトドアとは似合わない
天気図に競い合ってる晴マーク
耳鳴りか否蝉しぐれわからない
八月忌めぐる月日に亡夫を恋う
今はもう呼ぶ事もないひとり膳

豊中市　吉田あずき

八月の猛暑あの日も暑かった
墨塗って歴史を消したのも歴史
風と共に去るには積荷重すぎる
若者とリズムの合わぬ古時計
万華鏡まだ見残した夢がある

富田林市　藤田泰子

並でなし松坂肉の切り落し
幸運でハッピーエンドでみな終る
アッパッパ私なりのクールビズ
胸の澱空になるまで深呼吸
うっかりと低温やけどさせられる

富田林市　中崎深雪

やっと来た馬もわたしも肥ゆる秋
秋風にまずはお箸がはしゃぎ出す
手間だけど笑顔みたくて栗御飯
料理本読んでも出せぬ祖母の味
やるほどに脳も悦ぶ厨ごと

富田林市　稲川恵勇

根回しに上司を誘う縄のれん
味方にも敵にも転ぶ袖の下
故郷の温み裸足で確かめる
順調にボケが進んで憚らず
美人にも金にも弱いから困る

富田林市　池森子

残骸の昔にあった火柱よ
裏山で片眼を開ける不発弾
さらさらと傷口抉る風の舌
喉越しの甘さに罪を着せてある
ふる里の小川で浮力つけている

富田林市　片岡智恵子

顔ほどは老けぬ美声の電話口
男一匹やっぱり妻の掌に還る
平凡に生きて気楽なにぎりめし
堅実とケチとは違う夏が逝く
敗戦の声欄　眼鏡また曇る

富田林市　大橋鐘造

陽炎に逢いたい人が溶けていく
泥かぶる事にも慣れた顔の皺
眼裏に消えない鬼が棲んでいる
任せとけ叩いた胸が悔いている
新しい辞書が磨きをかけにくる

散る前にバラの赤さを見て貰う
終章の幕が静かに降りる駅
一徹を通し男が散ってゆく
私の始終を見てた天の川
迎合のたびに小さくなるポリシー

富田林市　中井アキ

のうぜんかずらかみなり蝶がよってくる
お見舞いに行く虫一匹も殺さない
クーラーにタイマーかけてよく眠れ
畠仕事麦わら帽子忘れない
日本人に嫌われているアスベスト

寝屋川市　江口度

夏大根すすって夏をやりすごす
思考回路がだんだん細くなってくる
八月の痛みを消去せぬように
いつかいつかと思いながらの影法師
詫びられるほどのことではない誤報

寝屋川市　籠島恵子

ありがとう今朝も目覚めた生きている
CTで五臓六腑を確かめる
造影剤ポカポカ血管を回る
内臓のサイン見逃さないように
残さずに食べた夫をほめて上げ

寝屋川市　平松かすみ

正直を阿呆と言うていいのかな
短冊につんと澄ました五七五
粗ゴミの中で拾ったリサイクル
夜遊びの好きなメールがまた入る
皺で臍かくして私超美人

寝屋川市　太田とし子

再生を誓った八月十五日
愛地球戦ない世を祈るかな
ディスカバリー成功見るまで寝られない
復興の礎だったアスベスト
アスベスト平和の時限爆弾だ

寝屋川市　坂上高栄

溽暑酷暑炎暑大阪の夏だ
あきらめず炎天下行くリクルーター
親を看る覚悟で正社員めざす
ただそばで見ているだけで日日暮れる
人の輪にはいるのは無理自己評価

寝屋川市　冨山ルイ子

糸杉に沈むゴッホの深い闇
ゴッホ展孫とはぐれてしまいけり
食べごろを知らせて甘く桃匂う
夏草の息吹きよ少年期が香る
椰子の実の故郷は父の終の島

寝屋川市　森茜

退院が近い笑いが絶え間ない
魚屋の近くに住んで今日も蠅
相手見た叱り方する苦労人
初めての客にも毎度ありがとう
求めてる結果出るまでする根気

羽曳野市　洒井一壺

一雨が秋の気配を置いて行く
炎天をかき回してる蝉しぐれ
クールビズ女に縁のない話
満天の星が呼んでる里帰り
井の中の蛙が見てる丸い空

羽曳野市　安芸田泰子

クールビズなんてステテコはいている
ノンポリでおタクでラーメン食って生き
竪琴がイラクの空で鳴っている
やりたいことやっただけだと野茂英雄
恐竜とおんなじ運命辿るヒト

羽曳野市　三好専平

原爆の詩をしみじみと小百合さん
一滴の水が重たい原爆忌
まっすぐに生きた皺です温かい
削除キーきょうのストレスさようなら
散華などもうするでないさすでない

羽曳野市　徳山みつこ

饒舌なチラシに刻を盗まれる
しみじみと母を語らう盆の月
ぐつぐつと煮つめる母の落し蓋
背もたれが欲しいと思う茄子の馬
今日もまた憎い男の飯を炊く

羽曳野市　吉川寿美

あの夏も夾竹桃は咲いていた
知床の自然に会いに行くプラン
生きるとは悩みがついてまわるらし
見た目には感じさせない繊細さ
まだ時間たっぷりあるよ茜雲

阪南市　森村美花

朝の庭蝉の抜け殻数えてる
祭日といえどピンとこぬ海の日
果てしない宇宙の作業ディスカバリー
コレステロール卵の減った冷蔵庫
少し煩わしかった今年の熊蝉

枚方市　森本節子

頭を低く我慢して待つ笑える日
鈍牛が出世頭のクラス会
人並みに間違いもして人気者
間違いをただし職場に敵が出来
親友でありライバルである絆

枚方市　安達忠央

枚方市　宮川珠笑

かくれんぼ鬼は探しになど来ない
神様に禁煙だけは誓わない
草むしる指に地球がくすぐられ
老いらくの恋は表札つけて逢う
ちっぽけな美談かくしているニュース

枚方市　荘司弘之

のんびりと大阪に居る盆休み
線香花火ポトリと落ちて深き闇
ふるさとへどっと繰り出す青春18
パソコンに自由な時間皆食われ
飲み放題幹事ついつい飲み過ぎる

枚方市　丹後屋肇

爆撃に裂かれた知己の八月忌
超低空　機銃にのめる畝の底
焼夷弾屋根貫いて噴く火炎
終日の死臭に冠り直す帽
詔勅をきく防空壕の虚脱感

枚方市　海老池洋

クマゼミの警告しきり温暖化
六甲おろし　しこたまやって美味い酒
げてものをこわごわ食べるパスポート
性格がつい麻雀に出てしまう
母の味から妻の味嫁の味

枚方市　二宮山久

夏本番学生いない勤め先
近ごろは不景気言わぬなれた日々
正論も時に逆風波高し
六十坂こえて元気でまだ勤め
おい息子夫婦元気で顔をみせ

東大阪市　安永春

ペパーミントの風に誘われウォーキング
大輪のバラに魅せられ吸い込まれ
雨降ってお城も安堵したような
カタカタを押してた孫も親となる
ゆるやかに河内音頭の輪の中へ

東大阪市　西村哲夫

たばこさえあればビタミン不要なり
病床へ窓からヤブ蚊見舞い入り
宝くじ発表までの濃い時間
警官を見ると未だに身構える
打ち水を知らずに過ごすアスファルト

東大阪市　北村賢子

蘇った緑へ反戦を誓う
怒らんと言うてねテスト見せるから
怒鳴りたいナンデコンナニ暑イネン
六十年未だ魂癒されず
つらい時こそほほえみを忘れない

東大阪市　中岡　妙

妻の台本で余生の幕が開く
期限切れ貴方に毒味して貰う
ラジオから戦後の空気流れ出る
振りきった涙だシャンと背を伸ばす
諦めて忘れ上手と言うておく

東大阪市　笠井欣子

美しい月が出てると彼が呼ぶ
ほろ酔の愚痴聞いているあほらしさ
二世帯の軋むお城に花咲かそ
不意に遇う友の若さにうろたえる
耳鼻科内科と辻で別れる老夫婦

東大阪市　谷口　義

昼寝から覚めると雨が降っている
知らん顔するのも世渡りのひとつ
肩の力抜いているのに肩が凝り
現状維持それがなかなかむつかしい
骨休めしているうちに骨になり

藤井寺市　髙田美代子

少しずつ母に似てきた歩きかた
壊れそうな私へはがき有り難う
少年の毬弾んだり転んだり
次の世の事を思ったことがない
六十年八月を哭くこれからも

藤井寺市　鴨谷瑠美子

理想の絵ところどころに休息場
炎天下　駅まで五分蝉しぐれ
夾竹桃父の忌がくるやわい彩
一年に一度お地蔵さん拝み
母のとき女のときを使い分け

藤井寺市　若松雅枝

表裏一体　夫婦の声があたたかい
孫のような医者に深深お辞儀する
銭勘定だけはちっとも呆けてない
子沢山苦労厭わぬ母の笑み
泣かないで話してごらん順序よく

藤井寺市　鈴木いさお

道草を重ねて辿り着く六十路
目立たない程度に染めてクラス会
はた目には幸せそうに見えるらし
二世帯も娘夫婦とならＯＫ
ほどほどにしろと肝臓からサイン

藤井寺市　中島志洋

七転び懲りず明日へ架ける虹
スリラーの虜になった秋夜長
オーバーな相槌を打つ聞き上手
バスツアー世話をやく人やかす人
本心は秘めて女の綺麗ごと

藤井寺市　楠　昭子

やっとこさ嫁ぎ身にしむ隙間風
先祖の墓未だ帰らぬ北の島
味方にも敵にもなって来た夫婦
的を射る皮肉思わず苦笑い
夢追った昔あろうに青テント

箕面市　出口セツ子

九条の改憲気になる原爆忌
最大の遺産は青い地球です
骨太になれと見守る子の痛み
受け止める人がいるから翔んでみる
失敗を糧に人間磨く日々

守口市　井上桂作

反日は軍の主導が流れくむ
リズムにも煽てものれぬ歳となり
タイトルの上手な本は要注意
いざという時こそ大事お隣さん
悪党になれずパソコンいじってる

八尾市　髙杉千歩

平和だな鳩がホームを往き来する
スーパーで釣銭数えたことがない
補聴器をはずす静かな蝉の声
故里で初めて乗った救急車
ギプスでも昼間はパジャマなど着ない

八尾市　山本宏至

ついて行きたいおだやかなお人柄
主役にはなれぬパセリは皿の端
会釈ひとつぬくい心が通じあう
住み馴れて身についてきた河内弁
毒針に蜂は命をかけている

八尾市　内海幸生

神様と空気どっちが大事なの
損得も理由も要らぬ曽孫抱く
水欲しげ隣の花が気にかかる
葬列で馬券の指示をする携帯
葬列に義理で並んだ歯が白い

八尾市　宮西弥生

炎天でビタミン補給する肋
背の重荷つづく山河が美しい
ラリルレロ先が見えなくなった酔い
転んだら駆け込む医者が側に居る
来年の元気のために汗流す

八尾市　宮﨑シマ子

覚悟しいや嫁は賢く手強いぞ
貴方褒めたら近所の魔女が取りにくる
隣の子の応援もする運動会
蚊のキスを受けると狂いそうになる
冷蔵庫せせって酒のアテ探す

八尾市　村上ミツ子

ピカドンの話今年も聞きました
平和の鐘をききながら黙祷を
線香花火昔むかしが見えてくる
Vの足音聞きのがすまいタイガース
汗だくで煮麺食べている至福

八尾市　吉村一風

しみじみと語る昔の弾み出し
秋の足音　味の音痴も目をさます
ペアルック家で楽しむ老夫婦
節目には日の丸を出す父を真似
沈黙を今も時どき武器にする

八尾市　長谷川春蘭

戦後史も風化している小抽き出し
炎天下引きずっている重い影
納得がいかないままの遺産分け
同窓も二人となった夏見舞
感情線が波立って秋ですね

八尾市　生嶋ますみ

容貌と歳は禁句にして仲間
独りでもおんなじネギを刻む音
万歩計　四十分の旅に出る
反応はなくても話する仏間
犬の声ばかりがひびく街の老い

大阪府　澤田和重

捨て切れぬ物がいっぱいある暮らし
夕立のせいにしている梯子酒
立ち話犬がしている大あくび
父さんの一喝気付け薬です
短命の母の二倍を生きている

大阪府　前田ゆい

再びは師の句は載らず自選集
魂が寄り添い集う川柳誌
一年先までも満席シェフの味
熊蝉の羽根だけ残り秋立ちぬ
むざむざと生きて今年もあと三月

大阪府　桑田ゆきの

百度石撫でて祈った傷がある
爪の色見て快方祈ってる
腹筋にも一度鳴かせる腹の虫
虫食いの茄子でも花を忘れない
無農薬野菜で虫に好かれいる

大阪府　野田栄呼

同級会欠けずに米寿まで願う
許すから許されてすむ日々の幸
雑草に障害物はなさそうだ
勝って酒負けてカンフル　トラの酒
食満ちて足腰だけがなげき出す

大阪府　籾山隆盛

COOL BIZすっぽんぽんの熱帯夜
クーラーじゃないエアコンに買い替える
好きだからあなた好みにするメニュー
母のブツブツ空念仏に終らない
逢えるかなやっぱり逢えたアウィーナ

大阪府　米澤俶子

折にふれ気力をもらう師の句集
お若いと言って下さる空元気
もうとまだ使い分けてる年の功
百年後今の日本があるだろか
満天の星と語ろう明日のこと

神戸市　山口光久

強い児は叱れば叱るほど伸びる
流れには逆らいません川下り
奥の手をまさかの時へ育ててる
酒とろり宇宙遊泳詩人たり
栄養にならぬ話は聞き流す

神戸市　伊勢田毅

背伸びしたツケがじわりと効いてくる
嫌な日が続き日記は白いまま
世代交代故郷の縁遠くなる
変り身が早く肩書増やす友
温暖化地球じわりと沈んでる

神戸市　山口美穂

老犬と婆　暑かったネと夕餉
歳のせいが段々多くなった夏
メンテナンスが要ります身体七十年
お似合いですと言われてすーっと試着室
一夜明ければ元気よと咲く朝顔よ

神戸市　木村貴代子

八月の涙はなおも胸の底
心配の種は残して嫁ぎゆく（娘結婚　4句）
神様はいない式場笑顔満つ
企画して共に楽しむ披露宴
老婆心はじきとばして若い旅

相生市　中塚礎石

美しい嘘のカクテル酌み交わす
止まり木の末席で飲むコップ酒
運動会形の違う握り飯
大胆にさせる女に注ぐワイン
指揮棒はまだまだ元気追いまくる

芦屋市　黒田能子

ポーカーフェイス戸惑いは悟らせぬ
きっちりとセットされては買いにくい
あっさりと受け流してる向かい風
ただ月を仰いでいますぼんやりと
賑やかにしゃべっていても淋しい日

尼崎市　林　昭三

移り住み神奥の端を担いでる
ポスターはまだ笑ってる投票日
灰皿が客人用に一つある
五十年添って似たもの夫婦です
塀越しに頑張りますと百日紅

尼崎市　春城年代

身のほどという分別もあり老いたのし
午前中のリハビリ一日のメリハリに
書店のはしご近頃やっと二三軒
盆暮れも暑中見舞も遠去かる
夕顔やシャワーを浴びてゆかた着て

尼崎市　春城武庫坊

蝉の声減りだし暑さ減りだすか
炎暑昼間犬もあきれて欠伸する
六十年たつが野戦の夢を見る
大陸で鍛えた足も歳をとり
雑魚だけど　も一度海で泳ぎたい

尼崎市　長浜美籠

メール馴れ字と人物が結べない
ラストチャンスゆっくり呼吸整える
胸奥に一線引いてから強気
スタートへ弾みをつけるドレミファソ
適齢期の自信匂わす髭の伸び

尼崎市　田辺鹿太

わたし達出会い頭の夫婦です
健康に自信と不安入りまじる
悲しみを笑顔で語る三回忌
我慢したことが今頃悔やまれる
駄目ですと言えない僕が情けない

尼崎市　軸丸勝巳

敗戦の曠野を踏んだ足も萎え
軽すぎて語れぬ僕の終戦記
議定書よごめんクーラー熱気吐く
打ち水の杓が喜ぶ土の道
ヒロシマを世界に翔ばす千羽鶴

尼崎市　松下比ろ志

公園の夏を揺すぶる蝉しぐれ
汗拭いて黙祷しばし原爆忌
千枚田の田毎の月や敗戦忌
アスベスト禍またも社会の暗い襞
おとぼけの顔で噂をやりすごす

伊丹市　山崎君子

戻り梅雨花いきいきと喋り出す
俄か雨相合傘で濡れている
盆休み身辺整理外は雨
盆の雨あの日の涙亡子は愛し
絵に貰う平和と命阿弥陀展

三田市　久保田　千　代

新調のはさみがやっと手に馴染み
自信喪失鏡覗いた朝の顔
熱帯夜　枕なんどか裏返す
冷奴これぞ日本の風物詩
意地捨てて少し素直に泳ぎたい

川西市　米　原　雪　子

花粉症去れば夏風邪忍び込み
腰痛後近道選ぶ癖がつき
黄信号努力実って青となる
黒枠の若者の笑み胸痛む
一点差思わずファン合掌す

川西市　西　内　朋　月

間違えて覚えた文字が直らない
にっこりとされると男従いていく
人間を養っている牛の乳
一キロに笑顔が浮かぶダイエット
ハイになるお酒の毒が効いてくる

西宮市　山　本　義　子

静けさをとり戻し山ひと眠り
食器棚も秋いろにしてひとり悦
雨宿り不届きなことふとよぎり
藍いろは洗うほど冴え天のいろ
片想いでもいい人を好きになる

西宮市　坪　井　孝　一

調和より我慢の多い人の道
つながりは半端にせぬと絆の字
雨の日はピアノが似合う喫茶店
アリバイを作ってくれる飲み仲間
飲み会のおひらき直ぐに席立たず

西宮市　菊　地　トミヱ

沙羅の花愛でて頂く茶菓の味
京和菓子飾って置きたい茶も添えて
茅葺きの屋根は日本の原遺産
知床の自然遺産は熊も居る
菅笠の優雅に踊る風の盆

西宮市　門　谷　たず子

乗り遅れひとりになった風の道
残り時間をだいじにめくるカレンダー
空箱を重ねて未練ためている
みとめねばならぬ老いだと知るヒール
遠雷にわが身一つのかるさかな

西宮市　秋　元　てる

仮釈放だがと笑顔で退院す
しぶしぶと母癌の子に灰皿を
だからとて生き方変える年齢でない
米寿にとドレス新調気が若い
夏草を刈る久し振り父母の墓

西宮市　井上松煙

牛を買え鯨は捕るな勝手すぎ
牛歩でも妻の道連れよしとする
ある時は脚立で蜂に襲われる
間違い電話空巣狙いの下調べ
グループに引っ張り込まれ若返る

西宮市　牧渕富喜子

娘が選ぶ服がいささか派手すぎる
掃除洗濯　食べる事して蝉ジジジ
溢れ咲く赤の小花の暑苦し
神戸行き大阪行きのゆかたかな
スローライフうわさに蠶が立っている

西宮市　緒方美津子

八月の空は重たい原爆忌
悲しさも嬉しさも合う母の寿司
バカ話どんなとこでも盛り上がる
仏頂面　阪神負けているらしい
路地の奥屋台が昼寝しています

西宮市　亀岡哲子

ご主人の一歩へ犬は五歩あるき
お供養は祖母のおもかげそばぼうろ
参加して一票の差の多数決
プレイボーイ今は平和に実家継ぐ
甲子園は雨だ　もうすぐうちも降る

姫路市　古川奮水

ひまな朝時計代りに見るテレビ
警報へ雨戸に替えて老いふたり
どっしりとコアラのお尻まるすぎる
欠勤の理由に男の値を下げる
いぬの日を選ぶ笑顔は春らしい

兵庫県　大谷幸次郎

恍惚の母のハミング童歌
茄子胡瓜みんな自慢の種にする
阿と吽で心繋いでいる夫婦
難しい顔は洗って出直そう
黒揚羽追う夏帽子捕虫網

奈良市　米田恭昌

五色豆健康（まめ）にくらせと恩師から（師を偲び　3句）
人魂の噂の屋敷買い叩く
ほんのりと口紅さして娘の脱皮
独房で極楽浄土夢見てる
いつからか我が家は金に縁がない

奈良市　天正千梢

知床の大地の果てに癒されて
ひと片の雲が流れて羅臼岳
流氷は神がつくると思いたし
知床連山わたしも自然の一員だ
日本ほどよい国はないパスポート

生駒市　飛永ふりこ

上がりハァハァ下りガクガク金毘羅山
おせっかいすぎるあなたに身構える
潮風と共に思春期和歌の浦
さよならの文字を揺さ振る波頭
散り際が花火のような夏の恋

橿原市　居谷真理子

花火師が死んで回向の大花火
カウンター味を盗みに来た顔だ
ちょっとしたミスで患者が死ぬ仕事
ベランダで吸うのが一番落ち着ける
一房におんなじ粒はない葡萄

橿原市　安土理恵

ごはん時だけは一応差し向かい
恐れながら蛇足一言申し上ぐ
人を刺す言葉はみんな捨てました
行間をたっぷりたっぷりの想い
お喋りなパンジーがいる花時計

香芝市　大内朝子

恋をする御伽噺の中にいる
打ち上げの花火へ思う焼夷弾
勤めあげ今年金のパラサイト
スイスイと上手に生きるアメンボウ
まだ生きるつもり自転車買い換える

大和郡山市　坊農柳弘

名月に背かぬように酒を酌む
愚かさを見透かす燗冷めの銚子
言い訳はしないと決めたコップ酒
逆らえぬＤＮＡという魔物
気配りが過ぎて小石に躓つまずく

第77回　奈良県川柳大会

日　時　10月23日（日）10時開場
会　場　地域交流センター　リーベルホール
りーべる王寺東館　５階
お　話　墨　作二郎（点鐘の会主宰）
兼　題
「近　詠」　阪本　高士選
「たまご」　乙部　美鈴選
「　魂　」　安土　理恵選
「甘　い」　宮田　宣子選
「　水　」　古川　明酔選
「とんぼ」　尾崎　潔選
「動　く」　福田　道子選
締　切　12時・各題２句
参加費　1500円（大会誌呈）
懇親宴　3000円（お申込みください）
欠席投句の方は定額小為替1000円を同封の上
下記へ**10月15日**までに郵送してください
〒636-0023 奈良県北葛城郡王寺町太子1-7-28
菱木　誠　TEL0745-32-6187
問合せ先　杉森節子　TEL0744-27-4019
主　催　奈良県川柳連盟

原稿募集

エッセー　一四〇〇字（四百字詰原稿用紙三枚半）
ひとこと　三〇〇字（たて十五字・よこ二十行）
エッセーは同人のみ、ひとことは同人・誌友不問。題材は問わず。共にタイトルを別につけて下さい。締切り期限は問いません。ただし、原稿の採否、掲載の時期、添削は編集部に一任して下さい。
本社事務所宛

川柳塔の川柳讃歌⑩

木津川　計

本代引く酒代 余ったのが教養

内海　幸生

人間の値打ちは学歴で決まるのではありません。問われるのは教養のありなしです。その教養は本代引く酒代の余り！　幸生さんの編み出した公式です。そうやったんか、僕はいささか飲み過ぎたばかりに…。それにしても、酒は人間の飲み物です。動物どもは水を飲む、のではありますが――。

良心を試す財布が落ちている

安達　はじめ

教養が大切なのは善悪の区別ができるからです。ウロ覚えですが「拾得物届けるまでの時間」なる句に出会って共感したものです。結局、教養が良心を試したのです。松竹新喜劇の名作「人生双六」も冒頭、失業者が財布を拾い、届けて開いた運でしたね。

頭下げ僕は偽善者だと思う

岩佐　ダン吉

人の世は善と偽善の闘いです。無教養で一片の良心も持ち合わさぬ非道な人間は別にして、偽善は善に抗えません。頭を下げざるを得ないのです。亭主が女房に頭が上らないのも分ろうというものです。しかし、僕は、偽善者であると公表されたダン吉さんを尊敬します。僕はいまもって公表しないままです。

割り勘になると本気を出してくる

岩佐　ダン吉

ダン吉さんの人間観察眼です。居候が三杯目をそっと出すように、おごられると分っている酒には遠慮があります。反論もしません。ごもっともごもっともとなりますが、割り勘となったら対等です。〈誰に遠慮がいるものか（「ふたり酒」）、人間て現金なものです。そういえば居候や食客の昔が懐しいですね。

話しているうちにいやになった人

志田　千代

「文は人なり」であるように「話も人なり」なのです。上手な話し方が大切なのではなく、何を話すか、内容であります。その浅薄、あるいは非常識に呆れたこと、僕も何十人でありましょうか。だからネットでのバーチャルな恋愛は、多くが幻滅であり、危険でもあります。千代さんはネット恋愛ではなかったでしょうが、これからのフェース・トゥー・フェイスの中で、いっそう好きになる人に出会われますように。

高級なホテル安定剤で寝る

神夏磯　典子

ひと昔前、㊎㊐の二極が論議の的になりました。只今は勝ち犬・負け犬の二分ですね。今時分、中流9割を信じるバカはいません。所得格差のおびただしい開きです。貧しい「下流」を自任する僕ですから、一泊ツインで七万円というホテルに驚きます。安定剤で典子さんは寝られたのが幸せでした。僕はもったいないから一晩中起きています。フラフラになって翌朝、駅のベンチで熟睡します。

退屈な日はコンビニを見て歩く

植田　一京

一京さん、そんな方法がありましたか。ですが、時間がかからな過ぎる（大阪弁です）と思えるのですが。ついでですから年をとらない方法をお教えします。①週に一度百貨店（もしくはスーパー）へ行く。②月に一度封切られた洋画を見る。③孫と住む。④理想を失わない。⑤恋ごころを枯らさない。で、青春はいつまでもです。一京さんもまた。

（立命館大学教授・『上方芸能』誌代表）

自選集

河内天笑

笑うにも泣くにもことば要りません
笑ったり泣いたりしない茄子胡瓜
賢いが烏は人を騙さない
食われても自殺はしない獣たち
ウイルスは次の一手を考える

黒川紫香

毎日を天井見つめ所在なし
夢だけで張り切る事もある暮らし
風通しいい日の夢もまた楽し
熱のない日の夢は極楽だ
風のある日の窓は賑やかだ

小西雄々

こおろぎの声も衰え秋暮色
あっさりと妥協テーブル丸くなる
三分粥　五分粥微笑こぼれそう
除草薬撒いて若者墓地を去り
亡母の夢墓参をせよと言いたそう

小林由多香

温暖化だろうと夏は暑いもの
子守唄歌うと眠る素直な子
旅仕度わくわくあれもこれも詰め
前年比だけは稼いで生き残る
連休を避けてのんびり旅を組む

斉藤姦

少年よどんどん祖父の背を越えよ
子の種子をやんわりと抱く土は母
競い合いどの芽もみんな伸びている
紫陽花の雨とのんびりする土曜
悠然と霊峰競うこともなく

田中正坊

昭和史に忘れられないツーショット
どうせなら気ままに生きる方がよい
ささやかなプライドがある私にも
喜寿の宴　祝辞をのべている八十路
センパイと呼ばれ長老とも言われ

玉置重人

順番がだんだん近くなってくる
バイキング腹八分目を忘れかけ
身のほどをわきまえている粗衣粗食
一新の表紙に心新たなり
命ある限り八月十五日

太陽が沈むビールは冷えている
争っていたあの頃は若かった
裸でもいいと昔の嫁話
捲るのがよくて持たない電子辞書
記憶まだ八十路に残る夏の雲

恒松町紅

二貫目の西瓜今年も盆が来る
老い二人ペット一匹つつがなし
うっかりのごはんおいしく食べてくれ
マネキンの服が妻には似合わない
六十年　涙新たに敗戦記

遠山可住

戦争を知らない人が苦労する
盂蘭盆に蓮のつぼみと萩桔梗
零戦の六十回忌　蛍飛ぶ
生け捕りの蛍逃がして生き延びる
美しい菊を咲かせるまで生きる

土橋螢

夏の雲とんでもないを宇宙船
税務署もとんでもないを少し聞き
謝罪ショーとんでもないの値が下がり
時代の差とんでもないが法に成る
法の嘘とんでもないを繰り返す

仁部四郎

憎しみが混じって木の実熟れ頃に
芒野で行方不明のかたつむり
うたかたの一つに妻を住まわせる
墓碑を買う話も尽きてきた枕
軍神の碑がありカッコー鳴き給う

波多野五楽庵

入りこんだ水の都の迷い道（イタリアの旅）
ゴンドラに酔ってベニスの良さを知り
カーニバル仮装に燃えるサンマルコ
ペンデイングフェス人気のサンマルコ
目を見はるガラスドームのアーケード

芳地狸村

いい妻で五十五年も添うている
国産のうなぎに元気土用丑
死ぬまでを二人三脚楽し酒
上等兵まだ生きてます終戦日
玉砕もあり生還もあり人生

宮口笛生

満天の星を数える余命表
八月の墨絵忘れぬ血の涙
身のほどを知って暮らしの靴を履く
八十八道草食った遠回り
すだれ越し風鈴の音秋を呼ぶ

森下愛論

歩みつづけ給う仏の足の指
坂こえて盆の仏が来てくれる
千手観音の手は絆とも鎖とも
髪洗う　ふと親に似た頭蓋骨
中指小指　感謝をこめてマッサージ

八木千代

近松の情け人形袖ぬらす
午前五時ホルスタインが朝を待つ
けつまずいた石に恩師の声がする
きっかけを忘れられない雨の駅
母に抱かれた数だけ母を抱いてやろ

八十田洞庵

神様の手抜きか老母にボケが来た
喪が明けた女ダイエットに挑む
参拝へニセ札神に失礼だ
北朝鮮の正体見たり拉致と餓死
七輪を持って家出をしたそうな

両川洋々

それ古いなあとあっさり没にされ
叩かれて耐えているの歳かしら
歳かしらすぐに妥協をする弱気
年寄りの冷や水梯子ふみ外す
平凡な日々年金の枠の中

阿萬萬的

介護5を泣かせた罪なハーモニカ
グーばかり出してちゃっかり貯めている
よく稼ぐ靴を水虫遠慮せず
水着跡競い二学期子が元気
米寿まだ飲める幸せ子と夕餉

石川侃流洞

あの頃に戻りたや母抱いてくれ
言いわけはせぬよう花に教えられ
もう少し待とうか花が咲くまでは
恋をした記憶の中で茶を淹れる
恋人の小さき乳房から便り

板尾岳人

遠くから呼ぶ声しきり夏も逝く
胸の乾きレモン一滴したたらす
戒名の彫り跡白く目に沁みる
縁かな供えた花に蝶が舞う
ねこじゃらし良きライバルの居て楽し

奥田みつ子

長考の一手読まれて苦戦する
これ以上進展せぬと妥協する
風の向き変わって読みが狂い出す
長いのに巻かれているも生きる術
逆思考ヒントに謎が解けてくる

河井庸佑

まっすぐに育て大樹にならずとも
燃えつきてしまえばいっそう楽だろう
誰にどう言われようともまっしぐら
補聴器をはずして無我の境にいる
時として前に出たがる影法師

川島　諷云児

歓待をされると酸欠気味になる
錆びも出てメッキもはげて来る卒寿
無位無冠今日も静かに昏れてゆく
毒舌を売り物にして未だ元気
頂点に立つと矢弾が飛んでくる

木村　あきら

第29回 寝屋川市民川柳大会

日　時　11月3日（祝）正午開場
会　場　寝屋川市立総合センター4階
（京阪寝屋川市駅下車　バス西口乗場より守口市駅行・太間公園行他）
兼題と選者
「　愛　」　平松かすみ選
「　親　」　前　たもつ選
「屋　台」　江口　　度選
「ジャンプ」　山路　節子選
「　菊　」　宮西　弥生選
「文　化」　岩佐ダン吉選
席　題　ありません
出　句　各題とも2句　締切1時
賞　各題秀句に賞状と記念品
会　費　1,000円（記念品・作品集）
投　句　10月29日必着（切手400円）
送り先　〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田博泉内　川柳ねやがわ
主　催　寝屋川市川柳協会
後　援　寝屋川市文化連盟・川柳ねやがわ

市制80周年事業
第56回 西宮市民文化祭川柳大会

と　き　10月23日（日）開場12時
締切13時30分
ところ　西宮市民会館（市役所南隣）
会　費　1,000円（呈作品集 郵送）
宿題・選者（各題2句・席題なし）
「バランス」　牧渕富喜子選
「苦　　手」　宮本　喜明選
「き ば る」　小山　紀乃選
「弾　　む」　松本初太郎選
「意 地 悪」　石井　冬魚選
「ふわふわ」　福島　直球選
投句締切り　10月15日
投句料（80円切手×8枚）
便箋1枚に6題12句（当方清記選）
投句先　〒662-0023 西宮市城山12-8
水無瀬冨久恵☎0798-73-4666
交　通　阪神・JR西宮駅下車
懇親会　4,000円　当日受付
共　催　西宮北口川柳会　西宮川柳会
甲子園川柳社　ほか

第15回 枚方市民川柳大会

日　時　10月30日（日）午後1時半開場
場　所　枚方市立枚方公園青少年センター3F
（京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分）
お　話　礒野いさむ
宿　題
「タッチ」　足立　淑子選
「背　中」　薮内　直人選
「怪しい」　大堀　正明選
「希　望」　浅雛美智子選
「はっきり」　吉岡　　修選
「拒　む」　三好　聖水選
席題なし　各題2句　締切　午後2時
参加費　1000円(発表誌呈)欠席投句拝辞
賞　市長賞・市教育委員会長賞
市議会議長賞
主　催　くらわんか川柳会
後　援　枚方市・枚方市教育委員会
午前中は「鍵屋資料館」でお楽しみ下さい。（会場の近くです）
連絡先　〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301
足立淑子　Tel 072-853-8153

板尾岳人選

寡黙でも仲間に明かす志
座布団に話の続き置いてくる
釣り橋が揺れて二人の縒り戻し
告白のチャンス逃がした俄雨
適当に車間距離とるいい仲間
明日のため少し余白を空けておく

高槻市　佐甲昭二

三猿の一つへ妥協許されず
蓮の花浄土の匂いしてならぬ
肩書が欲しいと思うちびた靴
母の愛そのまま出来たにぎりめし
頂いた余生へ燃える彩探す
ほうし蝉わたしと泣いてくれますか

今治市　塩路よしみ

駅ごとに少女を消していく化粧
地球ごと自爆する気でいるみたい
天国に手をふってみる観覧車

浜松市　杉浦えむ

夕立にはしゃぎすぎるなトタン屋根
彼女の眼見ればわたしの点が出る
満期まで今日という日を積み立てる

今治市　野村清美

淋しくて優しさくれる花を活け
夢乗せた雲の行方がわからない
青空へ小さい悩みが恥ずかしい
気をつけて登り始めた八十路坂
淋しさを募らす風が戸を叩く
そば枕返して思案まだつきぬ

和歌山市　柏原夕胡

無風地帯の中で欠伸をするこころ
蜜たっぷり盛って天敵飼い慣らす
天職と思う三食昼寝付き
落雷を甘く見ていた紙コップ
汗を掻きたいのでちょっとハワイまで
痩せたから痩せたねなんて言えません

和歌山県　辻内次根

楽しい日脳の目方が殖えている
皆空を目指して抜けた蝉の殻
目を開けていると見落とすことがある
老眼の度数余計なものが見え
その先を断たれたように言う老化

和歌山県　森下順子

炎天下雑草どもの自己主張
古希の坂まだまだ種を蒔いている
いくつものドラマを超えて来た貌だ
死ぬ日まで見果てぬ夢を道連れに
適当に灰汁があるのが魅力です

和歌山市　寒川武

嫁がせて天井ばかり眺めてる
体調が戻ってペンがよく走る
鏡には父に似てくる顔がある
値切れない僕は言い値で買っている
クリスチャンと知らずに数珠を持参する

和歌山市　根田よしこ

盆が来る亡父は帰って来ないけど
呑める時呑んでおけよと亡父の顔
平成の姥捨山もあると言う
コスモスが無理をするなと笑ってる
何時かしら夫婦喧嘩もしなくなり

和歌山県　木村徑子

一度でも空飛びたがるパスポート
氷河期が来るかも知れぬ不安抱く
人間の英知ロボット進化する
文明の進化と共に病む地球
病む地球リフォームをするすべがない

田辺市　大峠可動

盆の月　痩身居士の忌　檸檬の忌
脳科学やがて脳ミソ売りに出す
リハビリに五体同化の盆踊り
愛に笑み重ね夫婦の道しるべ
蝉時雨　風の嫉妬を背なで聴く

倉吉市　酒井芙美子

決心がつかず指切り躊躇する
大皿に一年中の夢を盛る
受け皿がなくて宇宙に浮いている
腹一杯御飯食べれる有難さ
倦怠期ゆるんだネジを巻き直す

鳥取市　谷岡清子

夫婦とて日々車間距離おいている
百歳を視野にずぶとく生きる欲
人生は恥を捨て捨て坂登る
たべるだけあればと明日の命の灯
政治家のお口が旨い乗せ上手

六十年前もあの日は暑かった
キノコ雲の下で起こった地獄絵図
六十年いろいろあった人生よ
落日の曲を奏でる蜩よ
法師蝉夏の終りの曲を弾く

鳥取市　近藤秋星

八月を語る若者達もいる
情報の波にアンテナへそを曲げ
逢える距離なのに電話が長くなる
暑中見舞猫もわたしも伸びてます
冷水にレモン一滴昼さがり

鳥取市　森　美智代

蝉みたい泣けたら気分良いだろう
励ましがあるからつらい坂登る
昼は花　夜は星空平和です
争いは心の中で黒くなる
まだまだと後押しされて背をのばす

松江市　山根邦代

つまらない約束ばかりして忘れ
太陽がのぞくと森はさわがしい
我が家の太陽たまにスト起す
欲出して裸になった白兎
一言が過ぎて争う今朝のうつ

出雲市　川島和歌子

やりたくて重い荷物も気にならず
ふり向けばいつも優しい亡母の顔
楽しげに話が弾む道の駅
サンダルで気楽に来いと言うメール
歳とったおかげで辺り丸く見え

雲南市　菅田かつ子

初対面顔も言葉も薄化粧
敬語には敬語使って舌を噛み
涼しい風吹いて噂も盛りあがり
見栄張った分だけ家計穴があき
偶然にしては良すぎるタイミング

島根県　武島ちよえ

空に舞う平和を願う千羽鶴
骨のない戦死の兄の墓洗う
無視出来ぬ雑魚一匹にある動き
まだ若い気へ贈られる古希祝
出る釘になるまい老いの保身術

宇部市　高山清子

戦争は昔ばなしになっていい
六十年たぐり寄せればすぐそこに
さしあたり痛いところはないけれど
この夏に負けぬつもりで四つに組む
心機一転楽しい本にめぐり会う

府中市　藤岡ヒデコ

やがて秋風を刻んで種をまく
生き下手で他人の仮面借りて来る
尾を振ったばかりに道をふみはずす
野の風と走り息つぐ母の毬
背伸びする母の背中が重すぎる

広島県　馬場利子

コスモスが画布一ぱいに咲き乱れ
コスモスは唯そこにあり人を待つ
寄り添うてコスモス風に耐えている
善と美と何時も忘れず秋桜
明日あるを信じ心のネジを巻く

今治市　渡邊伊津志

ひそひそも好き賑やかはもっと好き
落書きの傘へ少年むきになる
気の付かぬ振りをしている下心
駆け引きを気楽にさせているゆとり
扇風機律儀に首を振っている

大洲市　花岡順子

やがてやがて地球はゴミに包まれる
晩成へゆっくり辞書の野を歩く
へそくりに徴を残して梅雨明ける
論争は互角で夫婦恙なし
お葬式ひとり笑っている遺影

札幌市　三浦強一

夕方の元気を稼ぐ気のひる寝
蝉の声肴に主婦の暑気払い
無音の子思い飛行機雲を見る
口中に夏が広がる初茗荷
渋滞を知らぬ都心の盆休み

東京都　長谷川康子

気が付けば妻も言ってるどっこいしょ
主夫の真似したくてしてる訳じゃない
柔かな頭で喧嘩無縁です
生きている証に人は自己主張
談合も裏から見れば助け合い

昭島市　野口忠

地球ごと世界遺産に登録す
引いた子に引かれて歩く長い坂
また手術神に何度も試される
おかわりに母の細腕繁盛す
金持ちを募集している月旅行

横浜市　巌田かず枝

席座りたいが譲られたくはない
借金国日本が金を当てにされ
成田ラッシュ不況脱出したらしい
変人でないと日本は変えられぬ
米研いで待つまで夫鍛えられ

横浜市　長島亜希子

健診の身長かかと少し上げ
補聴器を付けろつけろとやかましい
お通じの話も軽く老いの朝
糖尿の予備軍今日も縄のれん
晩酌の後に待ってる皿洗い

横浜市　金森徳三

台風一過どうやら孫のことらしい
子の決めた人だ素直におめでとう
抱き癖をつけてお返しいたします
聞く耳を持たぬ只今熱愛中
忘れまいキミのやさしさ温かさ

横浜市　川島良子

胃カメラでのぞいて酒をがまんする
地下鉄はなんだかこわい田舎者
兄弟けんか馬鹿さ加減をさらけ出す
御名御璽意味は知らないまま使う
欲しい雨三日続くと嫌われる

佐渡市　髙野不二

混浴の湯気の向こうは殿一人
持ち帰るゴミに親子のさわやかさ
夏祭りサンバ聞かせる拡声器
決断に迷うメールの押しボタン
ナス漬けの青に食欲助けられ

犬山市　関本かつ子

決心がつかずコーヒー掻き回す
ネクタイを外して男隙見せず
蝉しぐれこの世はすべて多数決
伝来の武具厳めしく兜虫
蟻の列中にニートもいるらしい

岐阜市　平野あずま

水たまり名月がゆれ蟻もゆれ
わだかまり溶けぬ心の棘だらけ
ローソクの数が足りない誕生日
夕焼けの神業色は画にならぬ
あの星のまばたく合図彼らしい

静岡市　中西雅

日焼けには黄色い花の咲くゴーヤ
もの好きの暑さに向かう登山靴
夕立に歓喜のうたげ花時計
長雨に発酵してる子供部屋
モッタイない線をたどれば祖母もいる

京都市　桝本宏子

平均寿命まだ間があると背を伸ばす
犯罪をインターネットが指南する
ライトアップ花も仏も眠れない
庭の花に水が欲しいと起こされる
蝉だけが今日もやる気を出している

京都市　三宅満子

大阪市　三浦千津子

いい目覚めいい風に乗る軽い靴
しっかりと聞く耳を持つ記憶力
重宝な口に乗るしかない弱気
まだ少し女でいたい若作り
寂しいと言わず甘えていいですか

大阪市　尾崎黄紅

幸せはコイツアイツの友がいる
枇杷の種西瓜の種に諭される
軍服のぼくの写真に叱られる
亡父母の歳足して割っても余る歳
五十年同じポストにいれている

大阪市　升成好

そのたびに懲りてるはずの二日酔い
一合のくすり代りが物足らず
家出ほど荷物かかえて妻の旅
ほめないですぐ自惚れる鼻だから
じゃぁねえのあとがまだある長電話

大阪市　中村忠敬

アルバムの父の顔今僕の顔
嫌味かなシャンプーセットの贈り物
仲直りしたしるしですスペアキー
飲みたいが肝臓の許可おりません
折詰に言い訳詰めて終電車

大阪市　伏見雅明

亡父に似たうしろ姿を追い越せず
風鈴が無口決めこむ昼下がり
荒波に漂う小舟ふたり乗り
宴会の軍歌調子はずれがち
迷路からやっと抜け出しまた迷う

大阪市　中井崩

平等に時は流れて二人きり
義父が逝く火種をひとつ置いたまま
ストレスも放り込みたい洗濯機
孝行は孫を抱かせた事ぐらい
おねだりの孫の背を押す嫁が居り

大阪市　中村れんげ

サインするこれがわたしの証です
振り向けば駆けて休んで八十路坂
久々の友の便りに星を見る
百までも女でいよう大正っ子
煩悩は勝手に大道闊歩する

池田市　上嶋幸雀

真夏日のマネキン秋へ澄まし顔
立秋もまだ生きるぞと蝉時雨
花火師の主張弾ける夏の闇
貧乏も金持ちもない冷奴
エアコンがうたた寝させる終戦忌

泉大津市　助川和美

墓参り手を合わす子は受験生
ごめんねと嫁に謝る母長寿
茶柱はやっぱうれしい声に出す
午前様今日も寂しく茶漬する
工作は父の宿題夏休み

泉佐野市　稲葉洋

敗戦忌ただ満腹の有難さ
お月様だから静かに話せそう
物思う秋なぜ酒の酔い早し
儂の気を知ってか虫の音がちぎれ
欲しいなあ恋という名の活力素

河内長野市　木太久正一

思いきり男の料理夏野菜
靴磨くこと無き日々を健やかに
洗濯物濡れてますよと言う電話
久し振り北の零年小百合見る
好きだからいいのだ　おれが介護する

岸和田市　森元ふみよ

女房に言い負かされて空しい日
表札に亡夫の名前空し過ぎ
見切られた金魚一匹十年生き
日本中迷惑掛けるひと科増え
そっと掛け亡夫の眼鏡蘇る

岸和田市　中岡香代

座布団は尻の重圧堪えしのび
便利さが老いさせていく退化論
姑誇る息子は嫁の言うがまま
名案がくしゃみ一つで飛んでいき
木簡が古人の話語り出す

堺市　大久保伸子（のんこ）

調子よい嘘と知りつつ遣り過す
石橋をたたいて割ってしまう人
人間はみんな大人になるのです
運命の流れのままに生きている
月見草恋の思い出たぐりよせ

堺市　羽田野洋介

かき捨てたつもりの恥がつきまとい
地方紙が温もり運ぶ旅の朝
漂う雲見上げる余裕やっと出る
運不運まだ決まらない古稀の坂
渋くなりやっと歩幅の合う夫婦

高槻市　大崎侑子

待ち合わせ手違いあってから疎遠
かけ違い気づきそのまま長電話
間違いは誰にもあると鷹揚に
愛知博二時間並び二分見る
クラス会羽振り良いのに牛耳られ

富田林市　古田千華

お盆前逢いたい亡母と夢の中
涼み台出番がなくて納屋の奥
キャンピング三日月さまも仲間入り
人生のラストスパートまだ余裕
笛吹いてグループ操る弥次郎兵衛

寝屋川市　岡本勲

ひかり増す世界遺産の仏たち
七くせの一つが嫌で揺れてます
生かされて夢膨ます古稀の春
人生も途中下車してリフレッシュ
おもむろに老眼鏡でマイペース

寝屋川市　北田ただよし

ロボット界リストラ強いるボスがいる
ロボットも競売されてリサイクル
ロボットが非核運動はじめ出し
ロボットも秋の月夜にセレナーデ
ロボットのプロポーズ受け愛結ぶ

寝屋川市　森田れい子

切株に一途な花が一つ咲き
米寿なお凜として舞う足袋の白
あの星をあなたと決めて十年忌
親離れした順にみな飛び出した
初蝉に夢の余韻も弾け飛ぶ

羽曳野市　吉村久仁雄

昭和史を漂う父の反戦歌
美食家が目のない老母の握り飯
敵襲の顔で男がする料理
般若心経となえ男の台所
無愛想に不義理に僕をする猛暑

羽曳野市　福田悦子

浮かばせてあなた任せの風に舞い
耳栓の奥に残った亡母の声
広すぎる父の背中に届かない
尽くされて返せなかった親の恩
初恋の彼と夢で手をつなぐ

羽曳野市　仲谷真一

解散し国民の声届きます
甘い柿官僚だけが食べている
戦争の靴音高し改憲論
尽しても尽し足りない人がいる
ジャンボくじ今年の夏も夢断たれ

羽曳野市　森下一知

中二階あたりで止まる出世道
見栄をはる財布の底が抜けている
ストレスを詰める袋の有料化
ライバルの目の輝きに負けました
包丁を研いで女房に恨まれる

山の湯は落葉と共に露天風呂
野仏に祈る人ありよだれかけ
ラブラブとひやかされいる老夫婦
晩酌に満足そうな夫の顔
只今と大声で言い独り居る

東大阪市　大塚サキ子

還らない刻ばかり追うちぎれ雲
喉仏心貧しく上下する
原点に戻れば明日の彩がある
影法師お前も責めていた一人
信用というメリットを忘れかけ

東大阪市　今岡貞人

人生のラストダンスは妻がいい
凝りもせずこれがラストと宝くじ
蝉時雨老いの寝起きに気合入れ
うたた寝の老いの夢消す蝉時雨
辛い時これがラストと慰める

枚方市　小川良吉

二人居に一番風呂と終い風呂
少々じゃへこたれません戦中派
鈍な娘が蘇生しました伴侶得て
暑いのが一番辛いと言える幸
心地よいお世辞にケーキもうひとつ

藤井寺市　俣野登志子

大文字亡夫を偲べば足が向く
暑い陽を浴び過ぎました牛蒡色
淡麗に替えて一本多く飲む
悩み事吹っ切れたのか来ぬ電話
楽しみはキャッチボールの無駄話

藤井寺市　吉田喜代子

惜しいねと言われて辞める難しさ
通知表惜しい惜しいと孫を褒め
悪運に追われ恵まれ五十年
禁酒日の前と後とで元を取る
ブランドの水着は水に浸けられぬ

八尾市　田邊浩三

職人が無口だなんて誰が決め
ひとり言わたしにもある誕生日
青春の恋は素顔が走り出す
犬小屋を不動産屋に狙われる
ちらちらと回転ずしの皿に乗る

八尾市　平川幸枝

行くゆくは漢字こっそりカタカナに
土壇場で母の裏打ち物を言う
泥かむる覚悟で重い荷を背負う
惜しまれるうちが花よとせかされる
有頂天足掬われる水たまり

八尾市　松葉君江

八尾市　田中トシエ

シャボン玉飛んでるうちが華だった
信玄袋ほこりはたいて老いの旅
手鏡を拭くと明日が見えたよな
風向きを変えて大きな傘をさす
引き返すほどの重みのない荷物

八尾市　脇　俊子

足裏をたたいて脳に笛を吹く
風鈴が風をたわむれひとり風呂
解体の屋敷にトンボ覗き来る
青だたみ贅沢な香が乱舞する
気がよどむその日は雲と会話する

大阪府　小栢こずえ

ノルマない仕事だけれどはずみ付け
大荒れのしない台風来て欲しい
野に遊ぶ蝶の気分でショッピング
無駄話したら元気が湧いて来た
生きてれば苦労がいつも付いて来る

大阪府　高木道子

十を聞き一も悟れずロスタイム
人数に合わせすいかを切る特技
ワンテンポ遅れた人生風に舞う
末席で思い違える多数決
母九十ときどき遺書が書きかわる

大阪府　神野千恵子

無表情きっとメールの副作用
食べるため生きてるような食文化
痩せる気で買ったドレスがあくびする
飲み過ぎも吸い過ぎもあり自然体
動物は幸いなりし武器持たず

神戸市　両川無限

魂のかわきをいやす水中花
人間の真価問われているとっさ
もう何も言うまいスープ冷めてくる
遺言に妻の意向も書きそえる
さらさらの紙も私も裏がある

神戸市　山田婦美子

いい顔で終着駅に下車をする
水心持って余生を送りたい
変わらない心一つがむつかしい
良妻を演じ続けて肩がこる
この辺で尻尾出してもいいですか

神戸市　田中章子

性善説人の長所を見て笑う
旬野菜汗も一緒におすそ分け
紫外線の怖さ知ってる夏帽子
露天風呂月が裸の品定め
いつまでも笑っていたい青い空

涼しさを感じるように青で書く
ひまわりが大合唱のように咲き
手短な挨拶になる炎天下
スカートの丈まちまちという自由
席をまだゆずってくれたことがない

神戸市　木村忠義

臆病な鬼は鎧を脱ぎ切れず
ライバルと肩を並べたのはおぼろ
堪忍の袋の酸素替えて夏
残暑まだ好みの絵の具見えてこず
どん底の生活に母の知恵袋

相生市　村木信子

絶品のそばを見つけた迷い道
梅干しを抱いてナイルを下る旅
節煙と軽いタバコへ変えている
パソコンの話になると輪を離れ
時々は喧嘩で若さ取り戻す

三田市　堀正和

七三に分ける髪の毛欲しい夫
お百度を踏んで帰りにもぐさ買う
ぬかるみを教えてくれた朧月
たんぽぽの綿毛夫婦の会話きく
話したいことはまだまだ山とある

三田市　石原歳子

越して来て始めに聞いたゴミ出し日
不安感煽りそれでもまだ夫婦
泣く夫を弱い男と思わない
何ひとつ取り柄はないとうれしそう
再起期す出発だから白にする

西宮市　片山忠

ボランティア僕に大きなものをくれ
かずかずの宿題抱えて今日も生き
仏門の宿題多く遠い道
健康法あれこれ梯子して八十路
柚子植えて百まで生きてやるという

兵庫県　安達厚

親が逝きふるさとの駅遠くなる
祇園への道外人さんに教えられ
行間にやさしい母のおもいやり
青田風稲の匂いに安堵する
漁火が面影ゆらす能登の旅

奈良市　矢野良一

笑いには幸せ招く力あり
気を許し招いた客でうそがばれ
一言で味方も時に敵となる
ふともらし味方の妻が敵となる
過ぎし日の裸のすがた語り合う

生駒市　小西稔

草餅の過去を解凍して食べる
難しい話になると眼鏡かけ
古里の連山写し持ち帰る
バリバリに糊を利かせて夏を撃つ

和歌山市　坂部　かずみ

燃え残る火種を煽る午後のお茶
相談にまだ内心は許せない
おめでたい鯛の小骨が喉をつく
どんと花火夜空へ未練散らしてる

和歌山市　土屋　起世子

ふるさとのデコボコ道のいいリズム
一色で描ける真面目な父である
蜘蛛の巣に引っ掛かってやる手品
真実を見たいメガネを拭いている

和歌山市　山田　侃太

吊るされる林檎の首が饒舌に
重力のままに林檎の叩く土
完熟の林檎落下は想定内
おんなです落ちた林檎に月が照る

和歌山市　たむら　あきこ

いい老いを妻と静かに話し合う
これ以上脱げぬ乙女の夏の街
難聴は笑いの渦の外にある
渕をなす水の精達無言なり

和歌山県　村中　悦男

煮物する味のきめては匙加減
踏まれても強く生きぬくわすれ草
ガラス張り良いも悪くもすき通る
便利さを求めて甘え肥満です

鳥取市　岡田　信恵

でもねえと噂話を弁護する
一回もケンカしないと嘘ばかり
蟻の列ほうき持つ手を止めて待つ
神様のさじ加減かなこの憂い

鳥取市　横田　春名

ママの声とっても暑い夏休み
風呂上り一番好きな顔になる
クールビズ気軽に声がかけれそう
油断したはずみうっかり落し穴

鳥取市　山岡　紀子

灰色も大切にして暮したい
草々と納める筆を舐めている
つれづれに埋れ火そっと吹いて見る
無理はせぬ今日はここまで明日がある

鳥取市　中宇地　秀四

勿体ない信念通し妻太る
古里が盆と一緒にやって来る
生きる間は希望の星を胸に抱き
父母が待つ古里の道大ラッシュ

鳥取市　河田　のり代

子は都会母だけ過疎で鍬を振る　鳥取市　山口千代子
楽しみと欲が買わせる宝くじ
夫婦でも一歩下れば丸く行く
気をつかい暮して行くもボケ防止

うな垂れて聞いた玉音暑い夏　倉吉市　前田喜美子
朝露を踏めば鼓動がリズムとる
夏バテの胃に素麺が心地よい
コンテスト浴衣の美女に熱い夏

暑くても殻が脱げないカタツムリ　境港市　中井虎尾
公務員武士のつもりでいばってる
夜の川浮かべた光流さない
どの国もありますそれは貧富の差

ネクタイに馴れた孫からおこずかい　米子市　小塩智加恵
おにぎりとおむすび違いどこですか
信じない美人薄命他所の人
案じない妻は独居に強いから

ハイハイと夫唱婦随の杖みがく　米子市　猪森スミエ
ユーモアを食べて増やした笑い皺
就職の子に常識の釘を打つ
打つほどに釘の頭は答え出す

お土産はいらない無事を待っている　鳥取県　岩崎和子
手を合わせ静かな対話先祖さま
洗い髪軽くゆすって風通る
お日様の微笑みもらい蒲団干す

父母の顔浮かべて選ぶ精霊花　松江市　松浦登志子
涼風がトロッコ列車通り抜け
川下り黄色い声が後押しし
テレビ見てすぐ試す母少し好き

風鈴にくらしの音色今の幸　出雲市　加藤スズコ
読み聞かせ睡魔ゆさぶる子育て期
金魚すくいおまけ貰った宵祭り
八月生れ暑さに負けず乗るリズム

夜明け前ウォーキングする影法師　出雲市　荒木英子
涙なく戦後八十路は語れない
毎日を携帯頼る我が人生
暑さ中身体癒して旅仕度（上海へ）

その昔蟻と歌った労働歌　雲南市　福間博利
面白い男でないが居てほしい
郭公の夏だ夏だとせわしない
ホトトギスひねもす鳴いて涅槃かな

安来市　原　煩悩児

玉音放送聴いたあの日の虚脱感
人間のエゴだと叫ぶ血を取る蚊
万札が俺の財布で落ち着かぬ
遠い昔しんみり話す雪女

府中市　岩本雅代

蝉しぐれ朝のリズムが絡み出す
朝顔に笑顔もらって元気づく
粗大ごみにならぬ暮しの自己主張
老いの眼にきれいに見えぬヘソルック

宮崎市　串間安子

病名は介護疲れだとも言えず
いまいちの娘の味に馴らされる
極楽と湯舟でうたう仕舞風呂
病床で今日のドラマを演じきる

唐津市　岩崎實

最善の努力みんながいう言葉
不可解な横文字言葉頭文字
子が帰りみんな捨てよとごみに出し
虫の音のすだく盆道赤とんぼ

シドニー　三谷たん吉

パソコンとケイタイだけで息してる
談合の以前に決めた天下り
外国にふり回されて国技とは
猫の目に心の奥を見すかされ

シドニー　坂上のり子

しみの手を勲章のよになでている
お互いに片言同士仲がよい
人間がマンガチックに殺される
一瞬の輝き恋に変わってた

メルボルン　藤原ポン吉

改革をしてもせずとも金は飛ぶ
前後策ばかり気にして的外す
選挙戦裏ではるのは巨人戦
真実と嘘を見破る妻のカマ

東かがわ市　向山治延

月晴れてそぞろ歩きや虫の声
お茶でもと声かけられて長くなり
岩屋寺は岩に遍路の鈴ひびく
気がかりなニュースが多い今の世は

高知県　桑名孝雄

平均寿命ゴールが延びて届かない
粗大ゴミの年齢域でする背伸び
無為徒食それに駄作も加わって
酢の効いた男になれと植えた柚子

高知県　百田幸

節約が板についてる戦中派
必要とされてないから自由な身
なごやかに老後を生きる道を撰る
うたたねの夫が耳だけ起きていた

郵政論死んだはずだよお富さん
お盆だネお化け屋敷の選挙戦
とにもかく陰でムチ打つ奴がいる
くやしいが野次馬の僕腹がたつ

秋田県　湊　修水

耳と足　駄目でも頼る目が光る
プライドは汗で暮らした九十五
辛酸を舐めた男の笑い皺
雄弁にまさる訥弁こころ打つ

草加市　飯土井　健翁

地球儀にテロが治まるとき平和
黄金の穂波に嵐などくるな
ピカドンの焦土を語り継ぐ写真
アマリリス人を騙したことがある

日立市　加藤　権悟

熱帯夜蝉も眠れず鳴き明かす
女坂ゆけば野の花語りかけ
週刊誌あとは野となれ暴露記事
物忘れ二人三脚辞書と組む

横浜市　布山　嘉信

蛍光の灯が疎ましい夏まひる（病床吟）
カーテンを開けて満たしている自由
深き夜のトイレおうちを恋うて泣き
カナカナがベッドのわれに秋を告げ

東京都　やまぐち　珠美

毎日が日曜だから忙がしい
動かない脳に油を差すジョッキ
甚平の袖まくり上げ王手飛車
胃カメラも今年はセーフ大ジョッキ

東京都　井上　つよし

今日あのね言える人ありビール注ぐ
充実の一日だった目が冴える
これしきを苦労と言えば罰当たる
到来の胡瓜の山よ雨あがり

犬山市　金子　美千代

オブラート包んだままの荒模様
手造りの玩具箱から出たナイフ
メス入れる切羽詰まったゴミの山
もったいない　しびれ切らした里帰り

犬山市　吉田　幸子

下手でよい味があるある絵手紙よ
故郷の良さは離れて倍増し
雑草も庭で一役担ってる
地震国日本に逃げ場見付からず

尾張旭市　三浦　きぬ

どこまでも追いかけてくる蝉しぐれ
水蜜も西瓜も種が主張する
先になり後になり飛ぶあげ羽蝶
せみがらの主は今ごろ息災か

京都市　清水　英旺

もみじ狩り顔も紅葉のコップ酒
秋風に老いも若きも古都の道
たこ焼を並んで買うてる浪速っ児
すき焼の味しみ込んだ焼き豆腐

大阪市　吉川弘泰

初めからクールビズですホリエもん
煽て上げトイレの掃除逃げている
蝉思い暫く暑さ堪えてます
信念の郵政貫き四面楚歌

大阪市　寺井弘子

何でやねん足の先まで化粧して
富士見町ビルが邪魔して見えぬ富士
世界遺産ひぐまひっこめ言われても
じっと手を見ずに眺める預金帳

大阪市　平井露芳

遠花火　女一人が窓に立つ
この残暑いかがですかと長電話
迎え火を焚く子のうなじ父に似て
老いてこそ生きる値打ちのいぶし銀

大阪市　吉田富美

青空の中に秋色にじませて
秋風にクーラーやっと休暇でる
物忘れ五合目ほどに来ています
今夢中泳ぎ習って古希の夏

大阪市　平嶋美智子

ハイウェー森林浴を突きっきる
羽根のばし鬼のいぬまに寝だめする
ヘソ見せてクラブ振りぬくヤングプロ
挨拶は短かく幸せは永く

大阪市　若月祐作

六十年たってもいくさはまだ続く
久しぶり街で出会った友の愚痴
秋なすを頂き嫁に分けてやる
ゴールまで介護のいらぬ日を思う

大阪市　吉内タカ子

人生を変える入試の書き違い
殴られた思い晶子の反戦歌
牛ほどもよく噛んでるが胃弱なり
改革というふれこみでみな牛歩

大阪市　池上清治

夏休みの宿題解けぬ九月の灯
秋彼岸きょうから牛も急ぎ足
一匹の蛾が流灯を離れない
何事の気配もなくて蟻地獄

池田市　北出北朗

師を想い北斗の星に合掌し
逃げ足の早い幸福また拾う
真夏には西瓜が仕切る地蔵盆
蝉でさえ平和がいいと大合唱

池田市　多田契子

ひたすらに平和を叫ぶ原爆忌
追憶の彼方に蛍ふたつ三つ
帰省子のあの子この子と茄子の馬
ばあちゃんの茄子の糠漬けめちゃうまや

泉佐野市　備後　三代子

道ならぬ道へ寂しさ迷い込む
愛に飢えブランド品で身を包む
贅沢になれて不平の種を抱く
風に酔いホタルに酔っている詩人

柏原市　伴　洋子

責任はわしが持つぞと老いに鞭
責任を誰が持つのか口閉じる
責任は逃げるものだと背をむける
責任感強いと言われ気が重い

門真市　矢阪　英雄

夏やせしない乗るのが恐い体重計
小豆入りお手玉母の遺品なる
転んでも手から離さぬカブト虫
サンマ高値で冷凍サンマ買っている

河内長野市　内海　綾乃

お祝いにしっかり抱いてくれた人
石けんの匂い母さん元気です
知らぬ間に空気のような夫婦愛
戦争を知らぬ国会議員さん

河内長野市　印藤　智子

強がりを吐いて空しい一人旅
空しさの追加は妻の置手紙
鼻緒切れまたも不安を募らせる
白桃が触られてべそをかいている

岸和田市　林　力子

ピカピカのお風呂に遠慮して入り
けたたまし蝉が私をあつくする
もう一度あなたと呼んでみたくなり
音止めてしばし静かに我をおき

岸和田市　堤　楢代

ステテコでそうめん啜る戦中派
食べながら次へ目がいく苺狩り
水槽のうなぎ土用の丑知らず
説教もお布施多いと長いです

岸和田市　坂口　英雄

来てほしくないのが味方するという
人に見せられない物が見当らぬ
想像で裸体を描いた頃もある
またたくま快気の酒が駆けのぼる

堺市　奥　時雄

褒められて含み笑いがもれる帰路
てこずった倅を押さえ込んだ嫁
年金の身の丈に合う夢を追い
口ばかり使ってるから肥えるんだ

堺市　荻野　像山

如雨露水　虫も顔出す草の陰
五十年経っても本気喧嘩する
新聞もＮＨＫもない暮らし
無農薬　虫から葉茎守る手間

堺市　河盛龍三

仏壇にまず挨拶の児等を誉め
何かある異状に動く児の眼
道聞かれ話がはずむ国訛り
子をおいて甘え上手な家の嫁

吹田市　二宮栄子

外人が電車の中でにぎりめし
打ち水の飛沫を浴びて暑気払い
恥かいて賢くなって淋しけり
イヤリング揺れて話が弾み出す

高槻市　安田忠子

その肌の故にゴーヤは嫌われる
暑い路だった記憶の十五日
蝉しぐれあの日の朝の動員令
遠花火だったか大阪大空襲

豊中市　源田啓生

暑い夏うなぎを食べて暑気払い
盆踊りゆかたの人のしなのよさ
盆踊り河内音頭にのせられて
音頭取る人の声ききほれている

羽曳野市　松本静子

天下り確保の橋に税が消え
人生の余白にあった含み益
夢ひとつこっそり抱いて今日も生き
褒め上手判っていても出るやる気

羽曳野市　永田章司

男の目きらりと光るギャル御輿
雷鳴は死者の叫びか原爆忌
さくらんぼ北の香つめて自己主張
なめらかに一日終える冷やっこ

東大阪市　米田水昇

バラ色の人生歩み古希の坂
写メールにバラの香りも撮り込んで
演技です知らないふりをしてるだけ
悩み事解消できず風に問う

東大阪市　佐々木満作

孫の夢大きくはずむしゃぼん玉
夏の日の疲れ花火の音と消え
サークルに紅一点の花が咲き
包丁の音で食欲うなり出す

枚方市　二宮紫鳳

日焼けした素肌自慢のハワイ焼け
扇子手に千日まいり下駄の音
夜まつりが終った後はゴミの山
夕立が少し気温を下げてくれ

藤井寺市　伊藤アヤ子

藤井寺市　西村栄一

あかんのと違う努力が足りんだけ
身支度の妻へコーヒー二杯のむ
乗り継いで里の西瓜を提げて母
よい空気吸ってるらしいいい笑顔

箕面市　寺井柳童

自分史と重ね合わせる二枚腰
俗な絵が異彩を放つ絵画展
羽根ぶとん夢大空へ鳥となる
貧乏くじ引いて列島知りつくし

八尾市　赤木妙子

土壇場で転ばぬ先に掴む藁
すこし病んでこんなに遅い刻のあり
晩節の手習い墨を濃く薄く
巣立つ子が遠心力の真ん中に

八尾市　寺川はじむ

素朴さに惹かれ契ってちょっと悔い
ホイホイと受けて帰って妻の愚痴
口下手が信じられないメール来る
丸過ぎて味方にならぬお人好し

八尾市　笹倉ひろし

香水の匂い持ち去る専用車
ぜいたくに慣れて不満が顔を出す
人間の業が地球を星屑に
トリックの種がいっぱい保険金

八尾市　西川義明

直線なあなたの愛に溶けてゆく
こっそりと握った指が縁でした
人間をとるのかお酒やめますか
水平線今朝も平和な陽が昇る

大阪府　西川冷子

反対派どこまでやれる民営化
土用波ぶっつけられて砂食みぬ
古稀すぎてタイムを競うスイミング
沖へ向き祈る思いで立ってみる

大阪府　畑中節子

恋ごころ旅の名所もうわの空
雨優し花と傘とが咲き競う
お土産も目移り過ぎて買いそびれ
おはようの時計の狂う夏休み

尼崎市　小池幸子

夕涼みそよ風吹いて遠花火
夏好み身軽な季節大掃除
子のためと思う一言疎まれる
争うほど遺産はないが書いておく

尼崎市　河津正治

索漠とした殺傷沙汰に世が歪む
旅先の地酒をほめる隠れ宿
叱るよりその手が早い父を恋う
隣国とどこまで軋む歴史観

海辺にも雷落ちる事のあり
カエルの声聞こえない町また淋し
朝顔のよく咲いている角の家
私にも元気下さい蝉しぐれ

尼崎市　古川正子

失敗をバネに明日へジャンプ傘
やりこなす目の輝きにある気迫
トルネード根刮ぎにする風のエゴ
さりげなく呼吸合わせて生きてます

伊丹市　延寿庵　野鶴

寝る前のウチワの風がねむけくれ
菜園で流れる汗の尊さよ
お盆にとあちこち野菜寄せ集め
影までも親に似てくる孫仕草

篠山市　永井かほる

蝉時雨　帳尻合わぬまま八十路
日に千歩三日坊主のダイエット
争いは止そうよそうと蝉しぐれ
悲しみと喜び交互の終戦日

篠山市　谷田多美子

猫だけが昼寝の父をまたがずに
省エネのためと団扇で暑い夜
村中で談合をして丸木橋
ペットでも葬式があり墓があり

三田市　阪本藤朗

うたせ湯で見え隠れする凝り流す
とび込んだ孫のメールに癒される
でるだけの涙流して苦をとばし
二人きり主婦の肩書きわけたいな

三田市　辻開子

ミミズさん　ごめんよ今日は畝作り
ゴキブリが出たと電話をしてくる娘
狂おしくまだ燃える火は何だろう
また何時か何処かで会える人想う

宝塚市　丸山孔一

いい話何度聞いてもいい話
燃えつきるその日のための身だしなみ
あの事はお気付きですかもう時効
高額の医療費かけず召されたい

西宮市　石野照代

緑黄色いつも胃袋和んでる
熱帯夜金魚も少しバテている
三つ子には迂闊に言えぬ訳がある
これからもジャジャ馬で行くつもりなり

西脇市　七反田順子

父母の許お骨収まる満中忌
満中忌　遺品の軸をそれぞれに
幼い頃が戻る揺らぎの走馬灯
送り盆憂さ忘れよの大花火

兵庫県　岩本美緒子

来てみれば暑さ吹っ飛ぶ笑い声　兵庫県　黒崎　美紗子

年金の暮らしに似合う旅誘い
盆まいり今日も出会った顔なじみ
次つぎと今の暮らしを聞く墓石　奈良市　乾　春雄

復旧に夜を日についでレール敷く
手応えは勝ったと決めて酔っている
手を貸して噛まれた傷が深すぎる
金よりもカード失くして怖さ知る　橿原市　藤永　実千代

一難が去って神仏忘れかけ
可愛いと顔より服を褒められる
美しく青い地球にある戦
悩み聴く唯ひたすらに　ひたすらに

第20回記念渡辺銀雨賞
すずむし全国誌上川柳大会

課題　「鏡」2句詠　詠み込み可
選者　斎藤大雄ほか14名共選
会費　1000円
投句用紙　所定用紙、便箋、原稿用紙
賞　大賞～30位　各位各々賞品あり
採点　前抜1点・5客2点・3才3点
締切　10月31日必着
発表　『川柳すずむし』12月号
投句及問い合わせ
〒018-1705 秋田県南秋田郡五城目町字上町76　佐藤憲夫方
すずむし全国誌上川柳大会係宛
TEL・FAX 018-852-2311
主催　川柳すずむし吟社

出雲総合芸術文化祭
川　柳　大　会

日　時　11月26日（土）11時開場
会　場　パルメイトホール4階
兼　題　各題2句　締切13時
「世　界」　竹治ちかし選
「　縁　」　濱谷ひろし選
「結　ぶ」　安黒登貴枝選
「出　る」　長谷川博子選
「　雲　」　松　彬選
「スロー」　但見石花菜選
席題1題あり
会　費　1500円（昼食代含む）
賞　市長賞・教育長賞ほか
欠席投句　10月31日締切
参加費1000円または80円切手12枚
投句先　〒693-0052 出雲市松寄下町284　吉岡きみえ宛
主　催　出雲市・出雲市教育委員会
出雲総合芸術文化祭実行委員会
出雲市川柳連盟

第15回東三瓶フラワーバレーコスモス祭り
川柳大会兼創立20周年記念大会

日　時　10月9日（日）開場10時
開会13時　披講13時半
場　所　飯南町八神　さつき会館
鑑　賞　合同句集について　川本　畔
課　題　各2句　出句締切12時
「　穂　」　盛政　雨石謝選
「和　み」　毛利　幸選
「二　十」　内田　久枝選
「　箸　」　松本　文子選
「そよぐ」　熱田圭詩朗選
「走　る」　金築　雨学選
「辿　る」　新家　完司選
会　費　2000円
（昼食、彩、参加賞、上位入賞者賞呈）
懇親会費　1500円
主　催　東三瓶コスモス祭り実行委員長　永田　偵一
共　催　同実行委員とんばら川柳会長　福間　秀夫

愛染帖

新家　完司　選

ロゼワイン甘くテレビは自爆テロ

豊中市　水野　黒兎

(評)憎しみが渦巻く国と、平和に狎れ切った国。遠くの悲劇を想い己が無力を想う。

トータルで見ると日本も悪くない

西宮市　片山　忠

(評)食べ物があふれる街。空調が効いた図書館。不足もあるが、まずまず良い国、か？

真夜中のトイレの水はよく響く

和歌山市　古久保和子

(評)迷惑をかけぬよう、そっと起きて、そっと用を足す。やさしい心遣いも水の泡。

うしろ手に鋏を持っている笑顔

倉敷市　小野　克枝

(評)にんげんという高等動物だけが出来る狡猾な芸。みんな小さな鋏を隠し持っている。

足のつくとこで溺れる人もいる

神戸市　田中　章子

(評)自信過剰は深みで溺れ、自信喪失は浅瀬で溺れる。正確な状況判断は、平常心から。

八月は老眼鏡がよくくもる　西宮市　牧渕富喜子

踏み台の高さぐらいの明日を見る　富田林市　池　森子

軋んだら愛を一匙足しましょう　三田市　堀　正和

浮いた飛んだと燥ぐ五尺の熱気球　弘前市　髙瀬　霜石

ビヤホール一番乗りはシニアたち　浜松市　杉浦　えむ

晴れた日の締めはやっぱりコップ酒　枚方市　丹後屋　肇

泥付きに限るねネギもにんげんも　弘前市　福士　慕情

幸運な人だけが乗る救急車　唐津市　久保　正剣

満ち足りたわたしが暮らす金魚鉢　尼崎市　田辺　鹿太

服を脱ぎ化粧落してネコになる　香芝市　大内　朝子

蝉しぐれ止んで騒音復活す　羽曳野市　酒井　一壺

荒天にこぶしをあげる葱坊主　寝屋川市　籠島　恵子

夫婦喧嘩ブロック塀を越えてくる　東かがわ市　池内かおり

窓際でゆっくり読める趣味の本　和歌山市　楠見　章子

話し中まだ話し中震度七　鳥取市　土橋はるお

ジーンズを穿いて舞妓がギャルになる　堺　市　志田　千代

残った人だけに饅頭配られた　和歌山市　木本　朱夏

おばあさんの死にたがるのも芸だろう　大阪市　小泉ひさ乃

ライバルがくれた拍手に音がない　和歌山県　辻内　次根

蝉時雨きみも焦っているんだね　和泉市　横山　捷也

スピードを落とし青田の匂いかぐ　尼崎市　田辺　鹿太

ゆうすげの花は寂しい人に向く　香芝市　大内　朝子

喘ぎつつ干物になってゆく女　羽曳野市　酒井　一壺

窓外の動き気になる回復期　寝屋川市　籠島　恵子

かいつぶりわが人生へ重ね見る　東かがわ市　池内かおり

サンプルを頂くちゃんと礼言って　和歌山市　楠見　章子

グーばかり出す癖みんな知っている　鳥取市　土橋はるお

子離れはとうに出来てる母健気　西宮市　門谷たず子

父さんにほめてもらった事がない

二度三度見たはずだった誤字脱字

行こか戻ろか優等生が辻にいる

長生きをよろこぶはずがない日本

ホッホホタル蛍が減った温暖化

せい一パイ生きて小さなフライパン

おばあさんになっても好きなチョコパフェ

安心だ老人ホームまた出来た　八尾市　生嶋ますみ

不運にも情事の自慢聞かされる　堺市　奥　時雄

消火器の保証期間もとうに過ぎ　尼崎市　春城　年代

世間見に行ってきますと家を出る　大阪市　前　たもつ

茹で卵ぐらいは出来る旦那様　倉敷市　井上　富子

ビルの壁傷心の影折れ曲る　三田市　北野　哲男

紙風船やさしさごっこにも飽きる　八王子市　播本　充子

ムンクより俺の女房がよく叫ぶ　黒石市　相馬　一花

墓守の義姉は戒名暗記する　米子市　小塩智加恵

単純な頭になってよく笑う　東京都　岸野あやめ

鈍くさくなったと自分でも思う　松原市　玉置　重人

蟬しぐれ犬は平気でよう眠る　豊中市　樫谷　郁子

女生徒が降りて寂しいバスになり　鳥取市　岸本　宏章

靴下の穴は穿かぬとわからない　和歌山県　三宅　保州

児らは去りひざにのこったアンパンマン　堺市　近藤　豊子

長男が東京弁で初帰省　茨木市　藤井　正雄

当てたらえらい試されている惚け程度　和歌山市　桜井　千秀

デコボコのない舗道でもけつまずく　豊中市　安藤寿美子

門番のように向日葵植えておく　米子市　澤田　千春

包丁は切れない方が安心だ　大阪市　神夏磯典子

役終えて天下晴れての大欠伸　和歌山市　武本　碧

放たれて意外に飛べぬものと知る　鳥取市　徳田ひろこ

丸呑みにしたいほど好きですあなた　札幌市　三浦　強一

行間にわずかに見える嫉妬心　吹田市　太田　昭

砂が鳴る一足ごとの物語　米子市　政岡日枝子

日本の末路は見ずに逝ける幸　唐津市　井上　勝視

なんぼ好きでもケーキ三つは多過ぎる　大阪市　井丸　昌紀

生きている証やっぱり惚れっぽい　高知県　桑名　孝雄

笑顔なら一寸美人に見えるかも　大阪市　星野きらり

古稀近し心の軋み身の軋み　藤井寺市　鈴木いさお

歳なりの生き方がある青絵具　大和高田市　鍛原　千里

欲望が喫水線を越えている　和歌山市　玉置　当代

どん底で知った重荷の背負い方　大阪市　川原　章久

ステテコとウチワの似合う街恋し　寝屋川市　北田ただよし

携帯を切り図書館に避暑に行く　唐津市　市丸　晴翠

赤銅の肌に塩ふく人力車　日立市　加藤　権悟

背なの蚊を払う尾っぽが僕にない　鳥取市　武田　帆雀

熱下がり目覚めた横に母の顔　富田林市　古田　千華

門標にまだ家中の名が書かれ　三田市　阪本　藤朗

ねぶた笛どんどん血潮充ちてくる　弘前市　斉藤　劦

信じてる友は私の薬箱　鳥取市　福田　登美

東奔西走まだ借金が追いかける　美作市　小林　妻子

シドニー　坂上のり子
今日明日へ徐々に私が減っていく

唐津市　岩崎　實
チリ紙だけ山と積んでる納屋の隅

東京都　やまぐち珠美
蝉しぐれ八月の声いのちの声

交野市　山川日出子
茶柱がすすめてくれた一人旅

吹田市　大谷　篤子
キレそうな心がジャズに溶けてゆく

東かがわ市　木村あきら
矢が尽きた事は内緒にしておこう

羽曳野市　森下　一知
巷間を愛して止まぬ好奇心

和歌山市　福本　英子
少しずつレベルを下げて娘の見合い

鳥取市　有沢せつ子
反論は一晩胸においてみる

唐津市　樋口　輝夫
がんばった紫陽花の首ちょん斬られ

西宮市　西口いわゑ
ひまわりの海に少女の日があった

岡山市　井上柳五郎
裏表開けて涼しい風通す

唐津市　仁部　四郎
焼き秋刀魚電子レンジのメモが付き

高槻市　傍島　克治
諦めの悪さ辛抱強く見え

岸和田市　土橋　房枝
画面から事件や事故があふれ出る

唐津市　坂本　蜂朗
妻と娘の電話ケラケラよく続く

兵庫県　中上千代子
全没の壁にファイトをためされる

倉吉市　山中　康子
速球にめげぬ姿勢を備えとく

橿原市　安土　理恵
潮の遠鳴りおしゃべりやっと尽きました

竹原市　正畑　半覚
泣くほどに泣くほどに人美しい

和歌山市　喜田　准一
店先の桃押えてはいけません

鳥取市　夏目　一粋
美しく咲けば咲いたで摘まれだす

横浜市　長島亜希子
新生活支えたミカン箱がある

堺　市　矢倉　五月
わたくしの脳にパソコン拗ねだした

池田市　栗田　久子
無人駅丸いポストが立っている

尼崎市　小池　幸子
精一杯生きてるあかし蝉しぐれ

京都市　都倉　求芽
高望みしない梯子は軋まない

和泉市　西岡　洛酔
医の門を叩く日課もある暮らし

大阪市　奥村　五月
ニコニコと鶴折る母は認知症

羽曳野市　永田　章司
路線価は下落税金高いまま

大阪府　澤田　和重
お喋りを山盛りにして里帰り

横浜市　金森　徳三
新盆に酒を勧めに来る故人

奈良市　矢野　良一
仏より花を見たさに寺参り

和歌山市　榎原　公子
あの世この世の子よ寄っといで地蔵盆

弘前市　宮崎ヒサ子
盆灯籠みんな集まり皆去る

米子市　青戸　田鶴
赤トンボ見たよ風までさわやかだ

和歌山市　たむらあきこ
月の庭影のひとつは亡父だろう

堺　市　加島　由一
母恋し母は夕陽の中に居る

熊本県　髙野　宵草
前向きの余生のはずがつい懐古

堺　市　村上　玄也
余生とは言わぬ人生第二幕

富田林市　大橋　鐘造
指繰って残り時間を確かめる

海南市　堂上　泰女
マンネリの壁へショパンが心地良い

平成十七年度 路郎賞

和歌山市

上地 登美代

太陽を描いて涙と縁を切る
笑っても泣いても明日の岸に着く
一番好きな顔であしたを待つことに
さんすうに弱いがジュゲム丸暗記
モッタイナイ風が世界へ翔けて行く

路郎賞受賞の報に、一瞬身も心も震えました。このような名誉ある立派な賞を頂き感激しております。夢だと思い頬を抓ってみました。これも桜井千秀主幹初め諸先輩、柳友の方々の温かいご指導の賜物だと感謝しております。今後もこの賞の重みを心して精進してゆきたいと思っています。どうぞ宜しくご指導のほどをお願い申し上げます。ありがとうございました。

柳歴

平成七年　三幸川柳教室入会
平成九年　川柳塔誌友
平成十四年　川柳塔同人

路郎賞準優秀作第一席

西宮市　西口 いわゑ

裸で生まれそして裸になりきれぬ
一言が渇いた胸にしみ透る
振り向けば間違いだらけでも楽し
共白髪　生きた勲章だと思う
嬉しさと背中合わせの忙しさ

路郎賞準優秀作第二席

河内長野市　山岡 冨美子

冬帽子脱いで私を新鮮に
愛というカードは時に裏返る
血の巡り良すぎるひとと車間距離
核心に触れると回る風車
凜として未練断ち切る落ち椿

平成十七年度　川柳塔賞

大阪市

三浦　千津子

大泣きをするには空が青すぎる
生きて行く限りは虹を抱き続け
立ち直る背に追風という味方
歳月がふんわり頑固丸くさせ
天気晴朗疑うことは止めにする

川柳塔賞受賞の思いがけないお知らせに、一瞬我が耳を疑い信じられませんでした。
未熟な私がこのような立派な賞を頂ける身をこの上ない幸せと肝に銘じ心新たに益々精進して参ります。諸先生、柳友の皆様よろしくご指導のほどお願い申し上げます。
ありがとうございました。

柳歴
平成三年　種々の句会参加
平成六年　川柳塔社誌友

川柳塔賞準優秀作第一席

札幌市　三浦　強一

平均点あたりがぼくの棲み心地
老春だ枯れ木に花を咲かせよう
覗くだけならば地獄が面白い
悪いのが一人も居ないから揉める
少子国自動ピアノが鳴っている

川柳塔賞準優秀作第二席

神戸市　両川　無限

強がりがまだストローの先にある
悶々と堪忍袋縫い合わす
聞く耳と聞かない耳をもっている
謎解けぬままに春雷鳴りひびく
灰汁みんな抜くと魂まで抜ける

路郎賞得点表　（応募総数188名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内　天笑			5						2				3		1				4	
板尾　岳人					1		4			5		3					2			
大橋　政良			3			1			5		4	2								
増田　紗弓		1					4							3		5		2		
稲葉　冬葉										4	5			3	1	2				
海老池　洋				5	2			3			1			4						
川端　一歩							1				3	2	4			5				
鶴田　遠野			1				2					3				5				4
長谷川呂万	5		3	4					1										2	
板東　倫子				5				4	3		2			1						
山本希久子		1	5								2			3		4				
亀岡　哲子			5	2				3		1				4						
黒田　能子			5				1			4				3			2			
松下比ろ志	3	2	4				5								1					
田中　みね			4	5				2							1	3				
玉置　当代				1	2	3	5	4												
石谷美恵子		3				1						4		2		5				
白根　ふみ		5	1		4				3										2	
谷口　次男									2			3	5				4			1
土橋はるお		5			1						3					4	2			
川本　畔							2					5						4	3	1
岸　桂子			1		3							2		4		5				
三島　淞丘	4		2				3				5				1					
岩本　笑子			2		3		4						1	5						
古谷　節夫	1											3	4			5	2			
岩切　康子		4	1				3						5	2						
小澤　幸泉									2		5	3	1			4				
	13	21	42	22	16	5	34	16	18	14	30	30	23	34	5	47	12	6	11	6
	池内かおり	澤田　和重	西口いわゑ	川崎ひかり	米澤　俶子	古久保和子	山岡冨美子	太田扶美代	穴吹　尚士	武本　碧	播本　充子	藤解　静風	徳田ひろこ	吉田あずき	北野　哲男	上地登美代	渡辺　富子	三好　専平	志田　千代	城　多喜

川柳塔賞得点表　（応募総数 78名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内　天笑		2		1		3			5								4			
板尾　岳人		5									2		3			4		1		
大橋　政良			4			3					5			2			1			
増田　紗弓		4		1									3				5		2	
稲葉　冬葉		3	5						4						2		1			
海老池　洋				3				5			1							2		4
川端　一歩										1	3		5	2			4			
鶴田　遠野		5	4	1										2	3					
長谷川呂万		1								2			5					4		3
板東　倫子			5							4	3							2	1	
山本希久子		4	5							3							2	1		
亀岡　哲子		5	3											2		1	4			
黒田　能子		4	2						3									5	1	
松下比ろ志			5										4			1	3	2		
田中　みね		5	1						2							3	4			
玉置　当代		5		2					1				4					3		
石谷美恵子		2	3											5			1	4		
白根　ふみ		3	5	2		1			4											
谷口　次男			4		2								1			5	3			
土橋はるお		3							4					2			5		1	
川本　畔		5		3							4						2		1	
岸　桂子						2			5					3			1	4		
三島　淞丘			4		1						3					2	5			
岩本　笑子			2		5					1			4				3			
古谷　節夫		5											4	3	2			1		
岩切　康子	4	2				5							3					1		
小澤　幸泉		2		4	1								5	3						
	4	65	52	17	9	14	0	5	28	11	21	0	41	24	7	16	48	30	6	7
	矢野　良一	三浦千津子	三浦　強一	柏原　夕胡	加藤　権悟	小栢こずえ	森下　順子	堀　正和	花岡　順子	野口　忠	若松　雅枝	坂上　淳司	村木　信子	升成　好	大久保伸子	佐甲　昭二	両川　無限	土屋起世子	鈴木いさお	失格

二賞選考規定（要約）

①路郎賞　川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、**8月10日必着**で本社宛郵送する。

②第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④第二次選者
本社関係　主幹・理事長
地方関係【　】＝ブロック（　）選者数
【北海道・東北　関東　北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

①川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。

②自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦愛染帖賞・茴香の花賞（来年度から檸檬賞）は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。

（備　考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

受賞者のみなさんおめでとう

河内天笑

当然の事ながら、二賞選考の朝の事務所はぴんと張り詰めたものがあって、真夏の暑さを寄せつけない。今年の選考は板尾岳人、前たもつ、奥田みつ子、西出楓楽、木本朱夏諸氏が二賞それぞれ四〇名を選出、私が二〇名にしぼった。そのうちの一人の応募者に自選のルールの勘違いがあった。今年の特記すべきは川柳塔賞への応募者数が減少したことで、来年度はふるって応募してほしい。また蓋を開けてみて驚いた事に二賞をはじめ六賞をすべて女性作家が独占し、男性は川柳塔賞の準賞に三浦強一氏と両川無限氏のお二人の名前が出るにとどまった。これは想定外の結果で、今後の男性陣の大いなる奮起が待たれる。

路郎賞の上地登美代さんおめでとう。明るい作風が二次選者への好感につながったと思われる。三浦千津子さん、川柳塔賞をおめでとう。お顔を拝見した事がないので受賞の日が楽しみです。

愛染帖賞の安土理恵さん、茴香の花賞の白根ふみさんおめでとう。茴香の花賞としては最後の受賞となりました。来年度から新しく檸檬賞が設けられます。一路賞の宮西弥生さん各地柳壇賞の今愁女さんほんとうにおめでとうございました。

二賞選考経緯

木本朱夏

平成十七年度の路郎賞には百八十八名、川柳塔賞には七十八名の応募があった。

応募締切後の八月十二日、主幹、理事長、はじめ第一次選考委員が本社事務所に集合。

規定違反がないか、全作品を昨年九月号から本年八月号までの川柳塔誌で確認作業にはいる。この段階で昨年七月号の作品を応募している方が見つかり、残念ながら失格となる。

選考委員が選出した二賞それぞれ数十編の中から、最終的に主幹が各賞二十編ずつを選出、コピーし全国の二十五名の第二次選者に郵送。返送された選考葉書を再び規定に照らし合わせ審査の結果、受賞者が決定した。

路郎賞・川柳塔賞には、「準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない」との規定があり、吉田あずきさんは昨年の路郎賞準優秀賞第一席を受賞されており、受賞対象外となった。また川柳塔賞候補、ナンバー二十番の方は月例句会での天位の作品を投稿されていたことが判明したため失格となった。

受賞のチャンスは等しく誰にもあります。前向きに意欲をもって来年こそ大勢の皆さんの応募をお待ちしています。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	東かがわ市	大阪府	西宮市	東かがわ市	大阪府	和歌山市	河内長野市	藤井寺市	吹田市	和歌山市	八王子市	広島県	鳥取市	豊中市	三田市	和歌山市	奈良県	羽曳野市	堺市	出雲市
川柳塔賞	奈良市	大阪市	札幌市	和歌山市	日立市	大阪府	和歌山県	三田市	大洲市	昭島市	藤井寺市	河内長野市	相生市	大阪市	堺市	高槻市	神戸市	和歌山市	藤井寺市	失格

平成十七年度　愛染帖賞

受賞作品

橿原市　安土理恵

子を産めぬ女に柘榴熟れてくる
狂ったら掟破りができますか
女がひとり渡る世間は一幕目
還っておいで冬の蛍の亡骸よ
芝居ならここらが幕の下ろしどき

評　子を産めぬ女に柘榴熟れてくる
情緒と、言い知れぬ悲しみが感動を呼びます。
川柳には伝統川柳、現代川柳、革新川柳とがあります。革新川柳は心象の世界で、才能がなければ理解する事が困難です。
伝統川柳は川柳の基本で、穿ちと比喩が大切。明日の川柳は、この伝統川柳と個性を大事にする現代川柳の二本立てで進んで行く、と考えられます。「川柳塔」としてもこの二つを大事にして行って下さい。**（波多野五楽庵）**

安土　理恵

夢ごこちでいたのはほんの数日、だんだん怖くなってきました。こんなに大きな賞を戴くのは大人になって初めてのこと、何とも落ち着きません。ご指導下さいました先生方には心からの感謝を申し上げます。ワイワイ言いながら刺激してくれる多くの柳友とこの喜びを分ち合いたいと思います。ありがとうございました。

柳歴

平成　六年　新聞投句
平成十二年　川柳塔なら入会
平成十三年　川柳塔誌友
平成十五年　川柳塔同人

準賞作品

富田林市　中井アキ

雪国の無口に熱いものがある
私を透かすと蒼いあおい海
逢うてきた十指にひとつ水たまり

尼崎市　長浜美籠

どう動いてみようと所詮弥陀の視野
ほんとうの悔いは渦中に立ってから
気分一掃したくてキャベツみじん切り

弘前市　高橋岳水

神の息かかるあたりで掌を合わす
浮き沈み重ね人間味が熟れる
北風の絶唱を聞く雪達磨

平成十七年度　茴香の花賞

受賞作品

米子市　白根　ふみ

わたくしを産まんと炬燵ちらかして
花疲れ家の牡丹に癒される
浮きうきとさくらに芯がずれそうな
ランドセル芽ばえるものをみんな詰め
わたくしが静まるように雑草を抜く

評　茴香の花賞は白根ふみさんに輝きました。身近かな処に視点を置き、その背景、隣近所まで連想できるような句を投げかけて下さいました。年代さんからは、力みのないそれでいて深い味のあるあたたかみを毎回頂きました。智恵子さん・いわゑさん・なみさんからは、言葉の蓄え場所の豊富さに不断の努力を感じました。五人並んでのゴールインだったことを申し添えます。大勢の方に引っ張って頂いた一年、有難うございました。

（政岡日枝子）

準賞作品

尼崎市　春城　年代

目をつむるきょうのほど良い幸せ度
この町を長い月日が馴染ませる
ここだけのはなしは花が散るように
六月は鉄線がありつゆの足音
そのうちに熱いおもいを虫干し仕様

富田林市　片岡　智恵子

天までの距離を知らない棒グラフ
合掌のどの指ほどくおぼろ月

西宮市　西口　いわゑ

秒針にさからえないと悟るなり
人間でよかった酒のおいしい日

米子市　野坂　なみ

春の駅で一人の汽車に乗りかえた
サンローラン初夏のおしゃれを着て遊ぶ

白根　ふみ

今年度で終りとなる「茴香の花賞」を私が頂くこととなり、唯々驚いております。

このような身に余る女性の賞を選んで下さいました皆様の温情に、心より感謝しています。益々の精進を重ね、報いて行かねばならないと思っています。このたびは本当に有難うございました。

柳歴

昭和六十二年　川柳塔きゃらぼく入会
昭和六十四年　川柳塔社同人

平成十七年度　一　路　賞

受賞作品

八尾市　宮西弥生

生き恥を重ねちゃっかり生きている

評　人間生きている限り恥はつきもの、一度かいた恥は繰り返すことはない。恥をバネにして生きている人は逞しい。

準賞の句、欠点の無い人は存在しない。が、もし居るとしたらきっと人間の輪に入れない淋しい人なのかも知れない。雨がしとしと降っている。あくせく生きている日々、天が与えてくれた癒しの日だと感傷に浸るのも好いものである。

（福士　慕情）

人生の達人とはこのことでしょう。くよくよとせず愉しくがモットー、いっぱいの恥をエネルギーにたくましく、これぞ本物。霜石さんの句、満点とは無味無臭、やっぱり付き合うのには退屈しそう。岳水さんは、ロマンチストですね、何事も無駄な抵抗は止めて上手に楽しむ術をご存知のようです。

（古久保和子）

準賞作品

満点の人は案外嫌われる　　高瀬　霜石

雨の日は雨の情けに溺れよう　　高橋　岳水

候補作品

軽そうに持たぬと母が気を遣う　　宮﨑シマ子

さくら満開代読が続く式　　播本　充子

ポイントを結ぶと夜空語りだす　　竹信　照彦

向こう岸の遠さ銀河に橋が無い　　花岡　順子

宮西　弥生

過去、仕事ひとすじで来た私は、川柳にはまる事が出来ない一番不真面目な人間だと思っていたところへ、突然の朗報と奇跡が降って湧いて来た。喜びより驚きである。長い川柳生活に、やっと足跡を残すことの出来た証明はやはり嬉しい。川柳は私の青春である。

柳　歴

昭和四十四年　羽曳野病院
　　どんぐり川柳会
昭和五十年ごろ　八尾菜の花川柳会
昭和五十五年　川柳塔同人
平成　十一年　八尾市民川柳会
平成　十七年　八尾市民川柳会会長

受賞作品

弘前市　今　愁女

満ち足りた生涯でした木の葉舞う

評　愁女さんの句は、奥入瀬渓谷、白神山地の大自然の壮大さを詠まれると同時に人生の機微、壮絶な過程の大きな作品に恐れ入りました。

準賞二句は、ゆったりと優しく包み込むお人柄の作品と存じます。候補作品は、これからを生きるのに思わず「うん」と頷いてしまいます。　**(山本　義子)**

受賞の句、スケールの大きな作品に感動しました。人生も森も樹も雄大に生き、美しく散るのです。

準賞の二句、女性の人生観に目覚める思いですね。この世は「男と女」、「女と男」です。でも結局は支え合ってこの世はあるのです。候補作品は、その支え合いの境地であると確信します。　**(吉村　一風)**

今　愁女

青天の霹靂　各地柳壇賞受賞、こんな佳き報らせのお電話に「ウソでしょう。そんなはずはない、何かの間違いでしょう。」などと散々手古摺らせてしまいました。嬉しさが込み上げてきたのは大分時間が経ってからでした。

本当に有難うございます。これからもこれまで通り、力まず、怠けもせず、普通に、ずーと川柳を続けてまいりたいとおもいます。

柳　歴

平成五年　七月　川柳塔みちのく同人
平成五年十一月　川柳塔誌友
平成八年　九月　川柳塔同人

準賞作品

あの手この手使い果して丸く生き　亀岡　哲子

アングルを変えればあなたお人好し　太田とし子

候補作品

危険水位越えた日もあり共白髪　澤田　和子

欲を積み過ぎたら積木崩れ出す　時広　一路

年金を八つざきにしてお年玉　近森　功

五十年添って上げ底みとめあい　高嶋　勝

誹風柳多留一一篇研究 2

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭
清　博美

7　**よべば蜘行ケば風にて手におへず**　雨譚

小栗　中国と日本にかかわる二つの故事を詠んだ句。中国側から見て、「日本人を呼べば蜘蛛の働きで、日本へ行けば風のせいで、どちらも手に負えなかった」ということ。「蜘蛛」は野馬台詩。渡唐した吉備真備が野馬台詩を読めなかったが、長谷観音を念じ、蜘蛛の助けによって読み解き唐人をギャフンと言わせたという話。「風」は、白楽天と元寇の二つが考えられるがいずれであろうか。

白楽天は、日本人の智恵を量るため派遣された白楽天が、漁師の姿となった住吉明神に和歌でやり込められたという伝説であるが、謡曲『白楽天』に「手風神風に吹きもどされて、唐船はここより漢土に帰りけり」とある。元寇は、言うまでもなく神風によって元軍が壊滅的打撃を受けた。

白楽天は住吉明神に負けたのであって、風で手に負えなかったわけではないが、元寇は明らかに風で手に負えなかったもの。そういう筋道からすると、元寇説に軍配が上がりそうだが、同じ唐がらみ・智恵がらみ・神仏がらみで並べるとすると、白楽天説の方が素直でもある。詩と戦争を並べるのは野暮ということで、白楽天か。

行ヶハ蜘くれハ神風吹なひけ　六〇23
神力は風仏力ハ蜘となり　六九1

山口　詩歌で対になっているので白楽天説に賛。

清　同右。

8　**竜顔ことにうるわしき初の雛**　婦美

小栗　竜顔は天子の顔（『日国』）。初の雛は女子が生まれて初めてする雛祭（『辞彙』）。

女の子の初節句ということで、親戚縁者が盛大に雛を贈ってくれる。ことさらお顔の麗しい内裏雛が揃うのも道理である。

初の雛旦那御太義なさったの　明五松3
初の雛伯母御やつきとされた也　八29
ばゝさまが臍くりを出す初の雛　八〇28

山田　賛。

大入の札をさげ度キはつの雛　七七1

ところが、

たいりひなおやじてんほに弐分に付ケ　明六松2

という句の通り、内裏雛は二分もしたのだから決して安いものではない。だから、

大どらた〜とひなをかつき込　三一9

というような事が本音なのではなかったか。

山口　賛。誹諧調できれいな句だと思う。

清　賛。

9　**谷中門くゞるハけちな花見連**　露蝶

小栗　谷中門は上野寛永寺の谷中側に開いている門。すぐ前は天王寺（感応寺）門前で、いろは茶屋があったところである。男なら、上野の花見の後は、谷中門の反対側の矢来門から信濃坂を下って一路北国を目指すべきであるのに、いろは茶屋へ行くとはしみったれた連中であるということ。

花がちるよしな〳〵といろは茶や　安四礼7

いろはまで花のちりぬる瑠璃の山　八〇24

北国の最寄へ下る信濃坂　九二23

伊吹　土地勘がないので、地図を見ても分かりにくい。

清　賛。

10　**哥かるた気色とらぬともつととれ**　鉄炮

伊吹　この場合の気色を取るは、気色を振うと同じく、むきになるの意だと思う。たとえ金銭の賭け事にかかわらぬ百人一首であっても、勝負事となるとどうしても力がはいる。もっと肩の力を抜いたら、枚数が多く取れるのに、というところ。

哥かるた尻目遣ィで見うしない　宝八松

しりまくりくらとハあらい哥かるた　一一33

増田　賛。恋心といったような気分を含まないだろうか。座中の異性に気を回したりしなければ…。

山口　前説賛。「気色取る」には「気どる。すます。」という意があり、咄本（『聞上手』）の例として「よい年増が気色取って来るゆへ」という文が『日国』にあります。従って、気取って恰好をつけなければもっと取れる、でしょう。

小栗　山口説賛。増田説のような事も含めて、気取らないで、しゃにむに勝負にでればもっととれるということ。もっとも句の意味は、歌かるたとはそんな雰囲気のものだといっているのであって、もっと取れよ、といっているのではない。

清　同右。

11　**意趣でも有ルか何もかもいせしるし**　雨譚

伊吹　『伊勢物語』は作者不祥が定説であるが、古川柳では、平安中期の歌人で、父が伊勢守であるため伊勢と呼ばれる、三十六歌仙の一人の作としている。それで作者の伊勢は、『伊勢物語』の主人公だとされる在原業平に何か含むところがあるのか、業平の行動の洗いざらいを物語の中で述べている。

業平がするたび伊勢ハ帳につけ　笠四7

むかし〳〵あつたとさといせしるし　一九ス7

山田　賛。なお『伊勢物語』の作者及び成立過程については、古くから諸説あってそれ自身面白いテーマとなっている。

小栗　賛。「記し」。

清　賛。

12　**ひろって喰ふやうな汗を四ツ手かき**　四竜

伊吹　拾って喰うような汗は、大粒のしっかりした汗だと思う。吉原へ急ぐ四つ手の駕篭舁は、酒手をはずまれたため、夏でなくても汗まみれになって土手を疾走する。

大汗の四ッ手ハ亥子の間ダなり　安元義4

汗もしと、にちうをとぶ四ッ手駕　一〇八28

山田　賛。「拾って喰うような汗」とは面白い表現。

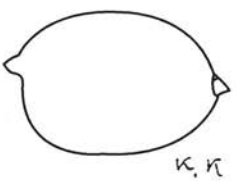
山口　賛。「玉の汗」という表現がありますが、「団子のような汗」でしょう。

清　賛。大変な重労働だ。大粒の汗がしたたり落ちる。

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「順序」　仁部四郎選

印籠が順序通りに出るテレビ
焼香の順も遺言してあった
邪魔をする順序で子供起きて来る
兄弟六人順序正しく生きている
ここまでは年功序列だけで来た
四捨五入いつでもされる側にいる
歳時記の順序どおりに祖母の庭
道順をうまく教えた小さい指
代読が続く順序など言わぬ
それとなく順序を探る訃報欄
順序よく行けば看取ってあげられる
税金は払える人から順序よく
当然のように定年押し出され
順序よく終わり黒子の汗を拭く
無礼講なのに席順決まってる
順序不同とや　やさしいこと申される

寝屋川市　森田れい子
堺　市　志田　千代
佐渡市　高野　不二
尼崎市　春城武庫坊
四條畷市　吉岡　修
弘前市　高瀬　霜石
茨木市　藤井　正雄
交野市　山川日出子
八尾市　髙杉　千歩
唐津市　久保　正剣
堺　市　矢倉　五月
大阪市　近藤　正
大阪市　小谷　集一
京都市　高島　啓子
大和郡山市　坊農　柳弘
京都府　稲葉　冬葉

「順序」　藤田泰子選

人生に道順なんて何もない
死んだらあかん順序間違えたらあかん
順序よく生きて窓際族となる
父を継ぐ鉋に偏差値など無縁
先輩に仕事も酒も教えられ
武器持てば対話順序が狂いだす
順序まちがえて埋まらないパズル
通り雨ここで順序が入れ替わる
年功序列少しいい気になっていた
ここまでは年功序列だけで来た
ひとつずつ順序を踏んで今がある
反対は誰もしませんいろは順
ジャンケンで決め後腐れ無い順序
順ぐりに歳はとります逃げられぬ
おじいちゃん再婚孫に嫁がない
洗濯物に序列をつけているナイショ

シドニー　坂上のり子
枚方市　海老池　洋
東大阪市　米田　水昇
日立市　加藤　権悟
唐津市　樋口　輝夫
熊本県　高野　宵草
和歌山市　玉置　当代
東大阪市　谷口　義
吹田市　岩屋　美明
四條畷市　吉岡　修
鳥取県　澤　裕子
寝屋川市　江口　度
堺　市　石堂　潤子
大阪府　米澤　俶子
大阪市　奥村　五月
豊中市　吉田あずき

新参のくせにと皆にきらわれる　寝屋川市　冨山ルイ子
順序にはこだわらぬようクジにする　豊中市　田中　正坊
上座から順に笑いが下りてくる　橿原市　居谷真理子
顔ぶれを見て真っ直ぐに末席へ　堺　市　加島　由一
献盃だお流れですと揉めている　八尾市　田邊　浩三
順序よく嫁いでくれた三姉妹　松江市　小川　注湖
いつからか一番風呂は妻になり　吹田市　穴吹　尚士
ごますりがあって順序が狂いだす　和歌山県　木村　徑子
逆転もあるから順序気にしない　鳥取市　夏目　一粋
青い実が落ちるわたしを置き去りに　富田林市　池　森子
馬鹿野郎順序違うと言う弔辞　交野市　森本　弘風
順序立てすぎた言い訳かみ合わず　富田林市　片岡智恵子
順序への乱が文学だと思う　和歌山市　たむらあきこ
武器持てば対話順序が狂いだす　熊本県　髙野　宵草
順序よく聞けばなあんだそんなこと　東京都　清原　悦子
順番の来ない器が棚にあり　羽曳野市　洒井　一壺
宴席と電車端から先ず埋まる　西宮市　坪井　孝一
深呼吸して検診の順序待つ　米子市　青戸　田鶴
大好きな物を最後に食べる癖　八王子市　播本　充子

秀　句

焼香の順序きびしい過疎の村　東大阪市　笠井　欣子
皇位継ぐ順序へ熱い論続く　岐阜市　平野あずま
苦労して並べ括弧に順不同　尼崎市　軸丸　勝巳

軸　吟

辛勝のつもりに運の順序あり

いつからか一番風呂は妻になり　吹田市　穴吹　尚士
ピンクレディーの踊る順序は覚えてる　西宮市　亀岡　哲子
歳時記の順序どおりに祖母の庭　茨木市　藤井　正雄
じいちゃんに聞いた順序で種を蒔く　米子市　澤田　千春
雁の列誰に教わったのだろう　鳥取市　録沢　風花
割り込みの顔に刺さった冷たい目　横浜市　菊地　政勝
見失うまいにんげんになる順序　浜松市　杉浦　えむ
ドナーカード順序は言うておれません　美祢市　安平次弘道
逆縁になりそうなほど父母元気　大阪市　井丸　昌紀
順序よく行けば看取ってあげられる　堺　市　矢倉　五月
順序よく死なんと皆が困るだろ　豊中市　安藤寿美子
大好きな物を最後に食べる癖　八王子市　播本　充子
何時だって美味しい順に食べている　鳥取市　春木圭一郎
順位などないから好きな観覧車　和歌山県　三宅　保州
四捨五入いつでもされる側にいる　弘前市　髙瀬　霜石
順番の来ない器が棚にあり　羽曳野市　洒井　一壺
責任は順序のとおり下りてくる　藤井寺市　太田扶美代
影法師が前に出たがるので困る　西宮市　山本　義子
青い実が落ちるわたしを置き去りに　富田林市　池　森子

秀　句

順序よく食べねばならぬ串だんご　唐津市　久保　正剣
掬われる順序を待ってない金魚　鳥取市　土橋はるお
散り方の順序は神の手の中に　吹田市　大谷　篤子

軸　吟

寒天ゼリーで始まる我が家のフルコース

虫

牧野　芳光選

前世は青虫かもね野菜好き　千里
青虫が好きな野菜が高く売れ　次男
蜘蛛の糸風の掟に逆らわず　信子
いとおしく少女蛍を手で囲う　権悟
飽食を持て余してる籠の虫　東吉
現代っ子蚊取線香にも弱い　照彦
人間を見たゴキブリもギョッとする　重人
時間給では僕より高い甲虫　勝巳
大空を知らぬオケラが土を掘る　淞丘
腐葉土へ元気印になるミミズ　のり子
カメムシも連れて枝豆お土産に　ルイ子
虫くいの背広で平気退職後　水笑
泣き虫と見せてしたたかです女　一風
デパートで買った同士の虫自慢　不二
虫の息曠野で兵士見放され　(岩)和子
震度六虫はさっさと逃げている　公誠
なあ蛍お前も夜勤した夜明け　妻子
人を恋う虫の合唱無人駅　雄々
昆虫を怪獣にした虫眼鏡　盛夫
人恋しテロにも届く虫しぐれ　一粋
渋滞の上を番の蝶が舞う　岳水
心まで見えるといいね虫眼鏡　活恵

積ん読の親で子供が本の虫　蜂朗
虫の字が三匹だった遠い日々　洋介
虫干しに服もコートもよく喋る　美明
上等の服をグルメの虫が食う　哲男
生き延びて金食い虫になってきた　蛍
害虫のレッテルなんの生きている　美千代
死亡欄から読み始めてる虫メガネ　遠野
農政の狭間虫くい街うまれ　智加恵
虫ほどの言葉に胸が病んでいる　銀波
一匹の蚊と鬼ごっこする平和　かつ子
あちらでも聞いていますか虫の声　ミツ子
人間もまあるくなあれ団子虫　半覚
聞き役の位置で温和な虫めがね　柳弘
駅三つ通り過ごした本の虫　北朗
父として尺取り虫に徹しきる　充子
佳
鈴虫は脱線せずに泣いている　(七)順子
助かった命が虫を殺さない　俊子
赤い灯に虫も男もそれっきり　とし子
み仏のお堂の下に蟻地獄　雅枝
薄命の虫へ歌えよ恋をせよ　圭一郎
人
嫌われているのを知っている毛虫　霜石
地
虫ピンに蝶あでやかな日を残す　俶子
天
ゴキブリが覗きつづけるヒトの裏　仁部四郎
軸

まつり

中崎　深雪選

学校にやる気が満ちる文化祭　藤朗
ロケットが無事に還ればお祭りだ　みつこ
何も知らず祭り上げられ有頂天　洋介
一年の罪滅ぼしというまつり　蛍
反対派あとのまつりで臍を噛む　武史
床の間に一言居士をまつり上げ　碧
縄のれん祭り自慢の国訛り　晴翠
星まつり吉と出てから身が軽い　ヒサ子
古里のない江戸っ子のまつり好き　俊子
待ちきれず風に乗ってるまつり笛　勝視
夏祭り今日は大人を休みます　北朗
茶髪の子集めて白髪音頭とる　徑子
だんじりを曳く子こんなにおったのか　修
まつり笛少年逞し喉仏　ゆきの
ぐうたらがいなせに変わる祭り笛　水笑
村まつり暴れ太鼓は古稀が打つ　黒兎
もろ肌を脱いで乙女の大太鼓　愁女
神様も少し照れてるギャル御輿　(安)泰子
ユニクロもグッチも集まる村まつり　美義
すし米を手につけたまま見る御輿　かつ子
ほどほどの所で止まらぬ祭り酒　淞丘
軽々と御輿を担がせるテレビ　美津子

ストレスはまつりの風にのって散る　泰女
お祭りの半ばで走る塾カバン　像山
結論はまつりの後にしましょうよ　扶美代
おみくじに大吉ふやすおまつり日　四郎
お祭りに留守を守ってひとり酒　章司
神社などないが神輿はある団地　(堀)正和
お神輿を車で運ぶ過疎の村　不二
金魚一匹すくって終わる夏まつり　半覚
寅さんに会える気がする秋まつり　志洋
台風が暴れたような祭りあと　雅明
役員の勤めがすんだまつりの夜　章久
祭りすみ猫ものんびり里の秋　(稲)洋
宿題の鬼に追われて地蔵盆　きらり
ふる里のまつりを詰めた荷が届く　寿美
ふと思う今日は故郷の秋まつり　俶子

佳

逝くまでを女のまつり繰り返す　朝子
靖国にまつられ無念晴れたろか　(矢)五月
車椅子　孫の御輿を待っている　典子
蹴って出た里が呼んでるまつり笛　一知
お祭りが来ると男の貌になる　尚士

人

故郷のまつり囃子が耳の底　理恵

地

どしゃ降りのお祭りにする神がいる　(志)千代

天

一家団欒まいにち祭りやっている　高瀬霜石

軸

ふるさとよ俺の太鼓が聞こえるか　愛論

祈る

中宗明選

神の目にとまるもみじの手の祈り　俶子
幸福を祈る指輪の薬指　章久
原点はきのこ雲なりただ祈る　伊津志
逆上がり出来ますように祈る孫　雅明
広島の祈りにとおい核論議　水笑
またひとつ祈りの塔が建つ悲劇　霜石
懐妊の幸せ祈る子の字画　慕情
無事祈る体験ツアー孫の帰郷　(畑)節子
お百度を踏んだ祈りにサクラサク　准一
お祈りの中味は欲で溢れてる　玄也
しらじらしいお布施もらって祈る奴　たん吉
祈る夏六日九日十五日　美明
墓掃除終えて夕映え盆回向　花匠
黄金の波は案山子に祈ってる　典子
これ以上年金減らぬよう祈る　(矢)五月
策つきて祈るしかない両手です　銀波
来年は合格祈願寺社を替え　藤朗
念入りに祈る神棚抽せん日　徳三
金よりも愛が欲しいと祈るだけ　螢
寝る前の祈り子の事親の事　美千代
祈るほど母の背中が丸くなる　智加恵
しあわせな時の祈りはおざなりで　かおり
旅立ちの子の無事祈る丸い背な　義男
帰宅まで家族の無事を祈る母　一風
祈り込め黙もくと祈る千羽鶴　(吉)幸子
豊年を祈る流鏑馬風を切り　悦男
ただ祈る明るいニュースある日々を　勝巳
終戦忌祈りの中に走馬灯　蜂朗
大勢の祈りが光る撫で仏　昌鼓
万年後地球よどうか無事であれ　一粋
一心に祈るこころに嘘はない　(堀)正和
祈ること知らぬ一歳いい笑顔　敏子
残り火のゆっくり燃えるよう祈る　ただよし
無事に着くようにと祈る離陸前　和重
幸せが続くと祈り忘れられ　一花
初孫が欲しいと祈る皺の数　(花)順子
乗り越えるまではほんとに祈ってた　佳

佳

六十年一閃重し夏のミサ　(稲)洋
東大と祈る子供はゲーム中　(奥)五月
三浪はできぬ事情を絵馬に書く　正雄
神さまをこちらに向かす鈴を振る　たず子
祈りさえ忘れた母の認知症　(樋)輝夫

人

祈るより出来ることから始めよう　圭一郎

地

流れ星祈る言葉が間に合わず　よしみ

天

複雑な気持でドナー待つ祈り　永田俊子

軸

祈るしかすべない我が身もどかしい

初歩教室

題 ― 蜜柑

三宅保州

言葉の乱れ

今回のご投句から二句。

蜜柑しか食べれぬ時の子今は親
季節なく蜜柑食べれる今の幸

二句とも「食べれる」といういわゆる抜き語を使われています。本来は「食べられる」ですが、最近ではら抜き語が跋扈してその是非論がかまびすしいところです。

有名な国語学者の金田一秀穂先生は、ある月刊誌に（心地よい日本語）と題して連載中ですが、その一部を紹介しますと

「ファミレスの店員が『コーヒーのお代わり大丈夫ですか』と言い、客も『あ、大丈夫です』などと答えている。『お客様は喫煙席でよろしかったでしょうか』などというコンビニ敬語の横行は、お店での人間関係が希薄になったことにもよる。」という主旨のことを述べられておられます。

言葉は時代とともに変遷するとはいえ、文芸としての川柳は正しい日本語を使いたいと言えば「そんなのフルーイじゃん」と言われるのでしょうか。それにしてもレジスターでの「千円からでよろしかったでしょうか」に私はどうしても馴染めないのですが、皆様はよろしかったでしょうか？

【同想句】

「蜜柑から父母を想う」的な句

みかんむき筋取る母を見つめる子　たん吉
時期はずれ蜜柑欲しがる母哀れ　美紗子
花の色かおりに母を恋う蜜柑　映子
蜜柑むくその手が優し母恋し　ただよし
みかん風呂母の思いが沸いて来る　俊子
病弱の母に初物青みかん　弘子
みかんの皮浮かべた風呂で亡母思う　益子
みかん剥く手休めてふと亡母想う　イセ
初盆に蜜柑供えて父偲ぶ　萠

「蜜柑の食べ過ぎ」的な句

手が黄色蜜柑食べ過ぎ気をつけて　綾乃
蜜柑好き黄色い指を見せてくれ　千代子
みかん好き皮膚が黄色に染められる　順子
冬が好き指の先まで蜜柑色　和子
好物も食べ過ぎ爪もみかん色　智加恵

「嫁のおめでた」的な句

夏蜜柑欲しがる嫁に母笑顔　章司

嫁と母を詠む作者を位置づけてほしい。

夏みかん嫁が食べだす期待感　(吉)節子

「蜜柑のある場所」的な句

焼きみかん食べた記憶の囲炉裏端　正和
みかん盛りこたつの話よくはずむ　きぬ子
テーブルのみかん家族を和ませる　忠子

【添削・批評句】

目が覚める冷凍みかんの冷たさに　水昇
工夫すれば中八を防げます。

我家は年に一度のみかん狩り　静子
上四はリズムが悪い。「楽しみは」などに

昔から福を招くと言う黄色　政子
蜜柑と言えぬ。「福招く色の蜜柑」的に

サジ加減自慢のみかんジャム煮る　ミヨノ
下四でリズムが悪い。「ジャムを煮る」に

風邪声に咳薬よと冬蜜柑　(畑)節子
あれもこれも詰め込みすぎ。省略の工夫を

原 ホームこたつ蜜柑並べて紅白見　れんげ
添 定番は紅白見つつみかん食べ
原 動かない箱のミカンは直ぐ腐る　はじむ
添 みかん箱そのままにして腐らせる
原 古里のみかんと野菜クロネコで　みね代
クロネコは宅配に。野菜は略したい。

原 秋刀魚スダチいち早く秋告げに来る　満子
添 秋刀魚にはすだちしたたり落ちる秋
原 ビタミンは蜜柑で取って健康に　稔
添 ビタミンは蜜柑で取るに限ります

原 みかん狩り元はそうそう取れません　実千代
添 みかん狩り元とるほども食べられず
原 真夏にもハウスみかんが味わえる　真　一
添 真夏でもハウスみかんが味わえる
原 ストーブのたく部屋いつも蜜柑ある　信　子
添 ストーブを焚くとみかんが欲しくなる
原 お洒落爪蜜柑の皮は誰がむく　冷　子
添 お洒落した爪を受けつけない蜜柑
原 スーパーのみかんがすぐに呼びとめる　かずみ
添 果物屋に呼び止められるみかん好き
原 絵手紙に蜜柑を画いて秋近し　洋　子
添 絵手紙にみかんを画いてそぞろ秋
原 みかんの筋取る子とらぬ子みな我が子　宏　子
添 みかんの筋取るか取らないかも個性

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 外国に蜜柑があるとは知らなんだ　サキ子
添 外国にも蜜柑あること知りました
原 ハンカチをきっちりたたみ蜜柑むく　千　華
添 ハンカチをひろげて彼とみかん剥く
原 宅配便座布団敷いた蜜柑着く　貞　子
添 宅配で座布団敷いた蜜柑着く
原 スーパーで年中蜜柑が鎮座する　道　子
添 スーパーに年中鎮座する蜜柑
原 太陽をみごもったようなみかんだ　利　子
添 太陽の落とし子かも知れぬ蜜柑
原 蜜柑ほど手間のかからぬお持て成し　タカ子
添 みかん盛り手間のかからぬおもてなし
原 お盆にも蜜柑供えている平和　幸　雀
添 お蜜柑を供えて平和噛みしめる
原 手の出ないハウスみかんは拝むだけ　こずえ
添 値段見てハウスみかんは拝むだけ
原 食べ過ぎはいけない幾ら蜜柑でも　秋　星
添 食べ過ぎとわかっていても蜜柑好き
原 汽車の旅赤いネットのみかん買う　英　旺
添 赤いネットの蜜柑なつかし汽車の旅
原 無農薬庭の蜜柑が株を上げ　亜希子
添 無農薬のみかん今年もお裾分け
原 想い出が薫るみかんの丘に立つ　秀　四
添 みかんの花咲くと想い出甦る
原 娘の好きな蜜柑を食べて娘を思う　雅　代
添 みかん好きな娘を思いつつ食べる
原 おもちゃ入れは去年残したみかん箱　藤　朗
添 移り香が残るおもちゃのみかん箱
出来わるい蜜柑も捨てる気になれず　清

【佳　句】

お祖父さんに字を教わった蜜柑箱　つよし
オレンジの食べ頃鳥と競う秋　のり子
紀伊国屋たかがみかんというなかれ　時　雄
下手でいい絵手紙みかんなら描ける　徑　子
真夏日に蜜柑私に過ぎた幸　起世子
紀州っ子蜜柑がないと落ちつけぬ　幸
宅配へ二度のお勤めみかん箱　雅　明
マニキュアの爪が蜜柑の尻を裂く　好
買い込んだ蜜柑が腐る温暖化　像　山
あえいでる妊婦の膝に夏みかん　信　子

【今月の推せん句】

人間も蜜柑も甘くなり過ぎた　丸山孔一

風刺と穿ちがよく効いています。蜜柑をはじめ果物だけでなく、人間も甘くなりすぎていると、作者は嘆き憤慨されている態を蜜柑になぞらえて巧みに詠まれました。

撥ねられた蜜柑が味を主張する　寒川　武

選果の基準で規格外の蜜柑が撥ねられるが味は決して劣っていない。食べてくださいおいしいですよと主張しているというのが句意ですが、作者は人間もしかりということを言いたいのだと思う。学歴や地位や経済力、若さやイケメンや美人ということだけで評価していませんか。もっと中身の人間性そのものを評価すべきであるとまで、この句意をひろげて解釈することができると思います。

【私の句】

選別をされて蜜柑も落ちこぼれ
オレンジと呼ばれてメイドインジャパン

秀句鑑賞

同人吟　小西雄々

―9月号から

物心のついた頃から短詩文芸に興味を持ち、学校では国文学の先生に、短歌のご指導を受けました。その後、昭和二十三年四月、勤務先に文芸部が発足し入会しました。川柳、俳句、短歌および詩の四部門の月例会に出席して、色々勉強させていただきました。会員は二十代の半ばから三十代になったばかりで、誰も若く元気がありましたが、食べ物のない辛い索漠とした時代でした。

二年後に詩と短歌の会が解散し、その後川柳一筋の道を選びました。

川柳は十七音字を中心とした人間陶冶の詩であるという言葉に魅力を感じ、また、可笑しみ、つまり涙の出るような笑いが、胸の中で揺れ動いた結果でした。

さらに、麻生路郎先生のご指導をいただき、「生命ある句を創れ」のスローガンに共鳴し、川柳雑誌から川柳塔へ作句を楽しんでいます。今回の秀句鑑賞には、さらなる集中力を増幅して、時間をかけ約千五百と取組み、発表する事ができました。

お互いに切りそびれてる長電話

高瀬霜石

長電話は相手の迷惑も考えて、もうこれでお仕舞いにしたいと思っていても、先方からの新しい話題につい話こんでしまう。しかし、これで人間関係が良くなれば可としたい。娘ばかりが長電話では無いようだ。

若作りしてドッコイショ言うてはる

古今堂蕉子

若い気分で外面を飾っても、年齢には勝てず、電話が鳴ってもさっと立つことができず、「ドッコイショ」と思わず口に出してしまう。関西弁の下五「言うてはる」で、笑いを誘う中に、皮肉味の効いた句と言えましょう。

まあいっか財産もなく借りもなく

須磨活恵

この世に生を受けて、運と努力で巨万の富を手にする人もいれば、金に縁遠い人も多い。財産もなく借りもないと言いながら、中流意識で生活を楽しんでおられるのではないですか。幸せな様子が瞼に浮かびます。

まだ七十もう七十と言う勝手

石堂潤子

平均寿命は伸びたけど、七十歳を前に逝く人も少なくない。七十歳を迎えた感謝の気持と共に、歳月の流れの早さに対し、今後の自戒の心も伝わってくるようです。

二万歩がノルマいのちの汗をかく

村上直樹

一万歩を私は目標にしているが、二万歩とは恐れ入りました。同じ汗を拭くにもウォーキングの後は爽快そのものです。ただし、ほどほどにしないと膝を痛めるのでご用心。

汚染した沼耐え切れず泡を吹く

米澤俶子

河川や沼の汚染は、生活用水その他汚水のたれ流し、塵芥の不法投棄の一語につきる。メダカや泥鰌の姿も消え、メタンガスや硫化水素の泡が、ぶくぶく目に入る。個人も政府も国民全員で、昔に戻す努力が必要でしょう。

六十年戦後の波を生きのびる

大内朝子

「ぎらぎらの空に玉音忘れない」という句があった。戦中、戦後を生き抜いた人を含め、日本人の一つの節目である。その間、色々な苦労の積み重ねもあったが、今後も強く生き抜いて、平和を維持したいものです。

蛍待つあいだに過去を巻き戻す

木本朱夏

蛍の来るのを待っても何時も遅れてくる。勿論、この蛍は女性で巧みな擬人法と言えましょう。昔はこんな事は無かった。何故だろうか、疑心暗鬼に胸も塞がる。

軽いタッチに妙味がある。

夏バテで脳みそまでが破壊され

田中みね

今年の夏も暑い。連日の真夏日と熱帯夜。働き蜂には特にこたえる。脳みそが破壊されるという誇張法がほどよく効いた。

栄養と休養で乗り切りたい。盂蘭盆会も済めば、朝晩少しずつ涼しくなる。頑張ろう。

人間のようなペットのお葬式

山口三千子

昔では考えられないことが、普通の出来事になった。ペットの葬儀屋は結構繁盛しているという。お坊さんの読経もあり、墓も立派で、不景気・金詰りは論外のようだ。

後始末どうしてくれる紙吹雪

上田俊路

優勝パレードやその他行事での紙吹雪。ビルの屋上や窓から撒いた時は、華麗でムードは高まるが、後始末は誰がするだろうか。善人だから特に心配になる。

ジャイアンツ勝つと晩酌うまくない

山本正光

アンチ巨人だろうか。今年の巨人は広島と最下位争いで元気がない。ホームランバッターを他球団から引き抜いても、安打でつなぐ野球をしないと勝てないようだ。反対に巨人が負けると、晩酌の追加が欲しいらしい。

内臓に病気は無いがお歳なみ

岸野あやめ

五臓六腑の精密検査の結果、蛋白が少し出たり、カリウムの数値が少し高くても「お歳ですからこの位なら…」と言われる事がある。安心感と共に何か気になる事もある。体験された句でしょうか。

また一人芝居してます探し物

小川賀世子

物忘れは年齢と共に加速しますが、置き忘れた品を探す時は、気分的にも面白くない。それに費す時間が惜しまれるし、いらいらが募るのみだ。よく経験する事で側から見れば、全く一人芝居に等しい。

久びさの故郷に立つ黒を着て

渡辺さと美

久し振り故郷に喪服姿で立った。両親か、その他の葬儀のためか。何故か淋しさが伝わってきます。

老いた鳩ばかり平和を語っても

小林妻子

平和を口にしても、戦後から今日まで世界の流れも変ってきた。自衛権のため憲法の一部を改正する動きもある。引退した政治家には用がない。心ある国民は無関心ではない。

聴診器より正確な酒の味

平田実男

酒の好きな人が、酒が飲めなくなれば「お仕舞いだ」と言うことを聞いている。元気で働いた日は美味しい酒になるだろう。明日への活力にもなるでしょう。

行政も追い付けません悪の知恵

坂上高栄

振り込め詐欺にリフォーム詐欺等、被害者にお年寄りの多いのが残念だ。早急に悪の芽を断ち切って欲しい。庶民の願いである

いつも来るヘルパーさんは家族並

宮崎シマ子

独居老人、特に身体に障害のある人は、身内よりヘルパーさんを頼りにする割合が多いという。福祉関係も前進してきた。

不安だが飲まねば薬気がすまぬ

富田蘭水

不安とは薬の副作用と思われるが、飲まないと癒えぬというジレンマの表現がお見事。

—水煙抄

秀句鑑賞

—9月号から

白根ふみ

これからを思う孤独を学ばねば

三浦　千津子

昔は大家族で考えられなかったことが、今は孤独が当り前のようになり、私も含めて隣近所は一人暮しばかり。

筆順を守って静かなる暮らし

辻内　次根

筆順を違えると忽ち狂って、手が付けられないこともある。静かに暮らせることは、とても幸せと思います。

無になって見えてきました打開策

土屋　起世子

あくせく余分な事は考えないで落着くと、静かに浮かび上がってくるものと信じます。

ビタミンを一皿増やしガンバルぞ

遠藤　那珂子

体にいいと思うものは貪欲に摂取して、いつまでも健康でありたいものです。

子を育てやっと分った母の汗

猪森　スミヱ

生意気ばかり言っていたが、自分が体験するとそんなものではない、心の中で有り難うと言わぬ日はない。

人間がどんどん未来食い荒す

坂上　のり子

環境汚染、破壊、一体この先どうなることか、見えない農薬、人間の知恵がどんどん傾いてゆく、末おそろしい。

介助犬歩幅は神に近くなる

加藤　権悟

全幅の信頼を担い、おだやかな目で主人を見守っている。涙が出てきます。

ブーメラン家がやっぱりいいと言う

吉田　幸子

どんなに持て成してもらっても、どんなに素晴らしい景色に出会っても、所詮我が家に勝るものはありません。貧しくても気ままに暮らせる露の宿に乾杯。

平凡な日の幸せに気付かない

山田　婦美子

何かがあったら大変。今日の無事に感謝するとき、明日が見えてくる。この歳になると無闇矢鱈な欲心は禁物。静かな一日を大切に過したいものです。

隅っこで聞くから是非がよくわかる

奥時　雄

雑音が入りにくく、自分の意志もつかめそう。やたら真ん中で派手に振舞うより、奥行があると思います。

四季が来るほかに贅沢要りません

吉村　久仁雄

日本の四季の中で生まれ、移り変わる季を愛で、その中から川柳も味わっています。もしも四季がなかったら！こんな幸せはありません。

少子化が子がかすがいを死語にする

松葉　君江

いつも遠花火のごとく、子の幸せを願っている。墓守も当てにはできない。飽食の時代、競争に明け暮れて、大切なもの（心）をだんだん失ってゆくように見えます。

イキイキと寿命が延びる畑仕事

坂部　かずみ

こんな幸せな生き方はありません。健康な汗が漲ってきます。

忘れたい事はしっかり憶えてる

神野　千恵子

苦しくてもう忘れたいのに、一挙一動が浮かんでくる。でも何とか払拭しなければ…。これが人生かも知れません。

藤村〆女さんを偲ぶ

奥田　みつ子

麻生路郎先生の川柳雑誌時代、婦人友の会のメンバーとして活躍していらした藤村〆女さんが逝去された。

昭和三十年に路郎先生に師事し、不朽洞会員として女性川柳作家の先駆者。川柳歴五十年の超ベテランでいらしたが、吹田のマンションから、吹田川柳会・もくせい川柳会・西宮北口句会などに出席、作句を楽しまれた。

和服がよくお似合いで、いかにも明治の女性の気概とやさしさ、美しさを兼ね備えたお人柄は岡山県の旧家のお育ちの故であろう。

最近は和服をリフォームした洋服を品良く着こなされ、私共に「これは羽織から作ったのよ」などと楽しげに話してくださった。

昨年の十月までは西宮北口句会にも出席されていたが、その後、東京の子供さんの家に転居された。昨年九月の句会の秀句に

恋をするたびに美人になりました
背中にも目があり老母の見抜く嘘
やり直す勇気をくれた子の寝顔

など、〆女さんらしい句が並んでいる

〆女さんは藤村亜鈍氏と離婚後、二男三女を保険の外交員などをして、女手一つで立派に育て上げられたが、いつも明るい笑顔で苦労した過去については話されなかった。

昭和六十二年十二月に『ともしび』藤村〆女川柳句集を発刊された。御自分で一筆一筆心をこめた手書きである。あとがきによると「子供や孫達にプレゼントするつもりで書きかけた句」を子供さん達が「喜寿の記念に」と句集にされたそうだ。〆女さんはありのままの姿を句に託しておられるので、その句集の中の句を並べると〆女さんが話されなかった来し方の御苦労などが、おのずと浮かび上がってくるようだ。

いつ来ても板の間光って母達者
紳士録に父の名前があった過去
孝行をちょっぴりさせて母が逝く

中国山脈の山襞に囲まれた岡山県の旧家の両親を偲んでおられる。

また御自身の生き方、暮らしの句。

女手にあと一息の子の育ち
母の目が時には女として炎える
回り続けて少し疲れた母の独楽
泥舟とわかっても乗る子の頼み
別れても風の噂を気にかける
他人にはなり切れぬ血がまたうずく
わが影に重なる影は五人の子
忘れたい過去に他人は触れたがり
今だから笑って言える離婚談
白足袋をはいて女に秋の風

やはり御自分が苦労していらしたから、他人への思いやりも人一倍深かったように思われる。「これでアフリカの飢えた子供何人かを救えるのよ」と古切手や使用済みのラガールカードなどを熱心に集めては地元のボランティア団体に寄託していらした。

いろいろの苦労も実り、五人の子供さん達はみな良き家庭を持ち、〆女さんの晩年は実に恵まれて、次の句を遺された。

耐えて来た女に喜寿の陽が昇る
恵まれた老後は過去を振り向かず
どうぞごゆっくりお休みください　合掌

《最新刊》田口 麦彦 編著

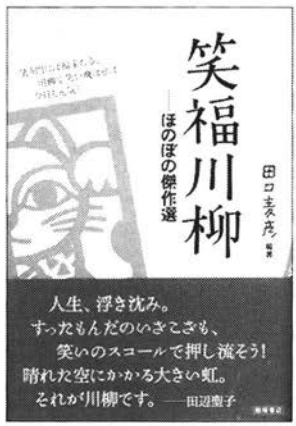
笑福川柳

ほのぼの傑作選

46並製　税込一四七〇円送料210円

川柳で笑い飛ばせば今日も元気！

読売新聞西部本社版で連載中の『笑福川柳』欄の入選句からさらに選りすぐった秀句の傑作集です。全部で624の秀句をテーマ別に分類しまとめました。選者である田口麦彦の川柳コラムは7編も載せ、さらに同じ熊本出身の風刺漫画家那須良輔氏を記念した「湯前まんが美術館」主催の「風刺漫画コンクール」入選作をイラストとして使用しました。立体的で充実した川柳書です。



《好評発売中》田口 麦彦

楽しみながら上手くなる

穴埋め川柳練習帳

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。

46並製　税込一六八〇円送料210円

川柳表現辞典

田口麦彦　46上製箱入　税込三五七〇円送210円

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

現代川柳入門

田口麦彦46上製カバー　税込一九八〇円送210円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

川柳技法入門

田口麦彦46上製カバー　税込一九八〇円送210円

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完成までの推敲添削他　風刺・ユーモア・比喩等の方法

時事川柳入門

田口麦彦46上製カバー　税込一八三五円送210円

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリーマン川柳の即興性など、九五三句の例句で解明

【ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈】

〒112-0002 東京都文京区小石川1-16-1 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810 www.iizukabooks.com 振替 00130-6-13014

柳壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

ローズ川柳会　山崎　君子報

この先は何があろうと歩くだけ　てる
清い水さけて住みたい魚も居る　キク子
きんつばに御飯一膳減らさねば　みつ子
満腹でも入る不思議なお茶ケーキ　藍
パティシェがテレビで顔を売る菓子屋　哲子
使わない頭もミシンも錆びている　トミエ
鍵っ子の心満たさぬ袋菓子　貴代子
清水汲む木の葉を組んだ杯で　孝一
いっぱいの水に心をのぞかれる　いわゑ
水中花暑さ気にせずすまし顔　武庫坊
時効にはしないあの世に持ってゆく　年代
原風景井戸はコンコン湧いていた　義子
涼菓ずらり朝顔となる紺のれん　君子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

つまずいて転んで自分取り戻す　ひかり
おいそれと妥協はしない老いの意地　賢
三猿に徹しきれない人の性　初恵
栄転を夢に描いて明日に翔ぶ　いさむ
熨斗袋二転三転見栄包む　かおり
無駄のない処で打ってる父の釘　あきら
笑ってる亡母の遺影に語り掛け　寿々女
夢ばかり追い続けてる自尊心　文仙
ストレスが溶けて朝風呂友にする　輝夫
仏様今日は笑顔に見えてます　貞月
深呼吸してイライラを眠らせる　八重子
歩道橋助け合ってる老い二人　放任
宴会で人を笑わす隠し芸　治延
芸の道極め襲名花舞台　よしみ

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

臆病な奴だな核をちらつかす　克己
大阪の喧嘩はみんな声ばかり　典呼
辛口へ臆病者が笑ってる　あや子
現金に冷たくされて生きてきた　和代
現金を握ると男よく喋る　太郎
ワニ皮の財布中味は小銭のみ　秀夫
配膳の順は本家が来て決める　雅文
撤退を決める勇気のない日本　敏子
白黒の決着つけぬまま夫婦　美弥子
決断の出せぬ男に業にやす　良子
不正突くマイクは情け容赦無い　高尚
無愛想な人を嫌っているマイク　ばっは
夢語るマイクの声は無限大　弥生
住み慣れた町見違える霧の朝　美子
男と女の港は霧に包まれる　湖風
外は霧雨悲しい恋の民話聞く　太一
霧が生み霧が育てた青いケシ　三重子
霧雨も貴方とならば濡れてゆく　愛論

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

思い出せぬままに笑顔で会釈する　智恵子
花回廊百合に笑って迎えられ　公美枝
七人の敵も笑顔で寄ってくる　久子
千羽鶴笑顔で送る退院日　鈴枝
リハビリへ踏みだす一歩ひざ笑う　豊枝
ストレスを笑いとばして福を呼ぶ　弘子
仕ぐさまで親に似てきて苦笑い　和代
商売へ笑顔たやさず儲け追う　信雄
平凡な中に魅力を知る笑顔　静江
美人よりいつも笑顔の人で好き　正光
熱燗を囲んで父の日の笑顔　雄々

川柳塔おおとり　鈴木　一弘報

代議士の二世らくらく親ゆずり　小生
らくらくと泳いでいるのは痩せ蛙　幸次郎
コマーシャルらくらく財布軽くする　一弘
好きな物らくらく通る食後でも　知恵
たんぽぽの綿帽子見て季節知る　ヒロ子
綿帽子計りきれない恩がある　以和万津
野球帽闘志の汗が滲み出る　道子
ドカ雪へ暖かそうな綿帽子　黙光
野地蔵に帽子被せる夏盛り　清子
帽子好きほんとは隠す乱れ髪　和子
いくたびも別れすれすれまだこの世　艶子
すれすれであろうとパスをすればよい　由多香
すれすれのスカート座り化粧する　真一

人生を踊り疲れた影法師　風花
まだ女日焼け怖がる夏帽子　登美

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

無著菩薩の眼差しに皆包まれる　田鶴
少年に曲がった道は似合わない　富美子
詩を愛す兄の日記が蔵を出る　瑞枝
猫じゃらしまたおいでねと犬の朝　春枝
歳時記の手垢はしかと亡父のもの　紫泉
あしらいの赤で主役になる器　那珂子
器はずんでやがて淋しいパンの耳　ふみ
夏バテも歩いて動いてハネ返す　初枝
提灯が吊るされ祭の街になる　天雀
朝顔が芽をのぞかせた雨あがり　雪江
難問をうけとる空よありがとう　恵子
心のケアだいじにされるお医者さん　やえ
どの島も港があって船が入る　千代
ミサイルの話みぢかな向こう岸　亜弥
役柄の記念にもらった万歩計　晶子
初夏のかぜ吹いて電話が鳴りひびく　てい子
意見しっかりメカに強いな現代っ子　玲子
難問を解く三人の知恵くらべ　スミエ
風鈴の涼しい音に振り返り　章江
妄想がふくらんでくる水不足　繭
空梅雨で嘆き豪雨でまた嘆く　寿々子
風はまぼろし今日の洗濯機をまわす　日枝子

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

灰皿が肩を窄めて部屋の隅　孝一
こだわりは多分灰になるまで捨てぬ　求芽
灰汁少し持って人間らしく生き　活恵
もう一人の僕と出会ってから迷い　宏章
あの出会いそれから人生色がつき　祐作
あの出会いなければなあと妻愚痴る　義一
出会った時の妻は楚々たる美女でした　佐代子
一筋縄でゆかぬ女にのめり込む　かおり
一筋縄で話の分かる人でない　庸佑
俺に似ぬ一筋縄の子に育て　宵草
どんなもん一筋縄を見てみたい　勲弘
匠こそ一筋縄の頑固者　佳一郎
一筋縄で女こころは読み切れぬ　尚士
誤算かも一筋縄の端がない　鹿太
福の神めっきり姿見なくなり　きよし
Uターンへ案外ぬくいくにの風　萬的
手のうちは見せぬ咄嗟のユーターン　泰雄
ユーターンをしてふる里の情に触れ　武史
ユーターン島の灯りがあたたかい　重人
ユーターン言葉の壁にまた迷う　節子
ユーターン子供が野性取り戻す　砂輝守
明日の風どう吹こうとも仁王の目　典子
忘れた名思い出させる泣きぼくろ　照子
鯉泳ぐ池には事件ないらしい　とし子
妻の留守鼻歌まじりで仕事する　治三郎
年金の目減りが飲んだボクの酒　美義
正義感吊り下げてある衣紋掛け　昭
まっすぐに生きて余生の旨い酒　秀夫
それだけの人とビールの泡を吹く　美籠
生み月の命に海を泳がせる　晴美

佳句地十選（9月号から）

小西小雪

青いバラ美の探求に限りなし　保州
破れジーンズ中はさぞかし脚線美　和代
うっかりと酒の肴にされている　扶美代
激流が人間らしくしてくれた　いわゑ
謎ひとつふたつは欲しい老夫婦　欣子
恋をするレモンの芯の一途なり　朝子
少子化に母校の歴史閉ざされる　(安)泰子
偲ぶ人あり六月の花の陰　(八)千代
汗かいた肌が一番好きな風　俶子
弾み過ぎ明日は孤独になるてまり　春蘭

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

人類と悪魔が握手する核よ　洋々
夏バテをさせない母の味がする　無限
人柄の良さが優しい皺になる　秀四
老夫婦まさかの息を覗き合う　秀夫
生も死もボタンひとつにある運命　良子
夏バテをしてはおられぬ敗戦忌　信子
八起き目の亀ですあわてたりしない　一瑶
夏バテを知らぬヒマワリ凛と咲く　はつ江
魂が抜けて仏の顔になる　裕子
ハイテクに神の領域考える　圭一郎
ハイテクへ人間性がうすれゆく　金祥
曲り角まさかの敵が待っている　一京
渇水も大気夏バテかも知れぬ　雅女

マンモスも警告してる温暖化　昌鼓
夏バテに愛のリズムも狂いがち　(山)はるお
ハイテクが神の掟の枠を越え　志げ緒
古ぼけた皿がまさかの値にあわて　静生
予約制人がやりくりされている　悦子
ハイテクで女の心掴めない　諏訪男
ハイテクの医療器人を輪切りする　毅
口下手もまさかの時は啖呵きる　節子
定年で倒れてしまうええまんか　善夫
告げ口をまさかと思う人に聞く　春名
遺言がさらさら書けぬウツを溜め　孝男
夏バテに犬のお家はトタン屋根　重忠
ハイテクの指が兎を出す手品　義徳
アスベスト怖い国です罪深い　房江
ビーチパラソル夏バテ癒す隠れ宿　益子
杖頼るまさか我が身がなろうとは　宗明
旱天にええまん雨よありがとう　一粋

竹原川柳会　時広　一路報

月の夜の海だ背泳ぎでもするか　蘭幸
ケースから私の泳ぎを見る金魚　慶子
人の世を上手に泳ぐ人だった　房子
青蛙古式泳法守りぬく　節生
あじさい彩に染まってみたい蛙　栄恵
鳴きたくて鳴いてるわけではない蛙　菁居
青蛙お前も宇宙大好きか　節夫
クロールが出来る蛙はいないだろ　輝恵
かえるのうた歌うとみんな蛙になる　千代美
あの蛙きっとネクタイ似合うだろ　力

パソコンで大海知った井の蛙　幸子
跳んで跳んでいつか蛙も虹渡る　笑子
ドンと夏タオル一枚首にかけ　比呂子
暑い夏サマーカットで乗り越える　千枝
青空よスケッチしたくなる夏よ　史子
泣いた夜も朝は笑顔の亡母でした　敬子
泣く事も一芸ですと言うカラス　規代
泣き笑い越えた笑顔を持ちあるく　静風
うちの孫泣かせどころを心得る　民恵
ふたりして泣けば笑えるかもしれぬ　半覚
大正は元年泣かぬ母でした　厚子
思いきり泣いて真っ白い朝が来る　淑子
オペにオペさすがに涙もろくなる　正宏
波がピカピカ光り出したぞさあ泳ご　一路

川柳塔唐津　仁部　四郎報

健康法お腹も口も八分目　晴翠
強欲なポックリ逝きたい不摂生　勝視
整理しておかねばならぬ箇条書　實
炎天下物みな寂とレクイエム　正剣
さりげない仕草たまらぬ恋の味　蜂朗
三十五度雑草さえも奏える畑　水笑
幸せを祈る太鼓の三囃子　虹汀
干し魚の土産で測る近所ぶり　四郎
客帰り愚痴がこぼれている屋台　輝夫
新任の理想ダンダン色あせる　高明

川柳ささやま　遠山　可住報

あれこれと勝手なときだけお姉さん　恵美
にこにこの裏へ悲しみ閉じ込める　純子
夏バテだけど酒だけ良く飲める　章
距離おいて流す涙がきれいすぎ　文子
誘い込むソバ打つのれん温い顔　多美子
花粉症メガネの奥に涙ある　開子
発明家子供の頃から科学好き　かほる
涙する数だけ母は強くなる　つや子
涙声電話に入れて金を取る　靖子
誘われて一口飲んだ酒に酔い　八重子
矢印を伝って一緒に泣きに行く　哲男
天下りというカーナビを持っている　可住

川柳大阪　髙木　信酔報

尻向けて三日も妻はもの言わぬ　五月
ジンライム女の嘘を見抜いてる　美籠
かまへんと言ったときながら出ることと　春蘭
発泡酒でかまへん父の誕生日　孝一
性格を示すチューブに絞り跡　東吉
息子より若い巡査に絞られる　利昭
ハーイすぐトーンが違うボーナス日　いわお
ライバルを絞って化粧やり直す　芳香
何事も控えて芯は強くもつ　タカ子
はきはきと返事の出来る子の未来　朝子
返事書く葉書の文字の温かさ　ひろゑ
風向きを読んでゆっくり返事する　一風
札一枚母の返事にはいってる　修
カルガモのような夫婦のウォーキング　洛酔
かまへんの一言夢が開けそう　司
まず返事言った親爺の墓掃除　喜楽

譲るもの譲ってうまいにぎりめし　重人
合理化がおいでおいでと事故招く　川童
かまへんと笑顔で許す太っ腹　美花
改革のたんびに税を絞られる　鉄心
浅漬けは絞り具合でいいお味　一歩
十指みな明るい返事手話の笑み　柳弘
ライバルから絞りとりたいエネルギー　善純
プロポーズごめんなさいと来た返事　珠生
母の愛それより強い愛知らず　かよこ
絞られて父との仲が近くなり　柳昌
鋼鉄の強さ誇った談合だ　青道
思い切り絞るとレモン泣き出した　笑風
そっけない返事どついたろかと思う　まつお
アバウトに生きて心に曇りなし　信酔

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

鬼太鼓の海辺の恋をまき散らす　晴美
頼りない夫に似てる昼の月　五月
ロボットも熱帯夜には狂い出す　きよし
どの靴も底が斜めに減っている　朋月
はっぴ着てドドーンと行こう夏祭り　よし子
禁煙のあかしと空箱鶴に化け　里江
いとしさも憎しみも秘め胸の底　美代子
電話一本米びつの底埋まる　耕治
目覚めれば今日も暑いと蝉の声　勝巳
母の眼に心の底を見透かされ　正治
底辺の温い人情嘘がない　まさ
底辺で耐えて学んだ人の道　亀与子
好きな色結願用に鶴を折る　孝一

八月の悔恨サトウきびが騒ぐ　義芳
カラコロと昭和の音を懐かしむ　桃花
相槌を打って出方を確かめる　江美
底積みにされて出番のない名器　求芽
楽ですね酒も最中もいける客　全彦
眠れない夜はひつじと戯れる　鹿太
目の位置でこころ通わす蝸牛　美籠

西宮北口川柳会　黒田　能子報

雑草のかげで朝顔小さく咲く　房子
八月の記憶の中の草いきれ　富喜子
草むらに涼しい声が秋近し　トミエ
ランドセル投げて草笛今日も吹く　歳子
草萌えてれんげ畑で鼾かく　奮水
参加して良かった一歩踏み出せた　千代
末席に参加してたがもう居ない　昭三
全ボツにせめても欲しい参加賞　貴代子
恋をする気力まだまだもっている　朋月
雨季乾季まだまだ橋が渡れない　たず子
追いかけてみてもまだまだ遠い人　求芽
人間にまだまだ貸しがある地球　忠
恋も愛もまだまだ捨てた訳じゃない　美籠
古里の墓の御守りに困ってる　松煙
大学の学費は亡母の遺産かな　江美
知床の五湖はゆっくり時刻む　和子
心配を母は自分で拵える　石舟
熱帯夜金魚も少しバテている　順子
ひまわりの絵の中にいる安らいで　いわゑ
悲しいねヒロシマは今蝉しぐれ　鹿太

優しさの思い身に沁む娘のしぐさ　光子
遺産分けモナリザの目の妻がいる　哲男
長生きの秘訣楽しむ酒二合　一之
故郷がひとつになれる甲子園　正和
がじゅまるの樹が語り継ぐ風の音　哲子
水浴びの子らに加わる蝉時雨　章子
つゆくさのお洒落な藍に指染める　孝一
希望した独り暮らしに泣いている　五月
よく笑う明るい女に生んでくれ　てる
色褪せて亡父のにおいのする辞典　光久

三幸川柳教室　古久保和子報

晴れ晴れとシャンソン唄い払う憂さ　一歩
素麺の沸騰点に水を差し　かずみ
自分より数段上とすぐ悟る　義男
三合もあれば仏になりきれる　次根
悟れない蛍が飲んだ甘い水　町子
百歳になれば悟れるかも知れぬ　保州
天命と受け止めている闘病記　清史
ひとかじりしてみて無理と悟る道　靖子
耳掻きの先で悟った顔でいる　章子
モナリザに悟り開いた笑みがある　智三
しっかりとした人だけど女好き　信子
左手も添える握手で頼まれる　孝義
しっかりと心のねじを締め直す　三千子
しっかりと五欲を抱いてまだ女　登美代
ホッチキスで家族しっかり止めておく　朱夏
新しい今日に挑んで眉を引く　徑子
この夏は一つビキニと参らんか　みね

ジャンケンがだんだん殺気立ってきた　和子
さあやるぞ決めた途端に若返る　千秀
挑戦は続いて山は高くなる　公子
段取りが下手で落ちつく暇がない　イセ
世渡りの下手が三食昼寝付き　当代
万華鏡下手は下手なり光りさす　宏夫
短くて下手な祝辞に大拍手　昇
要領の悪さを笑う持ち時間　碧
仲裁に入り大きくした喧嘩　武
いい人だ愛想笑いが下手だから　准一
病む妻へ下手な手つきでむくリンゴ　起世子
父の日を習い始めの字が飾る　幸
下手な絵が一番光る参観日　幹子

京都塔の会　都倉　求芽

風の盆 浴衣の君にかぐコロン　ふりこ
ダイエット少し空気が軽くなる　鹿太
不整脈気になり出したトップの座　萬的
トップの背見えてるうちは走れそう　葉子
泥つきで安心させる無農薬　福子
いさかいが泥沼化する意地っぱり　輝美
泥んこになるとすぐ拭くお母さん　則彦
Tシャツの胸丸見えでどよめける　英子
どよめきの中で次の矢考える　典子
公園に子のどよめきがほしい夏　宏子
でんぐり返りへどよめき起こる森光子　啓子
メーデーでどよめき聞いたのは昔　正坊
指輪跡白く残ってバツイチに　きよし
今日からは心ひとつになる指輪　欣之
にせものも母と思えば懐しい　久留美
光より母の心が籠る石　庸佑
イミテーションの指輪捨てるに捨てられず　満子
晴ればれと指輪が消えたくすり指　求芽
でかすぎる指輪肩凝りしませんか　益子

岸和田川柳会　原　さよ子報

人恋し隣へ伸びる豆の蔓　力子
寒天と野菜で夏のダイエット　基
亡き母の糠漬け恋し夏野菜　東吉
朝昼晩ウサギみたいに食わされる　清
見切り発車する勢いの民営化　和美
父見切りぼくに期待をかける母　香代
見切り値で買うたと言い訳派手な服　みつ江
異常気象神の見切りの証拠かも　蛙城
花の色落ちて空しい沙羅双樹　幸子
空しさをリュックに詰めて一人旅　岩夫
空しさは一番違いはずれ券　ゆり子
予定なくすごす本日空しい日　房枝
空しさを般若心経説き給う　寿海
ありがとう空しい別れ経嗚咽　笑司
蓄財に空しさ残る遺産分け　ゆい
理由はあろうやはり空しい自爆テロ　ダン吉
サングラスかけて気分をハイにする　みね代
ファーブルを夢見て孫は虫眼鏡　一脩
色めがね越しに見ている過去の染み　洋
お眼鏡にかなったらしいよい笑顔　甚一
色眼鏡で見られがちです未亡人　弘子
目の奥に愛を感じた老眼鏡　さよ子
情けには弱い眼鏡ですぐ曇る　仁緑
どの顔も美人に見える色眼鏡　狸村
持ち味の素敵な人に出合いたい　楢代
五十年持ち味生かす主婦の皿　浅子
下手なりに持ち味生かす隠し芸　穣一
算数2体育5だと胸を張る　守
持ち味は心和ます笑顔です　珠子
王手飛車王は見切れず飛車哀れ　呂万

岩美川柳会　石谷美恵子報

仰がれて天狗になった猿である　蟹郎
師と仰ぐ答ひとつを抱きつづけ　きみ子
わが師とも仰ぐよき親友葬の列　孝男
決断を前にしっかり天仰ぐ　裕子
カタツムリ頂上仰ぎあせらない　静生
仰ぎ見る雲の流れの七変化　和子
記念樹を仰ぎつ逝った息子を想う　雅女
予想だにしない言葉に天仰ぐ　公子
炎天の蟻も疲れはきっとある　忠良
オレ流を通し独りの酒をのむ　一京
歳のせい疲れが三日後にくる　たぬ
疲れたらやっぱり風呂がおいしいな　菖子
浴衣には似合わぬケイタイ腕時計　完司
浴衣着て輪にとけこんだ佐渡おけさ　重忠
絞り地の浴衣のれんに返り咲く　(野)節子
浴衣着て阿呆になります阿波踊り　節子
悪いのはいきな浴衣のあで姿　季芳
しあわせに浴衣の影がゆれている　睦子
浴衣着て今日もちゃんこの鍋奉行　公乃

もう少し女でいたい浴衣着る　茶子
着古した浴衣でオムツ縫った頃　幸枝
浴衣着るたびに女を取り戻す　アキ
浴衣着て今日の戦の幕をひく　かつみ
温暖化地球ホルモン変調か　圭一郎
ホルモンが干涸びて妖怪になり　一瑶
ホルモンの作用が女らしくする　一粋
女性ホルモン少しへったと思います　稔
久し振り妻の浴衣がまぶしくて　美恵子

長柳会　村上直樹報

やんぬるかな人畜無害とは如何に　直樹
安全は常の用心実践だ　佐久治
平和唱え靖国詣でどないする　武男
年寄りは杖と手すりで身を守る　明信
安全パイと思ったけれど穴に落ち　輝子
ガラス越し他人の心をのぞきたい　美代子
妻元気家内安全平和です　孝彦
安全を無視したつけが大惨事　靖博
階段に手摺が欲しい老いなれば　正一
いつか来る平和の反動心して　明子
ガラス越しみてはならない物をみる　正子
絵日記に家族の秘密ガラス張り　三和子
急ぐとも指差し喚呼右左　ひろし
安全を背中に祈り旅に出す　一慧
安全を千人針に託した日　英美
蛍火のような平和を望む歳　芳野
反論へガラスの破片つきささる　和子
ガラスの城だと思う風の中　けい子

黒い雲かかり始めた平和の樹　正美
呉越同舟平和な顔の露天風呂　冨美子
宰相の孤独ガラスの城に住む　和代
安全の証保険はみんな損　幸雄
人生の悲嘆と歓喜知るグラス　敬二
戦争を知らぬ議員が平和説く　史
ごっこには戦争あって平和なし　淳司
平和論語りつくせば夜が明ける　よしお

川柳塔なら　坊農柳弘報

老いを知る針と糸とが遠くなる　敏子
怠慢を咎める棚の古字引　とし子
シェフの眼がひかる厨房旬を盛る　ふりこ
紫の房が九条照らしてる　芳香
大きな房期待してます袋掛け　桜竜
冷房に弱いおんなの夏の風邪　洋子
咎めても咎めてもまだあきぬ　春蘭
手術した乳房が夢で泣いている　弘風
綻びを縫う針一本が胸にある　冬葉
独房の壁に懺悔の涙染み　富子
幸運な船出七福神も連れ　千梢
薄墨の房が哀しいくじら幕　直子
野仏に気が咎めつつ用を足す　修
咎めないことにしてからよく眠る　博一
還暦の乳房まだまだ湯を弾く　寿美
毒針と知り刺されたい時もある　秋泉
誰を待つともなく梅雨といる茶房　國治
好運の女神努力を見逃さぬ　一風
ふるさとに抱かれて軽くなる乳房　隆盛

針千本飲んで母さん嘘をいう　ダン吉
ラッキーな耳だ聞こえぬ距離だった　完次
ラッキーな時間は駆け足で抜ける　信子
母を恋うこころ乳房に辿りつく　理恵
片方の乳房を捨てて生きていく　茂雄
増税の話に冷房効きすぎる　まつお
ピンチからラッキー人間のドラマ　道子
ブロンズの乳房が希求する平和　真理子
釣り針の仕掛けは紅いバラだった　朝子
ラッキーな石は鳥居の上に乗る　春雄
愛情のかたちに揺れている乳房　秋雄

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

文字を書く手もふるえるよ白寿坂　八重子
いい知恵だ十七文字を書いてみる　八重
文字よりも鷲峯山を仰ぎ見る　喜与志
戦争をのりこえて文字かくしゃくと　富久江
ハッとした足が私を迷わせる　保子
ハッとして恋を煩うことになる　たから
隙を突く蝉の誕生ハッとする　なが子
ハッとするほどに財布が消えていた　かおる
ハッとする刺激がほしいこの頃だ　房子
家族中旅行に行った留守万歳　武子
水面はおだやかそうで鴨の足　幸枝
ささやかな絆を繋ぐ届け物　和子
鳴滝に打たれ静める魔のこころ　睦子
赤紙に召され忠魂碑にねむる　彩子
魂が二つ寄り添い生きている　久枝
たましいを入れる時間をかけている　汲香

父母の魂がくるお盆月　きみ子
魂のバトンタッチで家督揺れ　公子
魂がひとつになって添い遂げる　宣子
この頑固三つ子の魂かも知れぬ　弘子
魂のこころ残りか夢が呼ぶ　茶子
水漬く魂また八月十五日　節子
魂に点火現世に燃えて出る　盛桜
或る日ふとよる年波へハッとする　くに子
土産屋で他人になろういい夫婦　孔美子
カナクギの文字だがとてもあたたかい　みさ子
人文字を描くほど人が集まらぬ　はるお
忍の字が亡母の面影と重なる　実満
目には目をくさび形文字語りだす　小鹿
忠孝という字を辞典から探す　螢

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

立て前の金婚式の渋い酒　信男
国連に敗戦国の重い枠　黒兎
枠はめず自由にゆっくり生きてます　禮子
外枠を走らされてる糖尿病　契子
とりあえず寺社の前では手を合わす　禄骨
助けてと手を合わされて聞く願い　久子
いただきます小さな孫の手合掌す　雪子
合掌の形くずさぬ棺の父　勇治
過去を捨て空缶拾うホームレス　長一
にじり寄るタクシーだけは拾うまい　則彦
ハローワークにきっといてはる拾う神　螢柳
からっぽの墓父さんの終戦忌　春代
自民党二つに割ってする解散　柳童

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

ママの愚痴やさしく聞いてるパンの耳　好栄
やさしさをくれる絵手紙抱いている　伸子
優しさに釘一本はさしてある　はるみ
優しさへ軽い指切りしてしまい　かつ子
うたた寝に優しい亡夫が話しかけ　聖子
優しさにふれた日暮れの風の彩　恵美子
誤字脱字我が一生のリズム感　博利
雑念の動き捉えた墨の精　清泉

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

吟行の列に今年も入る幸　吐来
久米田池行基と共に水をのむ　フジ
先人の遺徳を偲ぶ久米田池　庸佑
聞き上手今日も傘寿が光ってる　ダン吉
操子句碑善意の形して座る　みつこ
あと少し終点までを鈍行で　喜久子
あの町もこの海辺にも降りてみる　アヤ子
なぜいそぐ鈍行の旅また楽し　静子
わが歩み鈍行だったよしとする　昭平
目的地着く頃鈍行輪ができる　獏沓
鈍行を支えてくれた妻勝気　美喜
鈍行にのればなつかし国訛り　ヨシ枝
鈍行のおかげ見えないとこも見え　重人
鈍行の青春切符よ今一度　久仁子
鈍行の中で見つけた青春賦　悦子
鈍行によく似たボクの半世紀　いさお
鈍行の訛りが温いぶらり旅　恵勇

乗りかえせず鈍行のまま来た頑固　昭子
鈍行に乗り人情に会いに行く　泰子
デモのない巷に国の平和ボケ　一知
労働歌もう歌わないデモの列　志洋
原禁のデモなら行こう白い鳩　りつえ
デモしてる内に会社が消えるかも　一壺
先頭と後尾で違う顔の相　かつみ
ノンポリもデモに行かせた熱い渦　章司
ヒロシマとナガサキ向けてデモが行く　敏
賃上げデモ僕もしたいと言う課長　耕策
返り血も浴びる覚悟のデモにいる　美代子
反核のデモに白い眼つき刺さる　扶美代
パンを食うために歩いたデモ参加　たけし

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

靴脱いで長い付き合い感謝する　千恵
常識を脱いで自由を謳歌する　紀乃
足もとの老い思い知る草の上　しづ子
揚げ足を取られて司会行き詰まる　東園
格好よく見せたい靴に足かまれ　幸子
あでやかに運ぶ足並み阿波おどり　勝巳
年齢を重ねる姿子に見せる　年代
子はすでに子の親となるかき氷　薫
雨上り芙蓉咲いて立ち姿　正子
暑気払い蝉のシャワーの通り抜け　守弘
無花果が熟してヒロシマ巡り来る　武庫坊
ささやきへ割り込むように蝉しぐれ　宏一
一時間二本の市バス遅れてる　昭三
木製のベンチに枯れた影二つ　寛之

高知川柳社　川竹　松風報

ユラユラと一円玉が溺死する　功
廃船を沈め魚の家にする　暖
沈んだらいかん酒でも飲みなはれ　孝雄
日雇いの身にやっとこさ陽が沈む　快風
生命線真ん中あたりが沈んでる　愛宏
山菜の香りたっぷり母の味　典雄
胃袋が二馬力になるバイキング　京子
残り物ばかり並べて主婦の昼　圭風
カロリーの計算ばかり味がない　則子
体調は母の食事の量で知り　和江
侘しさを小皿に分けている食事　美々
ごはんよと呼んで見たいな遠い子等　まき子
夕食に今宵は父の席が空き　松風
口当りの良さについつい騙される　幸子
ハイカラなメニューを盛った嫁の膳　てるみ

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

争った後の気持ちは砂をかむ　幸
争いは聞かぬふりする利口もの　英子
争いの後かもしれぬ流れ星　畔
争わず譲って心癒される　政子
争いを他所に地球はただ自転　淞丘
争って鳴く蝉たちの自己主張　喜美子
太陽と雨をもらって生きかえる　邦代
太陽が居るから私生きられる　治代
太陽の笑顔をもらい種を播く　和歌子
太陽にたっぷり汗をもらう仲　たけし
太陽を沈め二人の夜にする　茂美
色ちがいの精を太陽からもらう　螢
裸銭並べ屋台の味を呑む　房子
浮き沈み裸で知った世の情け　きみえ
裸になると不器用になる男　小鹿
人間を演じています素っ裸　紫晃
たっぷりと裸の心お見せする　多喜
欄外に裸の声が載せてある　知恵子
夏の夜に掬った金魚ドラマ生む　玲子
宍道湖の夕日ドラマを語り出す　注湖
エンディングロールに消えてしまいそう　芳山
脳活にイケメンドラマチェックする　幸子
魔が住むという九回裏にあるドラマ　スズコ
ノンフィクション送られてきた宇宙から　繭
すぐとれる場所に辞典はおいてある　ちえこ
衰える脳に活気をくれる辞書　桂子
未だ卒寿未だ卒寿だと辞書を繰る　多賀子
浅知恵を正してくれた広辞苑　静恵
愛の辞典私の命もえている　蘭水
新しい辞書も古びたのも宝　叮紅

川柳クラブわたの花　井尻　民報

恋人に逢いたい時の遠い道　はじむ
ちらちらと上目遣いがいやらしい　宏至
失恋を覚悟の上のプロポーズ　ミツ子
脳に水ひそひそ老いの英会話　君江
涼風を送るうちわの素朴な絵　宏
ナツメロをうっとりと聴くひとり酒　一風
新入りのナース素朴な丸い顔　欣子
暑中見舞いピンポン玉が直ぐ返る　幸枝
ひと言が濁流に立つ杭になる　晴美
惜しまれて去った球児は闘志秘め　俊子
空梅雨で沈んだ役場眩しそう　浩三
オーワンダフル世界遺産に知床ぞ　(本)たえ子
茶を一杯飲んで策練る四面楚歌　(赤)妙子
よく目立つ杭が一番効いてない　ますみ
縁遠い娘に気を遣う親心　敏男
まだ欲が時にちらちら顔を出す　いつふみ
百七の命を惜しむ献花台　義明
編み出した黄色ゴッホの命なり　ふりこ
惜しまれて看板おろす夫婦店　知佐子
飾らない素朴な人に気を許す　美代子
追うほどの人ではないと負け惜しみ　民
覚悟をばいつもさされるサラリーマン　正春
大声でひそひそ話老夫婦　八寿子
遠くてもいとわぬ父母の墓参り　たか子
気になるが近くて遠い親の家　愛子
卒寿の母ひそひそ話よく聞こえ　博子
補聴器で内緒話はやめなはれ　耀一

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

最高の宝健康だと思う　正坊
知る限り誰も当らぬジャンボ籤　尚士
体調を酒と煙草に問うてみる　早人
今日はまだノルマ果たせぬ万歩計　庸佑
居ると居ないでムードが違うさすが母　石舟
歩けないそれで気がつく事もある　啓生
出典に惹かれて好む座右の銘　求芽

書き出しは体調如何で出す葉書　英子
電池切れまでは黙って時刻む　満寿巳
悪態にさすが女将の腕さばき　知香子
手を取って歩いた道に子らが立つ　巴子
出しゃばって見たが中途で腰くだけ　萬的
おしゃれして行くあてもなく黄昏れる　タミ
皆御破算年金福祉拉致外交　禄骨
降り出したけど平然と歩いてる　寿美子
友情に変りつつある夫婦愛　玲子
さすが母愚痴をさとされ知恵もくれ　都代子
時計より私の捻子が緩みだす　慶子
散歩道無心になれと蝉しぐれ　寅次郎
こつこつと歩く相手は侮れぬ　重人
出張先銘酒なければいきません　勇治
一歩一歩治療中です堪えてます　春
ライバルに調子合わせていた不覚　幸雀
調子よく手拍子そろう盆踊り　高栄
なるようになると一歩を出す気骨　隆
歩きたい歩けないから歩きたい　則彦
上手ければさすがお歳と褒められる　見清

翠洋会　谷口義報

あんころ餅夢にまで見たシベリアよ　久峰
安全牌にぎる男のふところ手　正坊
安穏に暮らす年金むしりとる　照子
無視される寝ないで練った僕の案　孝一
おぼつかぬ暗算ぴったりレジの前　絹子
水だけはたっぷり取って水太り　日の出
水を下さい心の渇き止まるまで　理恵
どちらかと言えばお水が有難い　義
自転車に初めて乗れたうれしい日　蕉子
自転車操業ばれてしまった大企業　さと美
年金がまんまと化けた三輪車　志華子
泣き事は言わぬ夜学へ踏むペダル　石舟
秋の風赤い自転車島めぐり　会美
毎日乗る自転車なのに錆びている　桃花
チャリンコで歴史街道道ひと巡り　満作
自転車を漕ぐと地球が回り出す　昭
突っ走るペダルに架けた恋デート　舞夢
歩道にてじくざぐ自転車無法者　れんげ
神の名が違っただけで敵味方　尚士
盆の経呼吸つづかぬ夏の風邪　叡子
会社での贅肉だったらしい僕　千梢
リハビリにファイトファイトと孫の顔　恭昌
九回裏あと一点を追いかける　捷也
胸底にファイトを秘めている笑顔　みつ子

倉吉川柳会　竹信照彦報

戦争はいやだいやだと青い空　幸子
雷に空爆された盆おどり　石花菜
空爆の後片付けは雨だった　螢
親と金限りがあるのやがて空　勝誉
爆風を受けて背負った消えぬ影　龍枝
他人事と割り切り交わす空返事　悠子
人の価値宇宙行く人テロ自爆　日出子
穂の垂れるほどの値打ちがない土下座　萩江
物干竿に腑抜けた影がぶら下る　季芳
久々に心身垂れて聞く法話　康子
緞帳がゆっくり降りてまだ拍手　よしえ
垂れ幕の陰で泣いたり笑ったり　和子
雨垂れの音に誘われ昼寝する　京子
紅白の垂れ幕ゆらす福の風　きみ子
よーだれを垂らして元気うちの孫　照彦
饒舌と強心臓が妻の武器　(西)喜美子
強心臓でないと政治家つとまらぬ　鬼一
心臓がいかり高鳴る原爆忌　重忠
心臓にまだ生きるよと言い聞かせ　瑞子
心臓も世間の風で強くなる　(前)喜美子
心臓は毛だらけ脳はしわがない　玲坊
心臓破りの丘で勝負を決めてやる　かつみ
口紅に蜜ひそませていたらしい　完司
泣きなさい涙やさしい蜜になる　修
蜜月も遠く夫婦は水になる　芳光
大脳が秘密もうそも持って行く　賀寿恵
罠の蜜いくら舐めても底がない　次男
蜜月が老境今も続いてる　泰輔
楢山へ秘密三つ四つ持って行く　和枝
振り返る夢幻のハネムーン　酔芙蓉

富柳会　池森子報

風みどり最短距離で待っている　和子
待つことに慣れた男の広い視野　鐘造
腰据えた目線確かな綱渡り　一慧
開き直ってまっ直ぐに待っている　順子
突風に裾より大事アデランス　淳司
謝ってとても静かに罠をかけ　奈保美
路面バスアリバイひとつ乗せている　アキ

君となら暗夜行路も気にならぬ　深雪
絵手紙の裏面までも愛である　萩乃
絵を抜けてわたしひとりの彩を溶く　鬼焼
胸に棲む母おだやかに旅山河　ひろこ
負けて勝つことも覚えて大ジョッキ　信子
安心はいつも聞える妻の声　宏至
やっとこさ活路ひらいた汗の量　ダン吉
父の日の重たい言葉ありがとう　隆彦
突然に友の来訪夏の彩　英子
突然の客歓迎の昼御膳　冬虹
三輪車路地から夏が転げ出る　夕子
この家は俺のものだと大の字に　高鷲
傷口に沁みる情けと止まり木に　初太郎
駅前のきまって駄駄をこねる路　あかり
桎梏に解き放たれる定年後　正典
引き算の幅をたたんで華の老い　巳代一
どの路を行っても終着駅に着く　扶美代
擂鉢の底に沈めているマグマ　浩子
戸を開き南の風を迎え入れ　義彦
一人旅芭蕉の残り香と対話　奏子
待っていた余生退屈してる暇もなし　伸雄
乾杯の御託を聞いているグラス　欣之
梅期最中おんな一人の黒蛇の目　森子

むらくも川柳会　毛利幸報

選挙戦人はどよめき物動く　定子
逆転の勝利ファンをどよめかす　幸
どよめきのドラマ渦巻く人生譜　彰
一瞬のどよめき去って紙吹雪　信夫
どよめくもまたもゴールをかするだけ　美保
ヨン様にどよめく女見苦しい　克子
その時のためにと母の知恵袋　恵美子
夏盛り味で涼取る冷やっこ　ます美
複雑な世界に生きて探り合い　明朗
暗闇に蛍の乱舞目を見張る　寿
解禁を目前にして逝った友　昭子
頼られて頼って生きる二人です　ふさえ
懸命に生きる十指にきざむ詩　喜美
愛嬌は捨てて正面向いて行く　かずこ
白魚の指どきどきと絡ませる　秀夫
白波に夏の心をうばわれる　蘭水
熟年の色かく柿の彩を着る　瑞枝
緑風が眠りを誘う昼下がり　俊夫

川柳塔みちのく　小寺花峯報

明日もまた生きよと夕陽燃えている　きよし
初対面伝わってくる温かさ　ヒサ子
孫をだく最初はおっかなびっくりで　てる
最初から人生劇場面白い　隼人
太陽に向くひまわりのしたたかさ　順風
鳴き砂が好きでまた行く土踏まず　銀波
僕の子だ確信してる土踏まず　ふさゑ
運動会みな太陽の子に拍手　花匠
晒しても白くならない疵がある　愁女
たいくつな鏡にさらす二心　朴人
許さないうちに一番星が出た　黙人
裏の裏読んで一歩が踏み出せぬ　岳水
雪解けてまた曝される罪の彩　慕情
太陽がウインクしてるまた明日　花峯
太陽がプレゼントする皺と染み　一花
亡母の土恋しくなった土踏まず　劭
太陽の真下に咲いたゴッホの絵　五楽庵

岬川柳会　八十田洞庵報

ノーベル賞陰で流した汗の嵩　みやこ
知りもせずちょっかい出してるお人好し　桜琴
ごみ出しにうっぷんも詰め空にする　富美子
ドラマだとわかっていても涙出る　とみ
肥えすぎた政府へ特効薬は何　貞夫
わが人生アルジェ旅立つ金の鞍　鉄男
年金はお玉ジャクシが足を出す　洋子
ダムの底水神さんはずっと留守　和美
饒舌の中にたっぷり皮肉あり　茂平
近松の情け人形袖ぬらす　洞庵
聞き流す事多くして今日も暮れ　令子
刺客など恐い言葉の出る選挙　年子
鼻声で悩ましい妻花粉症　房枝
風船が風とワルツを踊ってる　珠子
おふくろの温もり欲しい核家族　里子
思考回路オーバーヒートする猛暑　俶子
じっくりと糸たぐり寄せ母の味　孝子

城北川柳会　吉岡修報

どんぐりも育ちざかりの夏休み　恵子
輪の中で一人間抜けた羅漢なり　叡子
大ジョッキ持てば男は隙だらけ　一歩
飲むほどに笑い上戸な声上がり　春蘭

先手必勝なのに先立つものがない　柳弘
山奥に手紙出すなと民営化　順三
辻褄の合わないままに陽が落ちる　ひさ乃
父ちゃんが酔ってる話合わせとこ　利昭
天国で夢を拾った宇宙服　志華子
海鳴りを聞いて別れを決意する　倫子
流し目の色気に酔うている女傑　朝子
糊付けの浴衣にすっきり襷がけ　達子
常識に合わせず生きる事にする　美智子
ひょっとこの顔が怒って笑われる　とし子
ちっぽけな愚痴は捨てろと波の音　萬的
色気など失せた女を妻と呼ぶ　弘風
気を合わすつもり全くない総理　正
寝苦しさ団扇の風で我慢する　タカ子
こってりと怒りあっさり忘れてる　昭子
情報の海で火傷を負っている　典子
クールビズこせこせ言うな男だろ　あやめ
俄雨幹事の機転試される　はじめ
こってりと絞られてから酒になる　集一
口裏を合わして罪を意識する　求芽
輪の中で歩幅を合わす宮仕え　重人
権力へ色気を出してから孤独　和夫
反日は民の目そとに向ける策　桂作
さとらせず顔にも出さぬ片思い　ルイ子
モノクロの過去はとっくに時効です　千里
マスコミのレンズ涙を待っている　修

川柳塔打吹　大森　孝恵報

裸ン坊の笑い弾ける水遊び　公恵
友来る裸同士で酌みかわす　滋
丸裸いやおう言えぬ手術台　勝憲
あの世には遺産残さず丸裸　紀美恵
服縫って小便小僧に着せてやろ　久芽代
訥弁に胸の中までさらけ出す　芳光
見栄を張り帳簿合わせで膿が出た　貴恵
見栄張ったブランド品も馴染まない　龍枝
見栄はって中流の風あびている　三津子
一国の総理の見栄で総選挙　照彦
見栄ですする正座に脛が泣いている　節子
見栄はったツケで財布に秋の風　よしえ
お祝儀に見栄を張ったか火の車　美代子
生きてゆく隙間に見栄をつめている　螢
白寿まで生きてこの世を楽しもう　芙美子
この技で生きた証しを残しとく　たけ代
あの森のどこかに逃げた栗鼠はいる　博丈
森の中ポッカリはまる穴がある　善江
鎮守の森おみくじは大吉ばかり　玲子
六根清浄三徳の森にこだまする　重忠
夏祭り太鼓が森に鳴りひびく　富恵
虫たちが鎮守の森でコンサート　石花菜
父の背は私の生きる道しるべ　美知江
世界一生きてよいやら悪いやら　和子
何時までも生きて憎まれ口たたく　幸子
梨の木と生きる喜び一世紀　禎元
まっすぐに生きていますとお月様　京子
万華鏡の茨にさされ生きている　克枝
百歳のはつらつとした生きぼとけ　玲坊
百選の森に天女が舞い降りた　孝恵

川柳ねやがわ　森　茜報

ふる里にまだ母親の海がある　鈍甲
何事も呑んで穏やか母の海　高栄
蛸つぼを出た瞬間を射止められ　日出子
夕映えの海に佇み人を恋う　一炊
旅土産海に沈んでゆく夕日　恵子
自惚れの海で片足すくわれる　たもつ
韓国産日本産も同じ海　修
一回も海に入らぬ超ビキニ　弘一
便利さに押されて怠けてツケが来る　あやめ
産まんかて男便利に親になる　とし子
便利さに慣れて感謝を忘れかけ　洋
役立ててくださいわたくしをどうぞ　ルイ子
反日に無視という手もございます　九好
とうとう妻も俺を相手にしなくなり　勲
一歳の真っすぐな目を無視できぬ　ただよし
無視されぬように赤ちゃん大泣きし　忠央
夕立に結ばれている赤い糸　頂留子
初恋の告白をした糸電話　弘風
信頼へこころの糸を結び合う　朝子
手作りの雑巾だから手になじみ　かすみ
飾っても生地に合わない釦糸　亜成
親と子を繋ぐ昭和の糸電話　仁清
生き生きとマリオネットが踏むタップ　庸佑
コスモスの風に揺られて恋終わる　れい子
宝くじ少し気合いを入れて買う　一風

ケーキ屋に男が一人並んでる　利昭
紫陽花が重そうに咲く雨の朝　三郎
ごみのない世界遺産へ拍手する　博泉
民営化よりも外交ちゃんとせよ　勇太朗

いずも川柳会　佐藤治代報

予約したご飯炊けている平和　知恵子
二ツ三ツ歳を削ってする予約　美江子
すすり泣く声にマイクを近づける　彬
微笑みの出来る老後を予約する　徳子
エアコンも少しバテ気味休ませる　圭詩朗
予約した豊かな老後おぼつかぬ　多輝子
疲れたなあ大きな声で言ってみる　治代
再診の予約に痛む胃のあたり　ちえ
群れにいて人の言葉に疲れてる　すみこ
お疲れの靴を大事にしてあげる　玲子
真っすぐな道で疲れるキリギリス　久子
酔うほどにマイク秘密を喋り出す　幸
不揃いの花もやたらに咲きほこる　好子
蛙の子少し柳を高くする　桂子
マイクには口をきかないことにする　富恵
ひまわりも疲れが出たか頭たれ　テル子
雨を待つ蛙ストレス溜めている　満江
泣いている顔にマイクは無表情　まこと
白色青色やたらと迷うのも女　芙佐子
あれ以来やたら黄色を予約する　昌枝
玉音の声はマイクも泣いていた　多喜
予約などしないで渡る虹の橋　歌子
彦星に会える席なら予約する　寿美
ふる里の海で心の疲れとる　房子
マイクでは言えない私の心　文子
予約にも一つ二つの穴がある　蘭水
おねがいのマイクは風を切ってとぶ　きみえ
望外なお世辞聞くのは疲れます　多賀子
遠蛙退院の日が近くなる　章峰
アアしんど彼は来なんだ終列車　茂美

川柳さんだ　北野哲男報

おはようの朝の五文字に癒される　開子
五分粥が旨いと思う回復期　順子
雷が落ちないかしらヘソルック　歳子
薬より効くお見舞の温かさ　一之
欠伸するテレホンカード箱の中　雅司
年金を出すカードなら使えます　房江
キャッシング監視カメラに睨まれる　朋月
妻というジョーカーだけが手に残り　藤朗
夏痩せも期待外れで秋になり　章子
わだつみの声が聞える敗戦忌　千代
雑踏を泳ぐ切ない顔をして　忠
金メダルとった水着の怒り肩　正和
笑顔という強いカードを持っている　たもつ
犬掻きで句会遊泳しています　哲男

堺川柳会　河内月子報

自分から戦力外と告げて散る　公誠
相談を後悔させる生あくび　時雄
散り際に微笑む力だけ欲しい　五月
恋人の頃と比べないでほしい　扶美代
みな決めてから相談に来た二人　冬虹
散り際の話に心向いて来る　梓
妻と書くはずがうっかり毒と書き　萠
星空と話してわたし透明に　半銭
美人にもゆっくり老いはしのび寄る　俶子
毒少し振って話に味を付け　文
毒舌の中の憂いを見落さず　楓
初恋は前歯が抜けた年の夏　八千代
お世辞より君の毒舌あたたかい　みつこ
毒のない夫婦で欠伸うつし合い　かりん
うちの娘は心美人でございます　小雪
カナヅチやから散骨は山にして　好
散らかった机で仕事よく進み　玄也
三幕目辺りで夫権逆転す　潤子
七彩の声も出せます喉仏　泰子
笑い皺相談なしに増えつづけ　日の出
手土産に負けて難題背負いこみ　恵勇
何騒ぐ星の瞬きほどの世で　鐘造
ライバルと思っていないのが挑む　朋月
散り急ぐ立派な種を残すため　舞夢
見つめないで私はナイーブな女　千代
想夫恋男のロマン追いつづけ　なぎさ
ありがとう堪能したと花が散る　深雪
美人より風邪を引かない妻がよい　さくら
結論を抱いて意見を聞きにくる　つづや
生きること散ること神に問い続け　篤子

—2005—

文化祭吹田市民川柳大会

日　時　10月23日(日) AM11時開場 (多忙者9時から受付)
場　所　吹田市文化会館メイシアター3階
参加費　1,500円（秀吟賞・参加賞・軽食呈）
宿　題「　橋　」　有田　一央選
「連想吟」Ω　辻　葉選
「化　粧」　大野佐代子選
「　声　」　大内　朝子選
「裏　目」　三好　聖水選
「下　駄」　片岡　湖風選
アトラクション　投句締切後、太鼓演奏をお楽しみ下さい。
見学について　一般市民の方どなたでも無料見学できます。
当日著名川柳家の作品など展示してあります。
懇親宴　15時20分頃から開催。会費4000円(当日)
希望者は10月15日までに下記へお申込み下さい。
申込先　坂本晴美　TEL・FAX (06)6384-2466
太田　昭　TEL・FAX (06)6821-6202
事務局　〒565-0851 吹田市千里山西4-37-1-401
太田　昭
主　催　吹田川柳会、吹田市文化団体協議会他

岸和田市文化祭参加

第55回 岸和田市民川柳大会

日　時　10月16日（日）12時開場
会　場　岸和田市立福祉総合センター1F
電話 0724(38)2321
お　話　牛尾　緑良（川柳塔わかやま）
兼　題「記　録」　加藤　基選
「仕上げ」　吉岡　修選
「詫びる」　宮西　弥生選
「だんじり」　三宅　保州選
「専　門」　梶川雄次郎選
「流　行」　前　たもつ選
各題2句・出席者に限る・席題なし
締　切　13時30分　披講　14時30分
会　費　2000円(参加賞・大会誌呈・軽食あり)
賞　文化祭賞・文化祭奨励賞・操子賞・きしせん賞
懇親宴　4000円（17時～19時）定員30名
申込み　岩佐ダン吉　TEL&FAX 0724-28-0325
井伊　東吉　TEL&FAX 0724-44-3227
主　催　岸和田市・岸和田市教育委員会
連絡先　電話 0724-43-2072　長谷川呂万

倉敷市文化祭

第14回 天領倉敷川柳大会

と　き　11月3日（祝）10時開場
ところ　倉敷市立美術館3階講堂
JR倉敷より徒10分　TEL 086-425-6034
参加料　1500円（発表誌呈）
開会13時（昼食は各自でお済ませ下さい）
兼題と選者　各題2句・11時30分締切
「前」篠原　和子・東　おさむ共選
「取」長島　敏子・小島　蘭幸共選
「切」安東千世子・土田　欣之共選
「残」山下　芙美・新家　完司共選
席　題「　　」　内山　照子選
主　催　天領倉敷川柳大会実行委員会
問い合わせ先
〒710-0061 倉敷市浜ノ茶屋1-1-3
坂井半升 TEL・FAX 086-424-5732

第28回 神戸川柳大会

日　時　10月29日（土）午前10時開場
場　所　兵庫県民会館9F大ホール
TEL 078-321-2131
JR元町、阪神元町、地下鉄県庁前
課　題　出句締切11時30分・開会13時
「灘」　小山　紀乃選
「西」　廣嶋　英子選
「湧く」　樋口由紀子選
「郷」　井上　一筒選
「宮」　泉　比呂史選
「米」　平山　繁夫選
「酒」　大森　一甲選
各題2句、席題なし、欠席投句拝辞
会　費　2000円
賞　各題秀句に呈賞
主　催　神戸川柳協会
後　援　(予定)神戸市・神戸市教育委員会
神戸市議会ほか

平成17年度川柳塔碑合祀祭実施要項

於　高野山大霊園

日　　時　11月12日（土）雨天決行
集合場所　南海電車「なんば駅」３階中央改札前
集合時間　午前９時30分（９時50分特急に乗車）
会　　費　５０００円（交通費、昼食費）
申し込み　10月10日までに本社事務所宛

○別の交通手段で参拝される方は、その旨川柳塔社へご連絡の上、12時までに直接大霊園川柳塔碑前（奥の院下車）にお越し下さい。
（大霊園事務所　TEL 0736-56-2966）
○遠方の方で宿泊希望の方はお申し出下さい。
○帰りは16時16分高野８号に乗車、なんば着17時49分の予定

合 祀 者（敬称略）

寺井　東雲・月原　宵明・松川　芳子
中澤　伽羅・瀧井　　勝・長谷川　淳
小池しげお・工藤　吟笑・西谷　大吾
中田あい子・橘高　薫風・藤村　〆女
（以上12名）

さきごろの十四号台風の被害に遭われた皆様には心からお見舞を申し上げます。
九月六日の本社句会は用心のため中止としました。連絡の行き届かなかった方には、お詫び申し上げます。
なお、九月の兼題はそのまま十一月号の兼題とし、選者のみ変更します。

川柳塔社（句会部）

第20回 国民文化祭・ふくい2005

～実りゆたかに　出会い　ふれあい～

川柳大会　10月29日（土）10時30分～15時40分（予定）
（当日句受付・入選発表・選評・表彰式）
坂井中学校体育館

題と選者（各題２句）
「たくましい」　斎藤　大雄　選
「恐　　竜」　菅原　孝之助　選
「電　　気」　梶川　雄次郎　選

第２次選者　今川　乱魚・大野　風柳・河内　天笑
西來　みわ・森中惠美子

賞　文部科学大臣奨励賞　他多数

合同大会　10月30日（日）10時～12時
（上位賞表彰、記念講演会）
敦賀市民文化センター

事前投句は締切済

問い合わせ先
第20国民文化祭坂井町実行委員会事務局
TEL　○七七六―六七―七五〇七
FAX　○七七六―六六―四八三七

主催　文化庁・福井県・㈳日川協他

柳界展望

○第52回八尾市民川柳大会は、8月28日168名の参加を得て八尾市文化会館で開催された。当日の本社同人の天位は次のとおり。

熱い涙を流してくれたのは無口　中井　アキ

結ばれた縁をまっとうする介護　大内　朝子

○和泉書院から『大阪近代文学事典』が出版され、大阪近辺で活躍の900名以上が掲載されている。川柳塔からは麻生路郎・西尾栞先生が掲載されている。A5判344頁　価五千円

▽同人動向△

○9月4日西日本川柳大会出席のため、みつ子副主幹・楓楽副理事長ほか9名は、岡山県久米南町行。

○9月6日、私の一句の標題で松露川柳会の会員8名の句が、NHK鳥取放送局から放送される。句評は会長の小西雄々氏。

○第9回「ナンバなんなんタウン大阪弁コンテスト」大阪弁を盛り込んだ日常生活全般をテーマにした作品を募集。応募方法＝官制ハガキ1枚につき1句。住所・氏名・年齢・電話番号・職業を明記。1人何枚でも可。締切＝10月20日。投句先＝〒542―0076大阪市中央区難波千日前12―19なんなんタウン商店街振興組合内。賞品多数。発表は入選者直接。

▽訂正と削除お詫び△

○**5月号**＝115頁上段27行目、本人申し出により削除

○**8月号**＝39頁下段10行目、塾女→熟女

○**9月号**＝52頁上段11行目～15行目の谷田多美子さんは誌友　P103中段14行目、怒ったら…の句を削除

常任理事会＝9月12日(月)出席者19名　①川柳塔まつり準備の詳細検討・会計報告ほか　②六賞選考について　③役員選出再検討　④11月12日(土)17年度合祀祭について（10月号掲載）　⑤会計部、同人部、編集部、『川柳しませんか』検討

次回常任理事会＝9月27日(火)・10月17日(月)　共に13時30分から　アウィーナ大阪

あかつき川柳会

日時　**11月4日**（金）14時から

会場　国労会館　JR天満駅3分

「雲」「雀」「放浪」　各3句

投句先　〒596―0824岸和田市葛城町891―22

岩佐ダン吉

お知らせ

このたび川柳塔社から『川柳しませんか』を発行します。この小冊子ははじめて作句する人を対象としています。各地での勉強会、講座、カルチャーで活用して下さい。

なお、10月10日の川柳塔まつり参加者に見本として配布、後日各句会に数部ずつ無料で送付します。

部数が不足の場合は、十部単位で事務所までお申し出下さい。（一部百円・送料別）

川柳塔社

06―6629―6914

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	**15日(土)正午から** **第55回富田林市民文化祭** **川柳大会**	**9月号 (P.99参照)** 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
東大阪市川柳同好会	**16日(日)正午から** **第39回東大阪市文化祭** **第33回市民川柳大会**	**9月号 (P.99参照)** 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
岸和田川柳会	**16日(日)正午から** **第55回岸和田市民川柳大会**	**10月号 (P.117参照)** 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳藤井寺	16日(日)午後1時から 満点・おまけ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
川柳ねやがわ	16日(日)午後1時半締切り 運動・鏡・楽しむ・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 勇み足・曲がる・タイミング	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	17日(月)午後1時から 本物・とうとう・立てる 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
高槻川柳サークル卯の花	20日(木)正午から 凝る・不作法・うとい ハプニング	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
はびきの市民川柳会	23日(日)午後1時から 香水・肉・メガホン・「浮く」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳ふうもん吟社	23日(日)午後1時から 丸める・ダルマ・正体	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2 植田一京
川柳塔みぞぐち	24日(月)午後7時半から つらい・コーヒー・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	25日(火)午後6時から ほのぼの・べったり・沈む 無策	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブわたの花	28日(金)午前9時半から 息・汚点・遅い・かくれる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京都塔の会	31日(月)午後1時から 高・ころり・追加	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	**10月15日　締切り** **第32回記念堺まつり協賛** **紙上大会**	**9月号（P.52参照）** 〒593-8305 堺市堀上緑町２―16―３　河内天笑
城北川柳会	１日(土)午後１時締切り 渋い・未満・がやがや・自由吟	旭区　老人福祉センター３Ｆ 地下鉄千林大宮駅３番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
倉吉川柳会	１日(土)午後１時から そこ(其処)・トップ・殺す	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔わかやま	２日(日)午後１時から 鍵・条件・ハード・(鍋料理)	近鉄カルチャーセンター２Ｆ　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111―2　牛尾緑良
西宮北口川柳会	**３日**(月)午後１時から 紛れ・替える・マフラー 自由吟	**〔開催日・会場変更〕西宮北口南自治会館** （阪急西宮北口駅南西出口・西へ５分） 〒663-8202 西宮市高畑町2―82―308　西口いわゑ
尼崎いくしま	７日(金)午後１時から 遠い・味・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎３Ｆ　阪神尼崎駅南西徒歩５分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
川柳塔なら	７日(金)午後１時から 喋る・松茸・マンネリ	奈良市立中央公民館４Ｆ（近鉄奈良④出口歩５分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62―6 渡辺富子
川柳塔打吹	８日(土)午後１時から 本心・崖・進む	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879　高多博丈
川柳塔まつえ	８日(土)午後１時から 魅力・宝・矢印・ぽつぽつ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9―23―22　三島淞丘
川柳塔みちのく	８日(土)午後４時から クマ・まあまあ・売る	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ２階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民川柳会	９日(日)午後１時から ヘルシー・石・沈む・雑詠	山本コミュニティセンター内3Ｆ学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
尼崎尾浜川柳会	11日(火)午後１時から 元気・浅い・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5―2―47　田辺鹿太
ほたる川柳同好会	11日(火)午後１時から 昔・汲む・若い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル５Ｆ 〒561-0813 豊中市小曽根2―4―1　水野黒兎
川柳塔唐津	11日(火)午後１時半から 鐘・反省・終わり	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517―13　宗　水笑

編集後記

☆六章を受賞された10名の皆様、おめでとうございます。心からお祝を申し上げます。

☆ご存知のように茴香の花賞は、今回の白根ふみさんの受賞をもって19年の幕を閉じる。この欄は川柳塔になって二代目の主幹、西尾栞先生が作られた。当時は女性の活躍がやっと始まったばかりであった。

☆他にも「ひみこさろん」と名付けた、女性のみのエッセイ欄も設けて、毎月2人ずつが執筆した。栞先生がこのようにして女性の活躍の場を提供、背を押して下さったお陰で、川柳塔の女性達の今日がある。

☆しかし、世は移り今やまさに女性の時代。川柳塔の男性諸氏から「女性欄があって男性欄がないのは逆差別」との声がしばしば上がっていた。そんな訳で、4月に他界された薫風名誉主幹の偉業を、顕彰するためもあって「檸檬抄」が設けられた次第である。

☆茴香の花欄が消えてしまうのは淋しいが、女性進出という当初の目的を達した上でのことであり、栞先生はきっと喜んで下さっていると思う。フェミニストだった先生が目を細めて「よろし、よろし」と、やわらかい大阪弁で言っておられるお顔が目に浮かぶ。

☆本号の六賞発表で気がつかれたと思うが、今年は10人の受賞者のうちの8人までが女性である。このままだと、男性欄を本気で考えなければならないかも。

☆10月10日は、1人でも多くの方のご出席を、お待ちしています。（ふ）

とこひと

反省文

近所の郵便局の前の木に「郵便局の木」と立札があった。本名は多羅葉（モチノキ科）古代インドでは手紙など文字を書いたとある。他に多羅樹（ヤシ科）があり経文を書いたと辞書にあった。二枚ほど頂いて帰り葉の裏に楊枝で一句書いてみる。文字は下手でも見事に黒く浮き上がり納得。近頃は手書きの手紙を頂くことも出すのも少ない。用事は電話かメール、文字はワープロ、パソコン、漢字は電子辞書、兎に角指先だけで済んでしまう。川柳を作る時でさえワープロ。確かに便利だけれど少し罪悪感を覚えている。指紋のすり減った指で辞書を繰るのもペンで書くのも億劫と思う時もある。でも川柳と仲良くしたいのは、四角い箱を相手するのではなく、血の通った温かい言葉に出会いたいと思うからです。（古久保和子）

○『兵庫県立芸術文化センター』が、西宮市阪急電鉄西宮北口駅のすぐ南に10月22日オープンする。大中小三つのホールがあり、二千席、八百席、四百席の観客動員が出来るとのこと。それぞれのホールはオペラ、バレエ、コンサート、演劇ミュージカル、伝統芸能、舞踊など多彩なジャンルの舞台芸術作品を創造・発信するとしていて、演目は明年一月まで決まっている。おめでたいことである。

○話は少し小さくなるが、各地の句会場の確保はどうしておられるのだろうか。平均40名位の椅子と机、湯沸場があって低料金と言うと至難なことである。この条件にはまるのは市民会館、公民館等限られたものになり、高齢の方も増えエレベーターも必需となる。毎月の確保、変更の場合は難しくご担当の苦労をお察しする。絢爛豪華も必要。句会場も必要と望んでいるが、全ての条件を満たすとなれば、空論に近いかも。

○さらに話が小さくなりますが、私、十月をもちまして定年退職いたします。編集部でご迷惑をおかけいたしながら今日にいたりましたことを、お詫びいたしますとともに厚く御礼申し上げます。（よ）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（12月号）地名

都道府県
市

姓
雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

きりとりせん

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「名　簿」　（10月15日締切）

11月号発表

藤田　泰子　選 ――共選―― 仁部　四郎　選

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名		住所	〒　－	電話	－　－	紹介者	

○　年　月から半年　5000円
○　年　月から一年　9800円
該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町2－10－16　ウエムラ第2ビル202
川柳塔社（電話　06－6629－6914）
振替　00980－5－33368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「名簿」（2句）（仁部四郎・藤田泰子共選）
「鐘」　山本正光選
「反省」　珀井寛子選
「終わり」　坪井孝一選
一路集（3句）
「早い」（3句）　三宅保州担当
初歩教室

1月号

檸檬抄「呼ぶ」
一路集「犬」「暦」「変わる」
初歩教室「願い」

第57回 大阪川柳大会

とき　11月19日（土）11時開場
ところ　大阪市立北区民センター
（06-6315-1500）
（地下鉄「扇町駅」、またはJR環状線「天満駅」から3分）
会費　1000円（発表誌呈）
宿題（各題2句・13時締切・席題2題）
「袋」　前たもつ選
「戦後60年」　前田咲二選
「牛耳る」　吉川卓選
「油断」　前田芙巳代選
「鳥」　上野多恵子選
「テープ」　嶋澤喜八郎選
賞　各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主催　番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロキュウム・川柳グループ明暗・川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援　大阪市

本社11月句会　7日(月) 午後1時から
兼題「動く」「芯」「絹」「浅い」「焼く」

第24年度 夜市川柳募集

第5回「肌」　住田英比古選
ハガキに3句　10月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇五年（平成十七年）十月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九四一号 川柳塔 十月号 定価 八百円（送料 八十四円）

鳥取県総合芸術文化祭
第29回 鳥取県川柳大会

とき 10月30日(日) 10時開場 13時20分開会
ところ 米子コンベンションセンター
「ビッグシップ」JR米子駅下車 歩3分
兼題と選者（各題2句・席題なし・出句締切12時）
「指」 福原 たかし 選
「家」 牧野 芳光 選
「器」 徳田 ひろこ 選
「車」 小林 由多香 選
「釘」 恒松 叮紅 選
「波」 濱野 奇童 選
「息」 泉 比呂史 選
「笑」 河内 天笑 選
表彰 鳥取県知事賞ほか
会費 2、000円（作品集・昼食呈）
欠席投句 1、000円 9月30日締切、用紙自由、作品集呈
事務局（投句先・お問合わせ先）
〒689-4201 西伯郡伯耆町溝口757—3
小西雄々方
鳥取県川柳大会実行委員会 宛
TEL 0859—62—1520
主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・鳥取県
後援 米子市・新日本海新聞社

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703—8